

# カズマがクレアと結婚 する話

てね

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

カズマとクレアのカップリング二次創作です。恐らくカズマとクレアのカップリングの二次創作は日本では私が初めてじゃないでしょうか。作品の激賞や酷評は遠慮なく送ってください。

第1章はマジで面白くないので、第2章から読むことを強くオススメします。

本編完結しました！（2023/06/13）

# 目次

## 第1章 カズマ編

この誘拐された王女様に救済を！

1

この二人組に仲裁を！

17

この護衛と事件の捜査を！

42

この誘拐犯と決別を！

60

このか弱い乙女に相談を！

77

この誘拐犯に追求を！

102

この闇の悪魔に天誅を！

121

このハーレム生活にさよならを！

148

この二人組に恋情を！

169

## 第2章 クレア編

この恋する乙女に戦いを！

184

この王女様と友情を！

212

この哀れな少女に救済を！

233

この恋敵に報復を！(R18)

247

この恋の行方に祝福を！(R15)

274

愛する人と婚姻を！

305

この二人の花嫁に選別を！(R15)

319

第三章 カズマとクレアのその後

345

この恋人達に祝福を！

345



# 第1章 カズマ編

この誘拐された王女様に救済を！

(カズマ目線)

俺はハーレムを作ろうとしていた。俺のことを好きな女が山ほどいるからだ。

この国で佐藤和真の名を知らない人はいない。なぜなら最弱職の冒険者でありながら魔王討伐という偉業を成し遂げた人だからだ。俺は名声をほしいまま恣にし、魔王討伐の莫大な財産で富を築き、日夜、冒険者達と酒を飲みながら自堕落な毎日を過ごしていた。

「俺もすっかり勝ち組になってしまったな！金も腐るほどあるし一生ニート出来るぞ！」

俺は誰もいない屋敷のソファに行儀悪く寝転び、窓から入る日差しで日光浴している。この誰にも邪魔されない一人の時間がかけがえのないものなのだ。俺は大きな欠

伸をしながらか近くにあつた新聞紙を手取る。かつて魔王を討伐した際は、俺の偉業がデカデカと新聞に載つたものだ。魔王討伐から約一ヶ月が経つた今日も俺のことが書いてないかと気になった。

「えーと、『今年で五人目の行方不明者。大人の女を狙う誘拐犯か。犯人は自身のことを“変態紳士”と名乗つており……』何だこの記事、俺のことが書かれてないじゃないか。」

新聞に書かれていたのは誰も興味のない誘拐事件の話だった。こんな記事を書くくらいなら俺の魔王討伐のエピソードを書いてくれた方がずっといいだろう。俺は新聞社に抗議の手紙を送る決意を固め、数時間ぶりにソファから起き上がる。確か俺の部屋に便箋が余っていたはずだ。俺が自分の部屋に向かおうとしたその時、

「サトウカズマ！サトウカズマはいるか！」

俺の名前を大音量で呼ぶ声。声から判断するに呼んでいるのは女の人だ。ファンが遂に俺の家を発見して突撃しに来たのだろうか。モテる男は辛いなど思いながら玄関

へ向かう。俺が屋敷のドアを開けるまで、何度もドアを叩く音が響いていた。余程俺に会いたいらしい。辟易しながらもドアを開けると、そこにはクレアがいた。青いメツシユがかかった金髪といつもの白スーツだ。

「クレアじゃないか、お前も俺のハーレム要員に加わりたいのか？」

俺の言葉を聞いたクレアは声一つ発さず腰に着けていた剣を抜く。

「へ？」

彼女の急な行動に俺は間の抜けた声を出してしまう。クレアは怒り心頭な様子だ。

「アイリス様を返せえええ!!」

クレアは出会い頭に俺に剣を振り下ろしてきた。俺はスレスレでその斬撃を避ける。

「なな、何するんだよ！」

「アイリス様をどこにやった! 貴様が誘拐したのは分かっている!」

一体何のことを話しているのだ。クレアが一方的に話してくるせいでイマイチ言おうとしていることが掴めない。だが、俺もこのままクレアにやられる訳にはいかない。右手を突き出しクレアに向かって伝家の宝刀を使う。

『ステイール!』

途端に手が淡白い光に包まれる。俺の手に握られていたのはピンクの下着だ。クレアらしくない色っぽいパンツだった。

「きゃあああああ!」

悲鳴をあげるクレアを横目に見ながら、人差し指にかけたパンツをクルクルと回す。これで一件落着だ。流石に下着を奪えば、彼女ももう襲ってこないだろう。だが、さっきまでモジモジしていたクレアは再び剣を取り俺に向かってきた。

「貴様あ! 私はこれくらいで諦めないぞ! アイリス様を返せえ!」



俺はクレアのパンツを前に掲げ彼女の斬撃をガードする。クレアの攻撃により下着は真つ二つに破れてしまう。破れたパンツを見てクレアは少し悔しそうな表情をしていた。だが、そんな呑気なことを考えてる暇は無い。クレアがまだ危害を加えるつもりなら俺も容赦はしない。

『ステイール!』

俺は再びステイールを使う。今度は右手にブラが握られていた。先程の下着とセツトだったのかこれまたピンク色だ。クレアは上も下も下着を取られ、力なくその場へたり込んでしまう。

「ううっ……なぜ私がこんな目に……!」

彼女の話を知りたい所だが、しゃくりあげながら泣いておりとても話せる状況じゃない。

「クレア、大丈夫か? 下着は返すからさ。パンツは破れたけど……。」

俺の言葉を聞いて更にクレアが大声で泣く。泣いている女の子を慰めるなんて童貞

の俺にはハードルが高すぎて無理な話だ。困ってしまったって立ち往生していると門から誰かがこっそり俺達を見ていることに気づいた。目を凝らしてよく見るとアクアが俺達のことを覗いている。

「広めなきや、広めなきや……あのカズマさんが女の子の下着を剥ぎ取った上に泣かせてたって言わないと……!」

「ちよつと待てアクア!あの……駄女神……!」

俺はギルドに向かうアクアを急いで追いかけた。

+

その後、ギルドで俺の悪評を言いふらしていたアクアを無理やり屋敷に連れて帰り、クレアを慰めてもらうことにした。俺一人ではクレアを励ますことなどとても出来そうになかったからだ。

俺はクレアのいる部屋の外で待機して、彼女が泣き止むのを待った。そのまま待つこと十分。アクアがリビングのドアを開け俺を中に迎え入れる。ソファを見るとクレア

が涙目で座っていた。

「ひっ！」

彼女は俺の姿を見ると小さく怯え上がる。下着を取ったことで余程怖がられているのだろうか。そんなクレアの隣にアクアは座り、背中を撫でながら諭した。

「ほら、まずはカズマさんに謝りましょう？いきなり斬りかかってごめんなさいするのよ。」

「さ、先程は悪かった……。だからどうかステイルだけは勘弁してください……！」

アクアが珍しく大人びて見える。クレアは子供のように俺のことを警戒しながら謝ってくれた。

「まあ謝るなら別に気にしないぞ。それよりなんで急に襲ってきたんだ？脳筋のお前でもいきなりそんな事しないだろ」

俺の“脳筋”という単語に反応してアクアがキツと俺を睨みつける。彼女を虐めるなどと言っているのだろう。クレアはアクアに助けて貰いながら事の顛末を話し始めた。

「実は……アイリス様が誘拐されたのだ」

ゆ、誘拐だと。いきなりの物騒な話題に俺は身構える。王女様を攫うなんてどこの誰がそんな事をしたのだろうか。

「ただ誘拐されたと断言できる訳では無い。ここ二、三日帰ってきてないだけで実はどこかで普通に過ごしている可能性だってある。」

「それならアイリスは多分大丈夫だろう。だってあんなに強いアイリスだぞ？簡単に誘拐されるわけないだろ」

「私には分かるのだ、アイリス様がきつと危ない目に遭っている」と

「なんでそんなことが分かるんだ？」

「勘だ、私の勘はよく当たるのだ」

どんな理由があるのかと思ってみれば何の根拠もなかった。それなのにクレアは真

剣な目で俺の事を見つめていて、まるで私は何も間違っていないと言っているようなので俺は返答に困ってしまふ。そんな彼女の様子を見ていると俺もまさか誘拐なのではないかと僅かな不安が心に灯る。ずっとアイリスの護衛を務めてきた彼女だからこそ分かることもあるのかもしれない。

「てつきりお前がアイリス様を誘拐したのかと思ったのだが……。まあ違うならいい、邪魔したな」

「あら、あの事は言わなくていいのかしら？」

あの事……？という事かとクレアを見ると慌てた素振りであくアの口を押さえる。反応を見るにクレアは俺に何か隠し事をしているようだ。

「おい、一体何を隠して——」

俺はクレアに隠し事の詳細を聞こうとする。だが、既すんでのところだと思いとどまった。待てよ、今までこういう事に首を突っ込むといつも厄介事に巻き込まれていたではないか。本来なら俺は晴れの日には畑を耕し、雨の日には家で本を読むような悠々自適な生

活を送りたいのだ。ここでクレアの話を知いたら必ず面倒なことになる。ここは話を聞かずにさっさとクレアを追い返そう。

「言っておくが俺は面倒事に巻き込まれるのは御免だからな。いくら妹の為とはいえ、アイリスを探すなんて無理な話だ。」

「そ、そうか……お前の言葉を聞いて安心したぞ。アイリス様は私達王家が責任を持って探すからな。」

俺がこのままクレアを帰そうとした時、いつもの如く空気の読めない奴が口を挟んできた。

「王女様を見つけた人はアイリスと結婚できるそうよ」

「アイリスはどこだああああ！」

俺はアイリスを探すことになった。

その後中々アイリスとの結婚の話を教えてくれなかったクレアだが、俺がステイールを使う時のように手をうねうねと動かすとクレアは涙目になりながら話し始めた。

「……実は、我が国ベルゼルグの国王がアイリス様の行方不明に酷く心を乱してな……。なんと、アイリス様を見つけた人には娘との結婚を許可すると仰っているのだ。」

ほうほう、あのアイリスと結婚できるのか。いつもお兄様と言って慕ってくれるあのアイリスと……！少し前の俺なら12歳のアイリスは守備範囲外と思っていた。だが、上手く行けば俺がアイリスと結婚できるかもしれない……！そう思うとアイリスを見つめる前から心躍るといふものだ。

「ああ……この事だけは知られなくなかったのだ。アイリス様とお前が結婚する事になつてしまったら……！いや、絶対にそんな事はあつてはならない。お前はアイリス様を探さなくて良い。今まで通りニートのような暮らしを送っていてくれ」

こいつは俺のことを何だと思っているのだ。しかも、ニート扱いしてるし……。俺

だって魔王を倒す前はモンスターも倒してたし、アルバイトもしていた。今は来たるべき決戦の日に備えて英気を養っていただけだ。

「カズマさん、まさかロリコンになるつもり?」

「ろ、ロリコンじゃねえよ!」

……もしかして決戦の日というのは今日の事ではないだろうか。アイリスと結婚する為に今までの人生があつたのではとすら思えてくる。未だかつてない程俺はやる気に満ち溢れていた。

「俺もその事件を捜査するぞ!そしてアイリスと結婚するんだ!」

「ダメだ!そもそも王家の兵士でもないお前が捜査に参加など出来るわけがないだろう!とにかくこの話はなかつた事に……」

俺とクレアが押し問答を続けている時だった。

「ごめんください。クレア殿はいらっしゃいますか?」



玄関からクレアを呼ぶ声がする。俺達が玄関に向かうとそこには修道服に身を包むレインがいた。レインは俺の姿を見ると怯えた様子で身震いする。

「か、カズマ殿！その……先日、城から追い出したことは謝りますからどうか穏便に……！」

レインの姿を見て思い出したが、俺は昔このレインに記憶消去のポーシオンを無理やり飲まされ強制送還されたことがある。その後、記憶は戻ったが是非そのお礼がしたいと手紙で書いたのだ。

「白スーツといいレインといい俺の事を何だと思ってるんだ。闇雲に人に危害を与える訳ないだろ。」

「そ、そうですよね！」

レインは俺の言葉を聞いても警戒を緩めずにごちらをじつと見ている。ここまで怖がらせてしまうとは、少し自分の行いを反省しないとイケないな。

「それでレイン殿、私に何か用か？」

「実は——」

それからレインは俺に聞き取れない声量でクレアと何やら話し合う。レインの話を聞いたクレアは「なっ?!」とか「まさか!?!」とか驚きの声を発していた。何を話しているのか気になって俺が聞き耳を立ててしていると、

「で、では、私達はこれで失礼する。」

クレアが急に帰ろうとする。その行動を俺は不審に思い、手をうねうねと動かしながら彼女達に近づく。

「何か隠し事をしているのか？俺は真の男女平等主義者。俺のステイールが炸裂する前に正直に話した方が身のためだぞ。」

「ひいっ！だから私はカズマ殿に会いたくなくなかったです！クレア、何とかしてくださいー！」

「ま、待ってくれカズマ！本当のことを言うから！だからステイルだけは……！ステイルだけはやめてくれ！」

このまま二人を怯えさせても埒が明かないので仕方なく俺は手を引っこめる。その行動に彼女達は安心したのかレインが説明し始めた。

「実は……国王様が是非ともカズマ殿に捜査に協力して欲しいと仰っていて……なんでも魔王を倒したカズマ殿ならきつと娘を見つけてくれるだろうと考えているようですよ。」

ほう、まさか王様にも直々に指名されるとは。俺の名も広まってしまったものだ。

「そうと決まったら早速アイリスを探しに行くぞ！」

俺の返事を聞いてレインは澁々ながらテレポートの詠唱を始めた。

「はあ……もしカズマ殿とアイリス様が結婚することになったらどうしましょうか

……。」

「何としてでも私達がカズマ殿より先にアイリス様を見つけるしかあるまい。レイン、必ず先にアイリス様を見つけるぞ!」

クレアとレインは何やら固い絆で結ばれているようだ。というか俺だけ除け者にされていようような気がする……。

「ステイル……」

「ひいつ!」

俺はステイルを使おうとして二人を怖がらせる。なんだか楽しくなってきたなど、俺の中の嗜虐心に火がつくのを感じる。

「はあ……どうしてこんな事に。『テレポート!』」

俺達はレインの詠唱で王城へと向かったのだった。

## この二人組に仲裁を！

「俺達はお城に来ていた。アイリスの誘拐事件の捜査を王様に頼まれたため、冒険者の俺は挨拶に来たのだ。」

「いいか？決して国王様に向かって無礼な態度を取るな。お前の態度次第では首が飛ぶ可能性だつてある。」

王様がいるとされる部屋の前で、俺はクレアから確認を受ける。この事を言われるのもこれで三回目だ。

「だから分かってるよ。軽く挨拶してアイリスと結婚する約束をするだけだろ。失礼な態度なんて取らないって。」

「なぜ貴様がアイリス様と結婚することになっているのだ！とにかく国王様はとても強

い。レベルは百を超えていて、つい最近もドラゴンを一撃で葬ったという噂だ。」  
「クレア殿の言う通りです。カズマ殿の態度次第では握手の時に手を粉碎してもおかしくありません。」

王様、強すぎじゃないか? そんな相手にこれから挨拶に行くのが怖くなってきた。やっぱりアイリスの捜査なんて止めて屋敷に引きこもった方がいいだろうか。

「貴様も怖くなってきたんじゃないか? ちようどいい機会だ。国王様に会って怯え上がるお前を見るのも悪くないかもしれない。」

後ずさりして逃げようとする俺の腕をクレアがガツシリ掴み離さない。既にレインが扉を開けようとしていた。

「お、俺を帰らせてくれ! めぐみんやダクネスと最近いい感じになっているのにこんな所で死にたくない……」

俺がクレアに半ば強引に部屋に入れられると中には、マッチョがいた。筋肉隆々で血

管は浮き出ており二の腕には大きなコブがあった。普通ならこの人に会っただけで恐怖を感じるだろう。だが、俺は怖いとは思わなかった。マツチヨが泣いていたからだ。

「愛しのアイリスよ……！私を置いていかないでくれ……！ああアイリス様エリス様ア  
クア様！どうか娘を！」

マツチヨはエリス教徒なのかアクシズ教徒なのか分からないが、あらゆる宗派の神頼みをしている。その様子からアイリスを溺愛しているのが見て取れた。

「なあもしかしてだけどこの人が……？」

「はい、我が国の国王ベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・マグノス様です。」

クレア達からの話を聞いていた俺は拍子抜けしてしまった。いかにも親バカな感じの人だ。だが、その体は鍛えられており血管も浮き出ている。その内面の弱さと外見の男らしさが妙にミスマツチで不思議と怖いとは思わなかった。

「ああ、君がカズマくんか！」

俺を見るなり物凄い勢いでこちらに向かってくる。マッチョがこんなスピードで俺に向かってくるというのは心臓が悪い。

「うちの娘のことを探してくれないかい? もう三日も娘に会っていないんだ! このままでは私はおかしくなってしまう。」

王様は俺の手を握りしめたまま何度も手を上下に降っていた。その握りしめる力が強いせいで少し手が痛い。俺は王様の手を振りほどきながら苦笑いする。

「しかし、国王様、この者はただの冒険者です。魔王を倒したとはいえ、何か役に立てるようなことはないかと思われませう。」

クレアが余計なことを言つて俺を捜査から外そうとしている。

「だが、聞くところによると娘はカズマくんのことを慕っているそうではないか。娘を連れてきた者に結婚の許可を与えているしカズマくんが娘を見つけてくれると色々都



合がいいのだが。」

「この男はともアイリス様と釣り合うような者ではありません。国王様もどうかお考え直してください。」

「しかしカズマくんは数多の魔王軍幹部を倒し戦績も申し分ない。やはり娘の婚約相手はカズマくんが適任ではないか。」

「そんな事ありません！お言葉を返すようですが、この者にアイリス様の捜査を任せると言語道断です。」

「……ほう」

その時、時が静止した。

王様が相槌を打った。それだけなのに一瞬で雰囲気が変わり、その場が凍りつく。さつきまでただの親バカでしかなかった王様がとてつもないオーラを放っていた。

「……私に刃向かうつもりかね?クレア」

この王様、間違いなく強い。王様は野太い声で俺達を威圧しているようだった。俺は本能的に恐怖を感じて王様から目を離せなくなる。クレアは眠っていた虎を起こしてしまっただの。

「い、いえ!滅相もございません。国王様の命令に従います。」

クレアは慌てて発言を撤回する。彼女も王様を前にしては何も出来ないのかただ頭を下げるだけだった。

「カズマくんを娘の捜査に協力させなさい。これは命令だ。クレアもレインも良いか?」

二人は勿論刃向かうことなく王様の指示に従う。彼女達を見て王様は満足した様子だ。

「ではカズマくん、期待しているよ。必ず娘を見つけてくれたまえ。」

先程まで怒っていた王様が笑顔で俺の方を見る。この時の王様の笑顔が頭に張り付いて離れなかった。

+

その後、俺は城にしばらく滞在することになった。今後アイリスの捜査に参加する為だ。来客用の部屋を一部屋割り当てられ自由に使っていいことになっていた。

「ハイデル！ハイデル！」

「お呼びでしょうかサトウ様、食後のコーヒードでしょうか。お口直しのデザートでしょうか。デザートにはサトウ様ご要望のプリュレをご用意致しました。」

今回俺の世話をしてくれるのは前回の城の滞在でもお世話になったハイデルだ。この男は俺の嗜好をよく理解してくれて大変心地いい。

「コーヒーだけ頼む。それとクレアは今何をしている?」

「クレア様なら現在アイリス様の救出作戦に関する会議に参加しておられます。」

「よし、ならクレアのいる会議室に今朝俺が奪った下着を送り付けてくれ。」

「かしこまりました。折角のプレゼントですので綺麗に包装しておきましょう。」

流石、エリートの実事だ。主の指示にさりげなくアドバイスを入れてくれる。クレアもきつと喜んでくれるだろう。

「そういえば今朝から肩が凝ってるんだよな。ここにマッサージしてくれる人とか居ないのか?」

「それでしたらメイドのメアリーを呼びましょう。マッサージという名目で、セクハラする絶好の機会になります。」

本当に、なんて仕事の出来るやつなんだ。俺は満足気に頷く。ハイデルはコーヒーを一杯入れた後、恭しく頭を下げて部屋から出ていった。

「ふう……」

俺はコーヒをを飲みながら一息つく。これからアイリスを探すことになる。その場の流れで城にまでやって来てしまったが、大丈夫だろうか。特に王様に直々に命令されたことが怖い。もし、アイリスを見つけれなかったら俺の首が飛ぶかもしれない。

そんな風に思考が負の連鎖を重ねているとコンコン、と控えめなノックの音が聞こえた。早速メイドのメアリーが来たのだろうか。一度ネガティブな感情を捨て目の前の快楽に溺れよう。

「メアリー、ちょうどマッサージしてもらいたかったんだよ。特に下半身が凝ってるからそこを重点的に解<sup>ほぐ</sup>してほし……」

ギイツ、とドアが開けられそこに居たのはメアリーではなくダクネスだった。

「ほう？セクハラ紛いの事をしてるようだなカズマ。」

「だ、ダクネス……。こ、これは違うんだ。本当に体を解<sup>ほぐ</sup>してもらおうと思っただけで……。」

俺は冷や汗を垂らしながら必死に弁明する。我ながら苦しい言い訳だがただマツサージしてもらうつもりだったと乗り切ろう。

「……まあいい。それよりお前に聞きたいことがあるのだ。」

ダクネスは俺のことを折檻するかと思いきや、真剣な顔で俺の顔を見据えた。

「実はアクアからアイリス様が誘拐されたと聞いてな。話を聞いてすぐにここへ来たのだ。」

改めてダクネスの姿を見るとクエストを受ける時と同じ格好で、城に来るのに相応しい服装とは言えない。急いでいたからだろう。

「アイリス様は見つかりそうか? 私は領主としての仕事があるからこちらには来れないが何か出来ることがあるなら何でも言っただけ欲しい。」

「明日からアイリスを探すことになってるよ。まあそんなに心配しなくてもすぐに見つかるさ。」

「そ、そうか……」

俺の言葉を聞いてもダクネスはどこか不安そうな様子だ。……というより、さつきから俺の顔色をチラチラと伺っていて何か言いたい事を我慢しているような……。

「今から夜這いでもするのか？俺はいつでも準備出来てるぞ」

「なっ!?そ、そんな訳ないだろう！ただ私は……その……確認したいことがあるというか……」

ダクネスはどうも煮え切らない反応だ。仕方ないので俺は彼女を部屋の中に招き入れ、ベッドに座らせる。彼女に話しやすくさせる為だ。俺はそんなダクネスの隣に座り話を聞くことにした。

「ちゃんと喋ってもらわないと分からないだろう？今更どんなことを言われても大丈夫だからさ。例えば、ダクネスが夜な夜なエッチなことをしても……」

「ち、違う！私はアイリス様との結婚について聞きたかったのだ！」

俺の言葉を食い気味に否定してくるダクネス。

「アイリスとの結婚って何の話だ？」

「だから……アイリス様を見つけてしまうと……その……お前はアイリス様と結婚してしまうのだろうか？」

「……アクアから聞いたのか。」

核心を突く質問に俺は少し動揺してしまう。彼女も俺の事を慕ってくれているのでアイリスを見つけることは即ちダクネスの告白を断ることになってしまう。

「ああ、お前に振られた手前、こんな事を言いたくはないのだが……私はやはりお前が諦めきれない。本当にアイリス様を選んでしまうのか？」

ダクネスは上目遣いで俺のこを見つめる。その目は少し潤んでおり女らしさにドキツとしてしまう。昔は頭が固かったダクネスも姑息な手を使うようになったものだ。

「ならダクネスを選んでやるよ。」



俺は彼女が今一番欲している言葉を選んでやった。彼女は俺の言葉を聞いて一瞬嬉しそうな表情をしたが、すぐに怪訝な様子で俺の真意を確かめてきた。

「それは本気で言っているのか……？ アイリス様もめぐみんもいるのに私を選ぶのか？」

「ああ、ダクネスが一番だ。めぐみんよりもアイリスよりも好きだぞ。」

「くっつ!!そ、そうか。その言葉を聞けてとても嬉しいぞ……!」

ダクネスは俺を力強く抱きしめる。彼女の耳は赤く染まり顔は蕩けていて喜色満面だった。俺も抱擁を受け入れダクネスの頭を撫でてやる。

「アイリスを見つけてもお前への気持ちは変わらない。これからもよろしく頼むな。」

俺はダクネスに都合のいい言葉を並べてひたすら彼女を甘やかすのだった。

翌朝。今日からアイリスの捜査が始まるそうで、俺は珍しく早起きしていた。朝食を済ませ広間へ行くとレインが紅茶を飲んで座っていた。

「あらカズマ殿、早起きなんですね。」

「まあ今日からアイリスの捜査が始まるからな。気合いも入ってるんだよ。」

俺はレインの向かい側に座り、ポットの紅茶をコップに注ぐ。香ばしい匂いが俺の鼻腔をくすぐった。

「本当は事件の捜査に関わらないでほしいのですが……。そういえば昨日はダステイネス殿がお城に来ていましたが、何かあったのですか?」

「ああ、ダクネスと付き合うことになったんだ。」

俺の返答にレインは暫く固まる。もしかして俺の声が聞こえなかったのだろうか。

「えーと、アイリス様と結婚したいのではなかったのですか?」

「ああ、ダクネスは第二夫人でアイリスは第一夫人かな。」

「……はい？」

レインは俺の言葉が信じられないように聞き返す。俺は丁寧にも何度も同じ説明を繰り返してやった。

「だからダクネスともアイリスとも結婚しようと思ってるんだ」

レインは紅茶の入ったカップをわなわなと震わせ我慢できないとばかりに勢いよく紅茶を置いた。その勢いで中身の液体が溢れ出る。レインは立ち上がり怒った様子で言った。

「最低ですよ！浮気なんて絶対ダメです！貴方にはアイリス様と結婚なんてさせません！」

ハーレムを作るのは男の夢なのだ。女のレインには分からないことだろう。彼女の説教を適当に聞き流していると広間のドアが開けられ中からクレアが顔を出した。彼

女は俺の姿を見るなりズカズカと俺に近寄ってくる。

「サトウカズマあ!」

出会い頭に、クレアが俺の胸元を掴み顔を近づける。

「な、なんだよ急に」

彼女と至近距離で見つめ合う。普通ならドキドキする展開なのだが、相手がクレアだからそんな甘酸っぱい展開にはならなかった。

「昨日会議中に私の下着を送り付けてきたのはお前だろう! おかげで大恥をかいただけじゃないか!」

そういえばそんな事もあったな。俺としては取ったものを返しただけのつもりだったが。

「クレア殿、聞いてください！カズマ殿がダステイネス殿やアイリス様と二股すると  
言っているのです。」

「なんだと……！貴様、どこまでアイリス様を愚弄すれば気が済むのだ……！」

「待て待て、アイリスを見つけたらダクネスから乗り換えるつもりだから！二股はしな  
いって！」

元々俺はハーレムを作るつもりだったが、彼女達があまりに怒るので口から出任せを  
言ってみる。だが、レイン達は更に怒った様子で俺を睨みつけた。

「レイン、こいつをこの部屋に閉じ込めておけ。捜査は私一人で行ってくる。」

「そんな事したら王様に言いつけてやるからな！はっはっは、権力はこうやって使うん  
だよ。」

我ながらクズの発言だと思うが、アイリスと結婚するためにも仕方ないことだ。クレ  
アは凄く悔しそうな表情をしながら俺の意見を呑んだ。

「チツ……！まあいい。まずは聞き込みからするぞ。お前は私とバディを組んでもら

う。足を引つ張るなよ。」

よりによってクレアと二人で捜査するのか……。俺と白スーツとは相性が悪い気がしてならない。仕方なく俺は了承するのだった。

+

俺とクレアは一緒に捜査をする事になった。俺達は手始めに王都の貴族の屋敷に来ている。門番に俺達の名前を名乗ったらさすがに通してくれた。

「でっけえ……」

一言で言えば大豪邸だった。外から見ても、俺が普段暮らしている屋敷よりも大きい。豪邸の中に入るとメイドさんが俺達を出迎えてくれて屋敷を案内してくれた。俺はメイドさんに聞こえないようにそっとクレアに耳打ちする。

「この人は何か怪しい点でもあったのか?」

「アイリス様が居なくなつた時に丁度アクセルの街にいたのだ。可能性は低いが念の為聞き込みに来ただけだ。」

クレアの話聞きながら俺達は廊下を進んでいく。左右にはいかにも高そうな壺や絵画が飾つてあつた。裕福な家らしい。そのまま俺達は応接室のような部屋に通される。中には金髪の男が座つていた。見た目からして四十代くらいだろうか。貴族らしく余裕のありそうな笑みにピンと張つた姿勢、一見すると好印象なおじ様という感じの人だつた。おじ様は俺達を見つけると、すぐに立ち上がり丁寧にお辞儀する。

「お初にお目にかかります、シンフォニア卿。わたくし、この家系の当主を務めているアレクサと申します。」

貴族しか知らない丁寧な挨拶にクレアも丁寧に挨拶する。こう見えてもクレアはダステイネス家と並ぶ大貴族の出身だ。礼儀正しい振る舞いもお手の物だろう。

「とりあえず紅茶でも飲んでいってください。大したもてなしは出来ませんが誠意を持って対応しましょう。」

「いや、長居する気はない。今日は誘拐事件の事について話を聞きに来たのだ。」  
「誘拐……ですか、物騒な話ですね。良いでしょう、私に答えられることなら何でも言いますよ。」

それからクレアが一通り事件の概要について説明する。アイリスが突然いなくなった事を説明し、彼女が居なくなった日時にどこで何をしていたか、アイリスを見かけなかったか、他にもアイリスを誘拐する動機を持つ人間なども聞くことになった。

「……残念ですが、私はアイリス様については詳しく存じ上げません。お力になれず申し訳ありません。」

色々な事をおじ様に聞いてみたが知らない、分からないの一邊倒で一向に情報は得られなかった。俺達は出された紅茶をとくに飲み終えている。ここに来てから一時間は経っているだろう。

「それにしても豪華な屋敷ですね。」



俺は世間話をして、お茶を濁す。多分これ以上進展はないだろうし少し話してから帰ろう。

「この屋敷の大半は私の父の持ち物ですけどね。父とは血も繋がっていないのです。親が子に恵まれなかった為、私を代わりの子供として育てられただけですよ。」

この人は養子として貴族の息子に迎え入れられたという事だろうか。おじ様の顔をよく見ると目は黒色で、貴族の特徴である碧眼とは異なっている。彼の言うことは本当なのだろう。俺が何気なく周囲を見渡すと歴代当主の肖像画が描かれている横にこじんまりと写真立てが置いてあった。中にはおじ様と一緒に二十代の娘が写っている。

「綺麗な娘さんですね」

「ええ、そうでしょう。自慢の娘です。」

自分の娘を褒められたからかおじ様は嬉しそうにしていた。その笑顔に初めて親としての姿が垣間見える。

「良ければ娘さんにも話を聞かせて貰えませんか? 何といてもあまり手がかりがないものですから」

「それは無理ですね。娘は居なくなっしまいましたから」

え、と小さな声を上げてしまう。娘が居ないというのは死んでしまったという事だろうか。失言してしまったと後悔する。

「すみません、ご冥福をお祈りします。」

「いえ、死んではいませんよ。去年、誘拐されただけです。犯人は“変態紳士”と名乗っているようですが。」

“変態紳士”。その名前なら俺も聞いたことがある。新聞で見たが、確か大人の女性を狙う誘拐犯だったはずだ。

「あの事件の被害者だったんですね。失礼しました。」

俺の予想だとこの人はアイリスの誘拐に関係ないだろう。娘を持つ人で娘を奪われ

る悲しみを知っている。そんな人が王女様を誘拐するとは思えないからだ。俺がクレアに目で帰ることを伝える。この人からはもう情報を得られないだろう。だが、クレアは俺の指示を無視して貴族に言った。

「貴様がアイリス様を誘拐したのだな？」

突然、クレアが言う。いきなりこいつは何を言っているのだろう。

「ははっ、何を言っているのですか。証拠でもあるのですか？」

「ない、勘だ。」

クレアの発言に俺も貴族の人も固まってしまふ。あまりに適当な物言いに言葉を失う。それなのにこいつは顔だけは真剣だ。悪意なくこれをやっているのが一番タチが悪い。

「す、すいません！うちのクレアが失礼なことを……」

「面白い！」

「え?」

怒られるかと思つて俺が謝ろうとすると貴族は何を思つたのか手を叩いて笑い出した。呆氣に取られている俺を他所におじさんが話し出す。

「クレア殿、貴方のような破天荒な兵士は中々居ないでしょう。それに見目麗しい美貌の持ち主だ。どうですか、今度一緒にお食事でもしませんか。」

「ふん、私はアイリス様にこの身を捧げると誓つた兵士。結婚など興味はない。」

意外にもおじ様にとってはクレアの態度は好感触だったようだ。それどころかクレアを褒め称えている。

「貴様がアイリス様を誘拐したのだろう。動機は……分からないがその妙に紳士的な態度が怪しいのだ。」

「し、失礼しました!俺達はもう帰るので!」

未だに文句をつけるクレアの腕を引つ張り強引に連れていく。俺の慌てた様子を見

てもおじ様はニコニコと笑っていた。そのまま部屋を抜け廊下に出てすぐにクレアに説教することにした。

「お前はバカか！あんな失礼な態度取っておいて話を聞けるわけないだろ！」

「誰がバカだ。あの人が犯人かもしれないではないか。」

「いいや、あの人は善人だ。僅かな所作振る舞いからもいい人の雰囲気滲み出ている。とにかく次の聞き込みに行くぞ。ステイールを使われなくなければ付いてこい」

「ぐぬぬ……卑怯だぞ貴様……！」

結局俺とクレアは反発し合いながら一件目の聞き込みを終えた。このままだとそのうちバディは解散になるだろうなと諦念の心境を抱きながら豪邸を後にするのだった。

## この護衛と事件の捜査を！

おじ様の聞き込みを終え、俺達は二件目の屋敷に来ていた。二件目の家もまたもや貴族で外観は豪華なものだった。

「このの貴族は何が怪しいんだ？」

「ああ、アルダープという男を知っているだろうか？ここはアイツのいとこの家なのだ。アルダープの不正の一件で王家に諍いが出来たからな。王家に恨みを持っていてもおかしくない。」

げっ……よりによってアルダープのいとこか。アイツにはいいイメージがないんだよな。いともアルダープと性格が似ていそうで嫌だ。俺達は使用人に案内され応接室に入る。そこには、アルダープと瓜二つな男が座っていた。

「よくぞいらつしやいました、シンフォニア卿。」

アルダープもどきはペこりと頭を下げる。俺にはなく隣のクレアに。クレアにだけ挨拶するあたり、このオッサンは女にしか興味がないのではと思いつながら俺は席に着く。

「今日は誘拐されたアイリス様について伺いに来たのだ。何か知っている情報はないか？」

単刀直入にクレアがおっさんに聞く。もう少し前置きとかないのかよと思いつ俺は顔をしかめた。アルダープもどきは驚いた顔をしたもの、ニヤリと顔を歪めて答える。

「いえ、何も知りませんな。失敬、少しお手洗いに行つてきます。」

まだ聞き込みを始めたばかりだというのに、アルダープのいところ部屋を出ていく。相手がいけない今のうちに俺はクレアと話すことにした。

「この人も何も知らないみたいだな。もう諦めて次の聞き込みに行くか?」  
「……そうだな、もう少し話を聞いても良かった……」

突然クレアが黙り込んでしまう。どうしたのだろうかと彼女の方を見ると何やら真剣な様子で虚空を見つめていた。

「……………なんだと!」

「?」

今度はクレアが怒り心頭な様子で立ち上がる。さつきからこいつはどうしてしまったのだろう。急に情緒不安定にでもなったのだろうか。

「どうした、クレア?」

「お前は今の声が聞こえなかったのか?」

声……? 勿論何も聞こえなかった。俺が怪訝な様子でクレアを見ると彼女が説明する。



「今、アルダープが『あの王女が居なくなつたとはせいせいするぞ!』と言つたのだ。確かにこの耳で聞いたぞ」

本当だろうか。アルダープは隣の部屋に行つて何か喋る音は聞こえたがその内容までは聞き取れなかつた。でも、クレアの様子からとても嘘を言っているようには見えない。彼女の聴覚は俺よりずっと鋭いから、聞こえたのだろうか。そうこうしているうちにアルダープもどきが帰ってくる。

「いやはや、お待たせしました! アイリス様のご事は誠に気の毒で……」

下卑た薄ら笑いを浮かべたままこちらに来るアルダープもどき。俺が何気なく相手を見ているとヒュン、と音がした。風を斬る音。横を見ればクレアが抜剣している。この状況で剣を抜いたのか。いや、待て。問題はそこじゃない。一体何を切つたのかだ。視線を前にやると、そこには頭がカツパみだいになつたアルダープもどきがいた。クレアがアルダープもどきの髪の毛を剣で切つたのだ。

「あつ……あつ……ワシの髪が……髪が……！」

頭頂部の髪の毛だけが綺麗にハゲており、クマのような見た目も相まって中々に醜悪な姿だ。その見た目に思わず笑いが込み上げそうになるが、堪えて謝罪する。

「も、申し訳ございません！ほら、白スーツも謝れ！」

「ふん、アイリス様を愚弄する奴にはこれくらい当然の仕打ちだ。」

クレアの言い分から察するに、アルダープもどきがアイリスの誘拐を喜んだことを立て、髪の毛を切って仕返ししたという所だろう。アルダープは一時呆然としていたが、やがて我に返ったのか顔を赤色に染め、大声で怒鳴った。

「ええい！許さんぞ貴様ら！今すぐ出ていけ！この事は苦情を入れてやるからな！二度と顔を見せるな！」

俺とクレアはアルダープもどきに無理やり屋敷を追い出される。二件目の聞き込みもまた厄介事を起こして帰ることになった。

+

聞き込みを終えたその日の夜、俺とクレアはレインに説教されていた。

「全く！初対面の方の、髪の毛を切るなんて言語道断ですよ！ちゃんと反省してください！」

「……はい」

クレアはレインの言葉に落ち込んだのか元気がなさそうに返事する。弱っているクレアを見るのは新鮮で中々ないことだった。

「あのアルダープもどきは印象悪かったし頭がハゲているくらいが丁度いいと思うけどな」

「カズマ殿！そういう事を言うからクレア殿が羽目を外すのです。いいですか、そもそも貴方という人は常識が足りてないのです。普通の人ならパンツを奪ったり奥さんを沢山作ろうとしたりなんかしません。」

レインの怒りの矛先が俺へとすり替わる。個人的には今回の件は全てクレアの責任で俺は悪くないと思っている。だが、反抗してもレインに更に怒られそうなので黙っておこう。

「貴方達二人はバディなんですから、お互いに支え合わないといけません。犬猿の仲であるのは分かっていますが、アイリス様を救出するという共通の目標がある以上、協力してください。」

ぐうの音も出ない正論を次々と並べ立てられる。彼女の話を聞いていて耳が痛かった。

「失礼致します、クレア様、お時間よろしいでしょうか」

俺とクレアが説教を受けていると兵士の一人が部屋の中に入ってくる。丁度説教が中断されて俺達にとっては都合がいい。

「今、二人を叱っているのので後にしてもらいませんか？」

「いえ、とても重大な用件です。アイリス様を誘拐したという犯人から手紙が来たのです」

なんと、犯人から連絡が来たのか。俺達は説教なんかすぐにやめ、兵士が持っている一通の手紙に見入る。

『王女様は預かった。返して欲しければ明日の〇〇時に以下の場所に一億円置いていけ。場所はベルゼルグの……』

手紙には身代金を要求する脅迫文が書いてあった。お金を置いておく日時と場所も記されている。

「この手紙がイタズラという可能性は？」

「ないな。アイリス様の誘拐を知ってる者は今日聞き込みをした一部の貴族だけだ。イタズラなら手紙が来るのが早すぎる。」

ということはこの手紙は本物で、犯人が送ってきたものだ。つまり、相手の指定する場所にお金を置いていけばそこには必ず犯人がやって来る。犯人を捕まえるまたとな

いチャンスだ。

「このまま犯人の指示に従って身代金を用意していいものだろうか……。偽物のお金を用意して、犯人だけをおびき寄せるというのも手だろう。」

クレアは相手の言う通りにするか迷っているらしい。彼女は今回のアイリス救出作戦のリーダーだから慎重になっているのだろう。

「いや、ここは本物のお金を用意した方がいい。もし、お金を用意してないことが犯人にバレたらアイリスに何をされるか分からないからな。」

「……そうか、お前がそう言うならお金を用意しておこう。」

クレアは俺の意見に納得してない様子だったが、アイリスの名前を出されると途端に分が悪いと思ったのか素直に従った。彼女のアイリスへの愛の深さが身に染みて分かる機会だった。

その後、身代金の話を兵士達に伝えて今日は解散となった。俺は自室へ向かいながらクレアと話している。

「明日にはアイリス様が誘拐されたことが記事になるだろう。」

彼女の話によるとこれ以上アイリスが居なくなつたことを隠しきれないとのこと。薄々バレるくらいなら堂々と記事にしてしまふようだ。

「そんな事を記事にして国としては大丈夫なのか？不安に思う国民もいるだろう」「そのくらい分かっている。だが、事実というものは必ずどこから漏れるものなのだ。このまま隠し続けるよりマシだ。」

クレアも仕事に追われていて大変なんだな。俺は彼女にいくつか労いの言葉をかけてやる。クレアは相変わらず無愛想だったが、俺の気持ちは嬉しいようだった。そのまま歩いていると俺の部屋の前に着く。

「では、私は部屋に戻るぞ。あまり夜更かしするなよ。」

「へいへい」

クレアと別れて自室に入り、俺は大きく伸びをする。今日は疲れた。まだ一日しか事件の捜査をしてないが。クレアがいきなり相手を犯人扱いしたり、アルダープもどきの頭をハゲさせたりと色々あった。……俺が疲れた原因ってほとんどクレアのせいじゃないか。そんな事を考えていると、

コンコン、とノックの音が聞こえる。クレアがまた来たのかと思ってドアを開ける。だがそこに居たのはクレアではなくめぐみんだ。彼女は急いで来たのか肩で息をしたまま立っている。

「やっと会えましたねカズマ。」

まずお城にめぐみん一人で入れたこと、そしてこんな夜遅くに城に来たこと。どちらにも驚いたが、立ち話も悪いので一度部屋の中に入れる。

「めぐみん、一体どうやってここまで来たんだ?」



「大したことはしてないですよ。私を通さなければ爆裂魔法を使うと宣言しただけです。」

相変わらずこいつは厄介事を起こさないと気が済まないらしい。明日朝イチで俺がみんなに謝りに行くか。

「アクアから聞きましたよ。下つ端の為にカズマが四苦八苦しているそうじゃないですか。」

「まあな。可愛い妹の為だからこれくらいするさ。」

めぐみんは俺の返事を聞くと不満げに頬を膨らませた。その仕草一つ一つが可愛くて俺をドギマギさせているのが分かる。

「なんだ、めぐみん。アイリスに嫉妬しているのか?」

「ええ、嫉妬してますよ」

「……お、おう。そうか。」

めぐみんの直球な物言いは心臓に悪い。魔性のめぐみんは未だ健在のようだ。めぐみんは俺の反応を見てニヤリと笑った後、俺をそっと抱きしめながら耳元で囁いた。

「貴方が他の人の為に必死になっているのを見ると妬けてくるんですよ。少しは私の事も頼ってください。」

めぐみんの甘い声は俺の理性を弾け飛ばそうとする。これはめぐみんからも誘っているのだろうか。それならば俺が理性を保つ必要はないよな。

「捜査には私も協力しますよ。だから今夜は……」

「めぐみーん！」

「きゃっ!?!」

俺はめぐみんを押し倒し貧相な胸に顔を埋めスウハアと深く息を吸う。柔軟剤のいい香りが俺の鼻を刺激する。めぐみんは突然の事に驚いたのか身をよじらせながら抵抗した。

「ちよ、ちよつとカズマ、やめてください！今はそういう気分じゃないのです！こ、この……」

暴れるめぐみんを体で押さえつける。そのまま俺はズボンのベルトを外し臨戦態勢になつてる愚息を取り出そうとした。めぐみんの裸体も見てみたいと彼女の服も脱がそうとする。

「や、やめろおおお!!」

彼女の逆鱗に触れたのかめぐみんが一際大きな声で叫ぶ。と、同時に俺の頭に強い衝撃が加わった。めぐみんが近くにあった杖で俺の頭をぶん殴ったのだろう。それを機に俺の意識は薄れていき、最後には何も見えなくなった――。

+

「――マ殿！カズ――！――ッ！」

誰かが俺を呼ぶ声がする。そうだ、俺はめぐみんと一線を超える所だったのだ。早く

起きなければいけない。俺の意識は泥沼から這い上がるように目覚めていく。

「……クレア？」

目を覚ますとクレアが俺の顔を覗き込んでいる。心配そうな顔だ。

「やつと目を覚ましたか。今日は犯人に身代金を持つていく日だぞ。寝坊などするな。」

クレアは寝ていた俺の事などまるでお構いなしだ。そもそも昨日は何をしていたんだっけ。確かめぐみんが城にやって来て……あつ。そうだ、俺は昨日めぐみんを襲おうとしたのだ。彼女はそれを拒み無理やり犯そうとする俺を気絶させた。

「はあ……最悪だ」

改めて周囲を見渡しても、もうめぐみんの姿はなかった。恐らく俺に襲われそうになったのが怖くてそのまま逃げてしまったのだろう。

「起きて早々ため息か？ 幸運値が下がるぞ。」

クレアはそう言うが、こんな事があると流石に気分が下がる。今度めぐみんに会うときにどんな顔をして会いに行けば良いだろうか。

「なあクレア、もし俺に襲われそうになったらどうする？」

俺の質問を聞いたクレアは何を言っているんだという顔で俺の事を見る。

「質問の意味が分からないのだが……。まあ私なら剣でお前を切るかもしれないな。」

分かってはいたがクレアの意見は参考にならなかった。もっと俺への好感度が高くて魔性の女みたいでないといけない。

「昨日めぐみん殿が城に来ていたと聞いたが、まさかお前……襲ったのか？」

彼女の鋭い指摘に黙り込んでしまう俺。その態度を見て肯定と受け取ったのか彼女

は怒りを露にする。

「お前はアイリス様を選ぶか他の女を選ぶかい加減ハッキリしろ!」

「はあ……本当に最悪だ。めぐみに会わせる顔がないな……」

俺のどんよりした気持ちは海よりも深く、クレアの説教も相まって少し泣きそうになっていた。そんな俺の顔を見てクレアは不味いと思っただのかフォローを入れる。

「ま、まあめぐみん殿に謝りに行く際には私も同行してやる。お前一人では大変だろう。」

「なんだ珍しく優しいじゃないか。何か裏でもあるのか?」

「裏などない!ただ昨日の聞き込みの時はお前に色々迷惑をかけたからな……。少しはその恩を返そうと思っただけだ。」

ほう、クレアなりに昨日の事は反省していたらしい。彼女も捜査の中でいつの間にか成長しているようだ。

「ありがとな、今日こそ必ず犯人を捕まえよう。」

「ふん、言われなくてもそのつもりだ。」

クレアは俺に対して冷たいままだが、少し心を開いてくれた、そんな気がした。

## この誘拐犯と決別を！

俺とクレアは犯人が身代金の受け取りに指定した場所に来ていた。いや、俺とクレアだけじゃない。ここには、私服に着替えた兵士達が十数人と潜んでいる。俺達が犯人を待っているのは、ベルゼルグ王国の広場にある大きな噴水の前だった。周りには、ポールで遊ぶ少年少女。出店を開き活気に溢れる商店街のおじさんおばさん。買い物に来た夫婦など老若男女がひしめき合っている。犯人が指定した場所は静けさとはとても程遠い場所だった。こんなうるさい広場のどこに身代金を置いておけというのか。犯人の手紙によると、広場の近くにある木の近くに置いておくようにとの事だった。

「よし、身代金の入った鞆を持った兵士はそのまま帰れ。後は私達に任せろ。」

身代金を持ってきた兵士と背中越しに会話するクレア。指示を受けた兵士は何事もなかったかのように人でごった返す商店街へと消えていく。残されたのは広場の木に



不自然に置かれた革製のバックとそれを狩人の目で虎視眈々と睨みつける十数人の兵士達だった。

「後は犯人が現れるのを待つだけだな。」

俺は気楽に言う。なにしろこれだけの兵士が一つのカバンを見張っているのだ。例え、犯人が身代金を受け取りに来たとしても無事に帰れるとは思えない。

「気を抜くな。何か嫌な予感がする。」

「嫌な予感って……何が起きるって言うんだよ。」

「それは分からない。ただの勘だ。」

「またそれかよ……」

クレアは困った時は勘がすると言って誤魔化すのだ。聞き込みの時も彼女の勘は働いていたが、その予感は当たることなく撃沈している。

「どうせ大丈夫だろ。すぐにアイリスも帰ってくるさ。」

「……そうだな。お前を信じよう」

俺の発言にクレアは少し顔色を取り戻す。犯人は必ず来るはずだ。

だが、それから一時間経っても犯人はやって来なかった。体力のあるクレアはともかく長年引きこもりとしてニート生活をしていた俺は精神的にも限界が近い。俺は近くの本棚に腰かけながらクレアに愚痴を漏らす。

「なあもう犯人は来ないんじゃないか?」

俺の言葉にクレアは身動き一つせずじつと鞆を見つめている。相変わらず広場には子供や大人が絶えず行き来しているが、鞆に目を向ける者は誰一人として現れなかった。もう犯人の受け渡し時刻から随分時間が経っている。まさか怖気付いて逃げたのではないだろうか。

「犯人は必ず来る」

クレアは信念を持ってそう答える。これ以上彼女と話していても疲れるだけだと思

い俺は足を組みかえ、何気なく噴水の方を見ていると一人の人に目が止まった。魔法使いのようで濡れ羽色のローブで体を覆い隠している。頭もすつぽりと隠れており髪色は分からない。性別も不明だ。だが、鞆のある木の方へゆつくりと歩んでいる。もしかしてアイツこそが犯人なのではないか。

「……おい、クレア」

「分かっている、あのローブの人間だろう」

最早俺達の間言葉は必要なかった。あたりの空気は張り詰め、私服の兵士達もヤツを注視している。動きたくなる衝動を必死に抑え今か今かとその時を待ち受ける。ローブの人はゆつくりと進んで行く。噴水に目もくれず遊ぶ子供を無視し、鞆の置いてある木の傍へそつと腰掛けた。間違いない、アイツが犯人だ。

「もういいかクレア！」

「まだまだ、鞆に手をかけるのを待て！それまで耐えろ」

俺はローブの人の横から鞆を見続ける。最早俺の耳には商店街の活気のある声も噴

水の水が流れる音も聞こえなかった。ひたすらに犯人に注意する。そして犯人が鞆に手を置いた。

「今だ行け！」

クレアの声を合図に周りに潜んでいた兵士が一斉に駆けていく。無論、俺とクレアも走る。たった一人の犯人に対しこれだけの人間が捕まえようとしている。遂に犯人を逮捕した、そう思った時だった。

ゴーンと、金属を叩いたような音が響く。日本で言えば除夜の鐘の音。急に何の音だと確認しようとすると先程まで明るかった空が黒一色に染まっていく。巨大な闇は空を暗くするだけに留まらず先程まで見えていた噴水も真っ黒に染めた。何も見えない。まるで目を閉じた時のように視界から光が消えてしまったのだ。

「おい、どうなっている！クレア、大丈夫か!？」

「ああ、私はここだ。カズマ殿はそこにいるのか?」

暗闇の中で声を頼りに進んでいく。何も見えないから迂闊に走ることは出来ない。

俺は手だけを縦横無尽に動かしながら暗闇の中でもがく。だが、手の先には何も触れず、俺は腰が抜けたようにその場に座り込んでしまった。何も見えない所で進むのは危険だ。

「どうなってるのだ……急に何も見えなくなっただぞ……！」

クレアも困惑した声を上げている。犯人が何か魔法でも使ったのだろうか。いくら声を上げても暗闇は晴れることなく俺の恐怖心を蝕むしばんでいく。俺は不安になりながらその場でじつと座っている。

「大丈夫だ、きつとすぐに元通りになる。それまでの辛抱だ。」

クレアが心細くなっていた俺を元気づけてくれた。と、その時再びゴーン、と鐘の音が鳴る。それを合図にして周りの暗闇が一気に晴れていく。黒一色で染まっていた空は元の清々しい青色をとりもどした。さつきまで何も見えなかった広場では子供達が相変わらず遊んでいて通行人も行き交っていた。

「大丈夫かい? あんた達、こんな所で蹲うずくまっていたら人にぶつかるとぞ」

行人の一人に声をかけられる。俺は適当な返事をして立ち上がった。

「そうだ、鞆はっ!」

木の方を見るとそこには何も置いてない。犯人が鞆を持ち去ったのだろう。周りにいた兵士も同じように暗闇に包まれていたのかその場で立ち往生していた。

「カズマ殿、これは……」

クレアが俺の元に駆け寄ってきて悔しそうに顔を歪める。先程の暗闇のことも気になるが、今は身代金のことだ。

「ああ、身代金を一方的に奪われて……、俺達の負けだ。」

犯人と接触する最大のチャンスを俺達は逃してしまった。

+

俺達は身代金を奪われてとぼとぼと城へ帰っていた。犯人に惨敗したからか兵士達の心も沈んでいるように思えた。重苦しい空気の中、俺達は足を進める。

「何も出来なかつたな」

クレアが力のない声で呟く。確かに何も出来なかつた。そもそもさっきの現象は何だったのか。急に視界が真っ暗になった。人の視界を奪う魔法などあったのだろうか。俺の知る限りでは聞いたことがない。犯人は強大な力を持っている。その事だけがひしひしと伝わってきた。

「もう過ぎたことは仕方ないだろ、次に活かそうぜ」

どうにかクレアを慰めようとする。彼女はアイリス様を救おうと躍起になっていたからその落ち込み具合は半端なものではなかつた。先程から下を向いていて暗い顔で

歩いている。

「私が身代金に偽物のお金を用意しようと言った時、お前は本物のお金にした方がいいと言っていたな。犯人に易々と取られるくらいならお金を入れる必要などなかったではないか。お前の言ってたことは間違っていたのではないか。」

クレアの発言は八つ当たりに近いに近かった。彼女は人一倍落ち込んでいるからその気持ちはどうにかしたかったのだろう。

「なんだよ、俺が悪いって言うのか?」

「……分からない、ただ言ってみただけだ」

クレアも怒りの矛先をどこに向けたらいいのか迷っている様子だった。俺でもそんな彼女の心情を察することが出来る。だが、バディである俺を非難してきたことが心に引っかかって気になってしまった。そのせいで俺もクレアに強く当たってしまう。

「お前だつてもう少し早く犯人を捕まえるように合図を出していたら今頃事件が解決し



ていたかもしれないだろ。こうなったのはお前のせいでもある。」

少し言い過ぎたかと思つたが、俺の溜飲は下がらなかつた。むしろ惨めな思いが一層強くなる。クレアは俺の言葉を聞いても顔色一つ変えない。いや、心の中では傷ついているのかもしれないがそれを顔に出していないだけだ。

「……………」

俺達は黙つて歩く。とても気まずい時間だつた。早くこの時間が終わつて欲しい。俺達の心はすれ違つてしまつて、沈黙が二人の心情をよく表していた。

「もうバディは解散するか?」

ふと、クレアが淡々と述べる。彼女の顔は暗いままだ。薄々そう言われるかもと分かつていた自分がある。俺が彼女の言葉に答えようとするが、先にクレアが話し始めた。

「……なんて冗談だ、忘れてくれ」

明らかに冗談な訳がない。でも、ここで言い返せば本当にバディを解散してしまう気がした。俺はそれが怖くて何も喋らなかった。また気まずい沈黙が俺達の間流れる。そんな事をしているうちに城へと着いていた。城へ着くまで俺達はほとんど会話していない。城の廊下を進みながらこれからのことを考えていた。

「では、私は国王様に捜査の報告に行ってくる。お前達はここで解散だ。」

クレアが一人で廊下の奥へと進んでいく。この先には王様の部屋があるだけでそれ以外には何も無い。彼女は一体どんな気持ちで王様に報告に行くのだろうか。アイリスを救えなかった悲しみや王様への恐怖に耐えられるだろうか。ひよっとしたら泣き出してしまうかもしれない。

「なんて……俺にあいつを心配する権利なんてないよな……」

クレアとの関係はギクシャクしている。俺が彼女を助けに行ったところでクレアは

変な意地を張って迷惑になるだけだろう。今日はもう自分の部屋に帰ろう。俺が王様の部屋に向かったクレアを見送っていると、一人の兵士が俺に話しかけてきた。

「カズマ殿、少々宜しいですか？」

先程まで捜査に出っていた兵士と違い、甲冑を身につけている。城の中に滞在していた兵士だろう。

「先程犯人から再び手紙が届いたようでして。」

兵士の手元を見れば一通の手紙がある。俺は奪い取るようにそれを手に取り中の文を読み進めていく。

『最近、巷で話題となっている“変態紳士”とは私のことだ。近々アイリス王女と引き換えに別の女を要求するだろう。その時を楽しみにしておきたまえ。』

手紙にはそう書いてあった。“変態紳士”、その名前には聞き覚えがある。かつて新聞で見た事があった。大人の女性を狙って誘拐している犯人だったはずだ。アイリスを誘拐した犯人の正体に変態紳士？はあ……これは本当に。

「はあ……厄介なことになったな」

俺はため息をつきながら空を仰ぐのだった。

十

自室で夕食を取りながら俺は恋文を認<sup>した</sup>めていた。

『めぐみん、ダクネスへ。二人とも俺のことを好きでいてくれてありがとう。そんな二人にお願いがある。俺はハーレムを作ろうと思うんだ。めぐみんやダクネス、今はいないけどアイリスとも結婚したいと思ってる。』……うーん、ここからどう書こうかな。』

手紙の内容は端的に言えば俺がハーレムを作るのでそれを認めて欲しいという内容だった。こんな都合のいい内容をあの二人が認めてくれるのか不安はあるが俺の事を慕って止まないアイツらだからきつと大丈夫だろう。

「俺はみんなを平等に愛したいと思っている。別にハーレムを作るのが男の夢だからという理由でこんなことをしてる訳じゃない。ただみんなを幸せにしたいんだ。」  
「……………おお、いい感じじゃないか。これで感動してもらえるだろう。」

手紙の内容はとうとうクライマックスに突入する。この文を見れば誰もが俺の思いに涙するに違いない。筆が乗り始めスラスラと恋文を書き進めていると、コンコン、とドアを叩く音がした。

「カズマ殿、少しいいだろうか。」

クレアの声だ。俺は筆を一度置き彼女を出迎えることにした。

「どうしたクレア、今手紙を書いてて忙しいんだが」

「手紙……………？そんな事はどうでもいい。犯人の情報が分かったので伝えに来たのだ。巷で話題の“変態紳士”という男がアイリス様の誘拐犯らしい。」

クレアの話は俺が既に聞いた情報だった。彼女はわざわざ伝えに来てやったぞとい

う顔で話すがもうその情報は古い。

「そんな事ならもう知ってるぞ。今俺はめぐみん達にハーレムの打診を行っている所なんだよ。頼むから集中させてくれ」

「貴様……また一夫多妻になろうとしているのか！浮気はダメだと言っただろう！」

クレアは俺の事をキツ、と睨みつける。先程少し喧嘩になったこともあって彼女のその目線は痛かった。白スーツもその事を察したのか早々に話を切りあげる。

「まあその話は今度しよう。問題は変態紳士のことだ。アイリス様を除いてヤツが大人の女性しか誘拐してないことは知っているな？」

「そうなのか？でも、それがどうしたって言うんだよ」

クレアは俺の質問に答える前に周囲に人がいないことを確認し声のトーンを落とし話した。

「アイリス様はまだ子供だ。つまり、犯人からしてみれば必要ない存在とも言える。も

しこのままアイリス様を救出出来なければ殺される可能性だつてあるという事だ。」

アイリスが殺されるかもしれない。その事実には俺はたじろいだ。当初はすぐにアイリスが帰ってくると思つていたのに、いつの間にかそこまで事態が進展していたなんて。俺にそのことを伝えるクレアも声が震えていた。

「明日はアクセルの街で有名な占い師の元を訪ねる予定だ。朝早くから出かけるから遅れるなよ。」

彼女は今どんな気持ちで捜査に参加しているのだろうか。彼女の心情を察するだけで胸が痛かった。

「そうだ、お前に聞いておきたいことがあったのだ。」

クレアは話を終え部屋を出ていこうとするが、最後に言い残したことがあったのか振り向いて言う。

「お前は私とバディを組むのは嫌か？」

クレアは世間話でもするかのように聞いてきた。この言葉の返答次第では彼女の今後の態度が変わる、そんな気がした。正直、彼女とのバディは嫌な気持ちもある。だが、俺は彼女の質問には答えなかった。

「お前も俺とバディを組むのは嫌だろ？」

俺の返事を聞いたクレアは悲しそうに笑った後そのまま部屋を出ていった。彼女との溝がさらに深まってしまう。

「はあ……どうすればいいんだよ」

俺はやりようの無い想いを枕にぶつけベットのうえでじたばたと暴れるのだった。



このか弱い乙女に相談を！

翌日。アクセルにいる占い師の元へ向かっていた俺とクレア。アクセルへ向かう道すがらもどことなく気まずい雰囲気俺達の間には流れていた。だが、それを吹き飛ばすように俺は話し続ける。クレアも明るく喋っていたが、やはり心の中にある暗い感情を隠しきれないようでも時折悲しそうに俯くのだった。そんな事をしていううちに目的の場所へ着く。

「おい……まさかアクセルの占い師って……」

「へいらつしやい！ある時は魔道具店のバイト、またある時はギルドの相談屋。本日は占い師として汝らの相手をしてしんぜよう！」

俺達がやって来たのはバニルのいるウイズ魔道具店だった。いつもの如く冗長な挨拶をしてくるバニルが椅子に座って俺達を出迎える。カウンターのの方に目を向けると、

何があったのか黒焦げになっていくウイズもいた。

「後ろの女性の方は大丈夫なのか？ 頭から黒炭が出ているが……」

「何も気にする事はない。彼奴は仕事で大ミスをしたのであのようになっていただけだ。お二方とも、立ち話も悪いので座っては如何かな？」

後ろのウイズが気になる様子だったが、クレアは勧められるままに椅子に座る。いつもの光景に見慣れている俺も彼女の隣に座った。

「既に新聞にも出ているので知っているであろうが、アイリス様が何者かに誘拐された。今日はアクセル随一の占い師と呼ばれる貴方にその事について尋ねに来たのだ。」

ふむ、とバニルは手を顎に当て考える素振りを見せる。暫く逡巡した後ニヤリと口元を歪めた。バニルは親指と人差し指で輪っかを作り、もう片方の手で手のひらを差し出す。

「吾輩ほどになれば事件の真相を知ることなど容易い。だが、勿論それ相応の対価を貰

おう。王女様の誘拐となれば金額も高くなるが……」

お金を要求してくるバニル。悪魔として対価を貰うのは当然という口ぶりだ。だが、俺達もそう言われるのは見越していた。クレアはエリス金貨の入った重たい袋をドンとテーブルの上に置く。

「ここに一億エリスある。これだけあれば充分だろう。それでもまだ足りないと言うか？」

「毎度ありー！この金は彼奴あやつが起きる前に隠しておかなければ……。しばらく待つておれ。」

クレアから受け取った金貨をバニルは大事そうに抱えたあと、ウイズに見つからないようにそっと裏の金庫へ隠しに行った。相変わらずウイズはお金を散財してしまうらしい。やがて戻ってきたバニルは水晶玉を片手に俺達に質問し始めた。

「それでは、どんな質問にでも答えてやろう。その自分が仕える王女に、素肌をペロペロしたい願望を持つ女よ。」

「なあああっ!!」

いきなりクレアのとんでもない事実が暴露される。アイリスを溺愛しているのは知っているが邪な感情を持つていたとは……。俺はクレアを軽蔑した目で見る。

「ち、違う! そんな事は断じてない! 私はアイリス様をお慕いしてるだけで、それ以上の感情などない!」

「ほう? 白を切るつもりか。隠し撮りした王女の写真を部屋に飾り、毎晩毎晩危ない目つきで語りかけている女よ。」

「ぬわあああ!!」

クレアは自分がずっと隠してきたことを一つ残らずバニルに見通されたからか、泣きながら机に突つ伏した。こいつをここまで再起不能にさせるとは恐ろしい……。

「フハハハ、悪感情ゴチである!」

「さつきから全然話が進まないじゃないか! 俺達はアイリスを誘拐したつていう犯人のこことを聞きに来たんだよ。そもそもアイリスは本当に誘拐されたのか?」

俺は話を本題に戻す為、クレアに代わりバニルに質問する。バニルはひとしきり笑った後ゆつくりと口を開いた。

「無論、その王女は誘拐されておる。犯人はとある男の貴族だな。今頃、王女は暗い地下の奥深くで監禁され、毎晩拷問を受けながらどうにか生きながらえて……………」

何だと、アイリスがそんな辱めを受けているのか。よくも俺の妹を……………！俺が犯人に対する憎悪を滲ませながら話を聞いていると、

「……………なんてことは無く、むしろ毎日犯人が持つてくる料理に舌鼓したつづみを打ち、一日中ベッドの上でゴロゴロして、犯人の男に待遇を良くしろだの新しい娯楽を用意しろだの、文句を言いながら自堕落な毎日を過ごしておるな。」

バニルの話に拍子抜けしてしまった。アイリスは誘拐されても楽しく過ごしているみたいだ。一生懸命搜索している俺達がバカらしくなってきた。

「なんじゃそりゃ! 誘拐は遊びじゃないんだぞ! 俺だって犯人にお世話されながら毎日過ごしたいわ!」

「そんなこと吾輩に言われても困る。そもそも犯人は大人の女性にしか興味がないのだ。未だ年端もいかない少女など取るに足るまいて。」

「どうやらアイリスは無事みたいだ。悠々自適な生活を送っている彼女にあまり納得いかないものの、俺は渋々バニルに詳しい事情を聞く。」

「じゃあ犯人の目的は何なんだよ。アイリスは幼くてまだ守備範囲外なんだろ? 単純に身代金が目的なのか?」

「犯人の目的は女を着せ替え人形にして遊ぶことである。」

「着せ替え人形……? 一体何が言いたいのやら。未だに泣きべそをかくクレアを横目にバニルに話を催促させる。」

「要するに、犯人は今まで捕まえた女に様々な仮装………言わばコスプレをさせて楽しんでおるのだ。看護師やらメイドやら警察官やら……。王女の身代金も仮装の為の

資金を集めただけであるな。」

犯人のニツチな趣味に眉をひそめる。アイリスも変なことに巻き込まれてしまったものだ。だが、コスプレの為の犯行なら今まで誘拐された人も大丈夫だろう。俺達の捜査次第では今までの被害者全員を助け出すことが出来るかもしれない。

「おい、仮面をつけた男め……。アイリス様はそう易々と誘拐されるようなお方ではない。今回の犯人は本当にタダの人間なのか。何か強大な力を持っているのではないか？」

まだ涙目ではあるものの少し回復してきたクレアがバニルに尋ねる。バニルは水晶を覗き込みながらチラリと彼女の方に目をやった。

「中々鋭いではないか、このまま護衛をしていれば、何かの手違いで王女と結婚出来るのではないかと思っていた女よ。」

クレアはバニルの発言を聞くとキツと睨みつける。お怒りの様子だ。だが、これ以上

反抗しても返り討ちにあうと分かっているのか大人しく話を聞く。

「今回の事件には〃ハンニバル〃という悪魔が関わっている。」

ハンニバル、聞いた事のない名だ。だが、隣のクレアは驚いた様子で立ち上がる。この悪魔の事を知っていたのだろうか。

「どうした、クレア？」

「お前はハンニバルを知らないのか？一度狙われたら骨も残らないと言われる凶悪な悪魔だぞ。」

俺は元々日本人だからこの世界の常識に疎いのだ。クレアの話から察するにそれ程強い悪魔なのだろうか。怪しい雲行きに俺は固唾を飲む。

「ここ百年で奴も相当丸くなったのだがな。奴の能力は〃視覚を無効化すること〃。一度スキルにかかれば奴が魔法を解くまで一切のものを見ることが出来ない。その実力は、吾輩の見通す目すらも無効化する程だ。吾輩との相性は最悪と言えよう。」



あのバニルですら敵わない相手とは、ハンニバルという悪魔はかなりの強敵のようだ。そもそも視覚が使えないのなら戦いようがない。アイリスも恐らく突然視界が真つ暗になって誘拐されたのだろう。

「彼奴あやつの好物は極上の羞恥の悪感情だ。生半可なものでは足りぬ。極上のものしか食べたくない奴なのだ。」

「……………、極上の羞恥と言ったな。まさかアイリス様はその男に身ぐるみを剥がされて恥ずかしい思いをしているのか……………！」

「いや、犯人は未成年には手を出さない事にしてるようだ。今はまだその王女は無事だな。」

「つまり今回は、女を着せ替え人形にして遊びたい犯人と、女が服を脱がされて極度に恥ずかしいと思う感情を手に入れたい悪魔とで利害が一致した、という訳だな。」

ふむ、話の筋は通っている。コスプレを見たい犯人とその羞恥を欲しがる悪魔。バカと天才は紙一重と言うがまさにその通りだろう。しかもアイリスの誘拐という最悪の形で相手がタッグを組んでしまった。事件はかなり厄介な事になりそうだ。

「それはそうと、その白スーツの女。汝には破滅の相が出ておるぞ」

白スーツの女とは勿論クレアのことだ。破滅の相が出ていると言われた本人はキョトンとした顔で話を聞いている。

「……何をバカなことを。何も心当たりがないぞ」

クレアはあまり気にしていない様子だったが、この光景には見覚えがある。かつてダクネスもバニルに破滅の相が出ていると宣告されたことがあったのだ。その時もバニルの予言通りにダクネスはアルダープと結婚することになった。

「……まさかクレア、誰かと結婚するのか?」

「私が結婚するのはアイリ……ち、違う!結婚の話などない!哀れんだ目で私を見るな!」

一瞬ヤバイ顔になったクレア。アイリスと結婚する気があったというのは本当だっ

たのか。彼女は俺達の顔を見て慌てて発言を訂正する。

「う、うむ……………おや？見える、見えるぞ！小僧がハーレムを作ってる様子が！」  
「マジで!？」

思わぬ吉報に舞い上がる。俺もついにハーレムを作るのか。クレアはハーレムに喜ぶ俺を冷めた目で見つめていた。所詮女にはハーレムの素晴らしさなど分からないのだ。

「なあ誰とハーレムを作るんだ。めぐみんか？ダクネスか？」

「おっと、それ以上の情報を望むならお金を払ってもらおう。最低でも十億エリスは必要だな。」

肝心な所をバニルは勿体ぶる。俺としては一番聞きたい内容だと言うのに。俺が屋敷に貯めているお金を使おうか悩んでるとぐいつとクレアが俺の事を引っ張り店から追い出そうとする。

「もう話は済んだ。さっさと帰るぞ。」

「ま、待ってくれ、まだ大事な情報が………」

バニルの話を聞こうとする俺を無理やり連れて行くクレア。彼女にとってハーレムの話が不愉快だったのかむくれている。

「毎度あり！小僧よ、お前の頑張り次第ではその白スーツの女を救えるやもしれぬぞ。せいぜい頑張るのだな。」

クレアに引っぱられながら魔道具店を去る俺に、バニルが意味深な言葉を残していった。

+

バニルの占いから帰って来た俺とクレアは二人で王様に謁見していた。今回得た情報を王様に報告に来たのだ。

「——今回の事件には、悪魔のハンニバルが関わっているようです。奴は視覚を無効化出来ますからアイリス様もその力によって誘拐されたものと思われませぬ。」

クレアの説明を黙って聞いていた王様。顎の無精ヒゲを撫でながら考え事をするようだ。マツチヨが無言でいる様子はそれだけで威圧感があり心臓に悪い。俺は怯えながら王様の言葉を待った。

「私が娘を愛しているのは知っているであろう、クレア。」  
「勿論存じ上げております。」

ゆつくりと喋りながら立ち上がる王様。そして俺達の元へ近づいて来てクレアの顔を覗き込みながら言った。

「そもそもお前には娘の護衛を任せていたのに、なぜ誘拐されたのだ？」  
「それは完全なる私のミスです。申し訳ありません。」

クレアは至近距離で王様に睨まれながらもハッキリと喋っていた。俺は怯えて声が

出ないのに、彼女は肝が据わっているようだ。クレアに構うことなく王様は話を続ける。

「お前は既に一度ミスをしている。そのミスを私は一度許してやっているのだ。次にミスをしたらクビだ。何としてでも娘を救出したまえ。」

「分かりました」

「お前は下がりなさい。次にカズマくん、君に話がある。」

王様の命令を受けたクレアはキビキビした動きで部屋から出ていく。部屋には俺と王様の二人きりになった。次は俺の番か、怒られないかと少し怯えつつもちゃんと王様の顔を見つめる。

「君には娘を探す為に特別に捜査に参加させている。それなのにまだ娘を救う糸口すら見つけられてないそうじゃないか。」

「す、すいません」

噛んだ。肝心な所だったのに。言い直そうかと思うが、王様が怖くてそれ所じやな

い。

「もう既に娘との結婚の許可も出している。これは異例の事だよ。私は既に君に一つ恩を売っているわけだ。それならばその恩を返すのが義理というものではないかね。」

王様は筋肉隆々で脳筋かと思っていたが口も達者で論理的に俺の事を責め立ててくる。マッチョな見た目も相まって俺は泣きそうになっていた。

「私の予想だと、犯人はあと数回は接触してくるだろう。必ず犯人を捕まえてくれ。話は以上だ。」

「は、はい、失礼しましゅ。」

噛んだ。俺は最後までかつこ悪いまま部屋を出る。王様も俺の怯えっぷりに幻滅してるんじゃないだろうか。

「はあ……情けないな」

俺はドアを閉めながら心の声を漏らす。ふと、隣に目を向けると何やら落ち込んだ様子の子のクレアが居た。さつき部屋を出てからずつとここに居たのだろうか。

「どうした、クレア。こんな所で立ち止まって」

「……いや、別に。お前に話しても仕方ない事だ。」

クレアは前見せたように悲しそうに俯くと、俺を置いて廊下を歩いていく。その顔が俺についてくるなど言っているようで彼女の後ろ姿を見送ることしか出来なかった。

## 十

時刻は深夜。既に夕食もお風呂も済ませて俺は床に就いていた。ベッドに横になつてから既に二時間近く経っている。だが、中々俺は眠りにつけなかった。

頭を反芻するのはクレアのことだ。犯人に一方的に身代金を奪われたことから始まりバディ解散の危機にも陥っている。いや、それ以前にもパンツをステイルしたことや、ハーレムを作ろうとしていることでも、関係にヒビが入ってしまった。このまま彼女との仲に亀裂が入ったままで、事件は無事解決するのだろうか。



寝ようとすればする程次々と悩みの種が舞い降りて来て益々眠れなくなってきた。俺は仕方なくベッドから這い出て夜の王城を散歩する事にした。少し運動すれば眠りやすくなるだろう。

「暗いな……」

僅かな明かりを頼りに城の中を進む。夜の王城は真つ暗で誰一人いなかった。窓からは月明かりが差し込んでいる。俺は夜空を眺める為窓の外に出た。風がそよそよと俺の肌を優しくなぞる。心地いい夜の雰囲気だった。

「気持ちいい……」

暫く王城の眺めを堪能しながら黄昏たそがれる。すると、誰かの小さな声が聞こえてきた。

「うっ……ひっ……」

「？」

どこかから女の声が聞こえる。何の音だろうと疑問に思い、ベランダを伝って進んで行く。やがて柱越しにそつと、誰かがいるであろう場所を見た。そこに居たのはクレアだった。

「ううっ………ぐずっ………」

クレアは泣いていた。

普段は凛々しい彼女が泣いている。その姿が珍しくて俺は惹き込まれるように彼女を見つめてしまった。月明かりが涙を拭う彼女をそつと照らしている。夜の静寂に彼女の泣き声だけが響いていた。

俺は見えてはいけないものを見てしまった気がして罪悪感が込み上げる。彼女に気づかれないようにそつと立ち去ろう。俺がゆっくりと離れようとした時、

「そこに誰かいるのか……?」

クレアが俺の方を振り向きバツチリ目が合う。帰ろうと思っていた俺も彼女に見られてしまったので、仕方なく柱から出てきた。クレアは俺の顔を見るなり、すぐに自分

の泣き顔を隠そうと必死になる。だが、月明かりで照らされた彼女の顔は俺の目に鮮明に映っていた。

「や、やあクレア……眠れないのか？」

気まずい雰囲気の中、俺は声をかけた。一度出てきてしまった以上、もう後には引けない。俺は彼女の泣き顔を見ないようにしながら、クレアの横に腰を下ろした。

「……………」

沈黙が俺達を支配する。何を話せばいいのだろうか。泣いていることには触れていいのか。そもそもクレアはなぜ泣いているのか。彼女への言葉が何度も浮かんでは、それを言ったらダメだともう一人の自分が否定し、俺は何も喋れなかった。

「すまない、情けない所を見せたな。」

先に沈黙を破ったのはクレアだった。彼女は目は腫れているものの、先程のように声

を上げることなく俯いている。

「……なんで泣いていたんだ？」

「別に……、お前には関係ない事だ。」

クレアは何も答えてくれない。俺に弱い所は見せたくないようだ。

………。

でも……。

ここで彼女の涙の理由を聞かないと。俺は一生後悔してしまう。そんな気がした。

「お前はそうやっていつもいつも自分の弱味を隠すだろ。たまには他の人に悩みを打ち明けてみたらどうなんだ？」

「……………」

彼女に諭すように言うが、クレアはそれでも何も答えない。

「はーん、分かったぞ。自分の本心をさらけ出すのが怖いんだな。クレアは臆病者だ

からな。」

「なんだと……?」

「だってそうだろう、泣くくらい辛いことがあるのにそれでも誰も頼らないなんて。お前は怖がりなんだよ。必死にカッコつけてるだけだ。」

敢えてクレアが怒るようなことを言ってみる。どうにかして彼女の涙の理由を聞き出す為だ。

「私は怖がりなのか……?ただ格好をつけてるだけなのか……?」

クレアは怒ることなく俺の意見を真正面から受け止めていた。彼女は自問を繰り返す。俺もそつと彼女の背中を押すことにした。

「俺に全部打ち明けてみるよ。そうすれば臆病者から脱却できるぞ。それに俺達はバディだろ?」

これでもうにか彼女が本心を言ってくればいいのだが。ドキドキしながら彼女の

返事を待つ。散々迷った様子を見せながらクレアは答えた。

「……笑わないか？」

「笑うわけないだろ。俺を何だと思ってるんだ。」

「……鬼畜でクズな奴だと。」

クレアの俺への評価はかなり低いようだ。薄々分かつてはいたが、いざ面と向かって言われると傷つく。

「じゃあ言うからな……。引いたり笑ったりするなよ？」

「ああ」

クレアはぼつりぼつりと話し出した。

「自分でも何が辛いのかよく分からないのだ……。最初はアイリス様が居なくなつたことがショックだった。ずっと心の拠り所にしてきた人が突然いなくなつたのだ……。」「お前との仲が悪いのも嫌だった。バディも解散になるかもしれないし何よりこの

ままじや捜査もまともに出来ない気がした。でも、私はいつもお前に冷たく当たってしまおう……。そのせいで自分の事も嫌いになっていくのが嫌だった。」

「王様に護衛をクビにされそうになっているのも嫌だった。私はアイリス様にこの身を捧げてきたのだ。その護衛をクビになってしまったら一体何をすればいいのかわからない。多分、自分の中で色々な事が積み重なって泣いてしまっただと思う……。本当の私はこんなにも脆いのだ。これでお前も私に幻滅してしまっただな。」

クレアの話の黙って聞いていた。彼女がこんなに色々な事を考えていた事を初めて知った。クレアは勇気を持って本心を打ち明けてくれたのだ。次は、俺が彼女に寄り添ってあげないといけない。

「幻滅なんてする訳ないだろ。お前はよく頑張っているよ。」

何か気の利いた言葉でもかけてあげたかったが、俺にはそんな事は出来なかった。ありきたりな言葉で彼女を慰めようとする。

「私の話を聞いてくれて助かった。そのことは礼を言う。」

「お、おう、バディだからな。これくらい当然だ。」

それから暫く俺達は夜風に浸っていた。どれくらいの時間が経ったかは分からない。たださつきのような気まずい雰囲気ではなくて、どこか心地よい空気だった。

「……そろそろ寝るか。明日も早いだろう。」

俺は立ち上がり軽く伸びをする。夜も更け俺もそれなりに眠たくなっていた。横のクレアを見るともう泣き止んでいる。彼女も少し落ち着いただろう。

「カズマ殿」

戻ろうとした俺にクレアが声をかける。振り返ると俺の事を真正面から見据えたクレアがいた。

「ありがとう」



クレアは笑っていた。目は腫れているが、月明かりが彼女の顔を照らしてその顔は綺麗だ。彼女の笑っている姿を見るのは初めてだった。その初々しい態度に鼓動が早くなる。クレアにドキドキさせられるとは夢にも思っていなかった。

「さあ、もう部屋に戻ろう」

彼女は俯くことなく歩いていく。その顔はもう俺についてくるなどと言っていない。俺達は月明かりの注ぐ夜の城を進んで行くのだった。

この誘拐犯に追求を！

クレアと話した翌日。

「カズマ殿、もう朝だぞ。起きてくれ。」

うつすら目を開けるとクレアが俺を起こしに来ている。昨日まで腫れていた彼女の目も今では元通りになっていた。俺は微睡む意識の中、彼女を抱きしめる。

「きやつー！」

クレアは俺に無理やりベッドの中に引きずり込まれた。俺は眠たいからな。これは事故だ。決して意図的にしたわけではない。

「うーん……もう食べられないよお……」

「貴様、絶対起きているだろ！こ、こら離せ！」

クレアは俺の腕の中でじたばたと暴れている。だが、俺は彼女が逃げられないように力強く抱きしめた。そのまま俺は彼女の貧相な胸に頬ずりする。

「ぐへへ……柔らかいぞ」

「きやああああつ！」

「ふっおつ！」

次の瞬間、クレアの強力なパンチが俺の頬に炸裂した。勢いそのままに俺はベッドの外へ吹っ飛ばされる。

「貴様、許さんぞ！これはセクハラだろう！」

腹を立てたクレアは剣を抜き俺に構える。彼女のその行動に俺は一気に目が覚めた。寝ぼけてる場合じゃない。

「ま、待ってくれ! さっきのは事故だから! 昨日だって相談に乗ってやっただろ。」  
「それとこれとは話は別だ! 今すぐ選べ。私に斬り殺されるか、土下座して命乞いするか。」

クレアは本気の目だ。そのままジリジリと俺の方へ近寄ってくる。彼女なら本気で斬り殺してしまうかもしれない。ここは戦うしかないか。俺の伝家の宝刀ステイールを使えば……。

「もしステイールを使ったらその瞬間にお前の首をはねるからな。」  
「申し訳ありませんでした!」

俺はすぐさま土下座した。

「わ、私が言うのも何だが、そんなに躊躇いもなく土下座するのだな……。まあいい、今回は大目に見てやる。」

俺の綺麗な土下座を見てクレアは拍子抜けしたようだ。鞘に剣を収めるのを見て、俺は安堵する。

「そうだ、犯人の変態紳士と名乗る者から第二の要求が来たぞ。さつきはそれを伝えに来たのだ。」

クレアは興奮で少し顔を赤くしながらも、俺に手紙を差し出す。俺は渡されるままに手紙の中を見た。

『王女様は預かった。返して欲しければ別紙の設計図通りの物を完成させろ。三日後にベルゼルグ王国の○○に完成した物を置いていけ。さもなければ王女様の命は無い。』  
『追伸・主女様がワガママ過ぎて手を焼いているのだが、お宅は一体どういう教育をしているのだ？誘拐されたのに、もっと庶民の料理を教えてくれたの、娯楽がないから私を楽しませなさいだの、好き勝手言っておるぞ。もっと王女様はお淑やかな人だと思つたのに……。』

俺は一通り犯人の要求を読み終えそつと手紙を閉じる。顔を上げるとクレアが深刻そうな顔で俺の事を見ていた。

「どうだ?このままではアイリス様の身が危ない。一刻も早く犯人の指示に従わなければ……」

「ああ、そうだな。アイリスの事が心配だなあ……」

俺は手紙を思いつきり床に投げつけた。

「つて、そんな訳あるか!多分アイリスは楽しく過ごしているぞ!なんで俺達が頑張つて搜索しているのに、アイリスはワガママばかり言ってるんだよ!」

王女様が誘拐されたと言うのに緊張感がまるでない。まあ、アイリスが無事な事は嬉しい、嬉しいのだが……。自堕落な生活をしているアイリスにどうしても納得がいかない。ここは、アイリスが犯人に酷い目に遭わされていて、それを俺達が行く所だろう。

「ま、まあ気持ちは分かるが……。手紙はもう一枚あるぞ。と言つてもこれは設計図だ  
が。」

アイリスの一件で忘れていたが、犯人は何か作ってもらいたい物があるらしい。俺は何気なく二枚目の手紙を見て、息を飲んだ。

「これって……ミシンだよな。」

設計図という形ではあるが、糸を通す穴やボビン（巻いた糸のこと）を装着する棒、かつて日本で見たミシンにそっくりだった。

「この設計図を知っているのか？」

「ああ、一応俺の故郷では有名な物なんだけど……。」

どうして日本のミシンがこの世界に伝わっているのか。犯人は、ミシンの事を知っている……？つまり、犯人は日本人という事で……、あつ。

「俺、犯人が分かったぞ」

確信を持って答えた俺をクレアは不思議そうに見つめるのだった。

十

場所は変わってアクセルの冒険者ギルド。

「ミツルギはどこだああ!!」

昼間だというのに酒を飲んだくれてる人で溢れる酒場に俺の声が響いた。中にいた人はみな一斉に俺の方を見る。シン、と静まり返るギルド。そんな中で一人の男が気まぐすそうに手を挙げた。

「ミツルギは僕だけど……」

俺はズンズンとミツルギの元へ歩く。肝心の本人は、自分が何かしてしまったのだらうかと怯えてる様子だ。俺は彼の正面の椅子に座って言う。

「お前がアイリスを誘拐したんだな？」



「……………は？」

キョトンとした顔で答えるミツルギ。

「証拠は上がっているんだよ。犯人はミシンの事を知っている。つまり、日本人だ！そして日本人と言えばお前、カツラギだろ！」

「僕はミツルギだ！そんなカツラミみたいな名前じゃない！ちよつと待ってくれ……何の話をしているのか理解が追いついてないんだけど。」

「詳しい話は署で聞こう。ほら両手を前に出して。」

「え？」

「ほら、手を出す！」

いきなりの展開に戸惑っている様子のミツルギが、俺に言われて両手を前に伸ばさず。俺は、予めクレアから貰っていた手錠を取り出した。ミツルギはギョツとした表情で手錠を見つめる。俺は犯人の両手に手錠をはめた。

「よし、犯人逮捕だな。今から警察署に行くぞ。」

「え?ど、どういう事?僕は何もしてないんだけど……」

俺は未だに理解の追いついてないミツルギを引つ張るように警察署へと連れて行く。アイリスの誘拐犯は、俺の手により無事に逮捕された。俺達を苦しめた誘拐事件は遂に解決するのだった。

一時間後、ミツルギは犯人じゃないと分かった。

「やっぱりお前は犯人じゃなかったな。俺の目に狂いはなかった。無事に釈放だ、おめでとう。」

先程警察署にミツルギを連れて行って、嘘をつくとチンチンなる魔道具の傍で取り調

べを受けさせたのだが、全くと言っていいほどベルは鳴らなかつた。晴れてミツルギの潔白が証明されたのだ。

「いや、君の目には狂いしかないよ。それより、酷いじゃないか！いきなり僕を犯人扱いするなんて！」

ミツルギは俺が付けた手錠をはめたまま怒る。俺だつて好きでミツルギを疑つてゐる訳ではない。これも仕事の一つなのだ。

「まあ過ぎた事はお互い水に流そうぜ。昨日の敵は今日の友だろ。それより、アイリスの誘拐事件について何か知らないか？」

「僕が一方的に被害を受けただけなんだけど……でも、アイリス様について知つてゐることはないな。新聞で誘拐事件の事は知つてるよ。まだ行方不明のままなんだつてね。」

分かつてはいたが、ミツルギは何も知らなかつた。日本人が犯人だというから絶対ミツルギだと思つていたのに。捜査はまた振り出しに戻る。

「代わりと言つてはなんだけど、君から聞いた情報からいくつ分かる事があつたから、それを教えてあげようか。」

分かる事……?まさかミツルギが名探偵のように推理でもするのだろうか。俺は期待半分で彼の話を聞く。

「まず、現代にいる日本人はとも少ないこと。これは分かるよね?犯人が日本人なら、それだけ容疑者も絞られるという訳だ。」

ミツルギが言っている事は俺も薄々分かっていた事だ。かつてアクアの送り込んだ日本人と言えば、紅魔族を作り出したおっさんとミツルギくらいで、他の日本人には会つたことがない。

「つまり日本人を探せば犯人に辿り着けるといふ事か?」

「ああ、黒髪黒目の日本人は珍しいからそれだけ探しやすいだろう。」

ふむ、意外とミツルギはまともな事を言う。確かにその方法なら簡単に犯人が見つかるかもしれない。

「二つ目は、犯人の賢さについてだよ。そもそも日本人だからと言ってミシンの作り方が分かる人なんてそうそう居ない。設計図まで書けるなら尚更だ。」

「……つまり、ミシンの作り方を知っているということは、頭が良くてそれだけ狡猾な犯人である可能性が高いという事か？」

「そうだね」

ミツルギの言う通り犯人が賢いとなると中々厄介だ。犯人のことについて頭を巡らしていると、

「あと、いい加減手錠を外して欲しいんだけど……」

そういえばミツルギに手錠をはめたままだった。俺は鍵を探す為にポケットに手を入れる。

「……どうかしたかい?」

「……ない。」

「え?」

俺はズボンのポケットや胸ポケット等に手をつ込むが何も入っていない。そもそも手錠はクレアから貰ったものだ。その鍵はクレアが持っていることだろう。

「よし、情報提供してくれてありがとうな!それじゃあな!」

「ま、待ってくれ!手錠を外してから………」

俺を追ってくるミツルギから逃げながら、王都行きテレポート屋へ急ぐのだった。

+

その後、俺の解錠スキルでどうにかミツルギの手錠を外し、俺は城へ戻っていた。

「——なるほど、つまり犯人は日本人だということだな?」

俺はクレアに、犯人について分かった事を話す。ミシンの事を知っているのは日本に  
関係がある人だけ。この情報だけでも値千金だ。

「ああ、日本人の特徴は黒髪黒目。それとバニルの情報によると犯人は男の貴族らしい  
から、きっと容疑者も絞れると思うぞ。」

俺の話を聞いていたクレアはすぐに近くの兵士を呼び寄せ、指示を出す。

「分かった、ベルゼルグ王国にとどまらずあらゆる国の日本人を調べさせよう。よく  
やったカズマ殿」

俺が日本人ということが意外な形で捜査の役に立ったようだ。その事を嬉しく思い  
ながら何気なくクレアの手元を見る。そこには犯人から渡された設計図があった。

「手に持つてるそれって設計図だろ？犯人の言う通りにミシンを作るのか？」

クレアは一瞬悔しそうな表情を浮かべた後、答える。

「ああ、もし犯人の要求に従わなければ、アイリス様が殺されるかもしれない……。それだけは絶対にあつてはならないからな。」

そう言うクレアは少し震えていた。彼女はアイリスを溺愛していたからそれだけ不安が大きいのだろう。

「そ、そうだ。ミシンが出来るまでの間、お前は捜査から外れてもいいぞ。ココ最近働き詰めだったからお前も疲れているだろう。日本人の捜査は私達でやっておく。」

クレアは俺に心配をかけさせまいと思ったのか話題を変える。しかも俺に暫く休暇を与えてくれるそう。ヒキニートの俺としては非常に嬉しい。

「いいのか!?!じゃあお言葉に甘えてバカンスにでも行ってくるよ」

「あまり羽目を外しすぎるなよ。それと休みに入る前に一つだけ仕事を頼んでおく。今回の犯人である変態紳士の被害者に捜査の進捗を報告に行くのだ。」



ふむ、それくらいならしてもいいだろう。俺は久方ぶりの休みを前に昂った気持ちのまま、被害者の元へ向かうのだった。

十

俺がやって来たのは、以前聞き込みに来た貴族のおじ様の屋敷だった。部屋の中は相変わらず豪華絢爛で、高そうな美術品があちらこちらに置いてある。俺はその光景に萎縮しながらも、廊下を進みメイドに部屋の中へ案内された。

「おや、サトウカズマ様ではないですか。お久しぶりです。」

応接室に入るなり頭を下げるおじ様。その挨拶は貴族だけが知る挨拶ではなく、庶民の俺でも分かるような頭の下げ方だった。俺の身分に合わせて気を使ってくれたのだろう。やはりこの人の態度は紳士のようなようだ。

「こんにちはアレクサさん。今日は捜査の進捗について報告に来ました。」

「貴族のおじ様はカップに紅茶を注ぎ俺に渡してくる。俺は出された飲み物には手をつけず、事件の概要を説明した。おじ様は時折紅茶を飲むものの、綺麗な黒目をこちらに向けたまま話を聞く。」

「ふむ、犯人は二ホン……という国の出身なのですか。」

「一通り話を終えた後、俺は紅茶に手をつけた。既に温ぬるくなっていたが、香ばしい香りが俺の鼻をくすぐった。」

「はい、日本人が犯人だと分かっているので、すぐにでも犯人は捕まりますよ。」

「貴族のおじ様は俺の話を聞いてもどこか不安そうな顔をしている。何か心配事でもあるのだろうか。」

「あの……アレクサさんは犯人の変態紳士に娘を誘拐されたんですね。きっと娘さんももうすぐ救出されます。だから心配しなくても大丈夫ですよ。」

「そうか……それは良かった」

励ましてみたが、おじ様は益々ますます顔色が悪くなる一方だった。彼の為にも早く犯人を捕まえてあげたい。そんな事を考えていると、どこからか音が聞こえているのに気づく。

「？」

ドンドンドン、とどこかで壁を叩く音だ。別の部屋で誰かが暴れているのだろうか。そんな俺の怪訝な様子をおじ様は察したのか、疑問に答えてくれた。

「この音が気になるのですか？実は……私はこの屋敷の地下でモンスターを飼ってしまっていてね。彼らが暴れている音がここまで響いているのでしよう。」

貴族の中でも物好きな人はモンスターを飼うことがある。俺も昔、悪魔で貴族をしているというゼーレシルト伯のモンスターを見た事があるし、モンスターを飼うのは、それ程珍しくもないのだろう。

「では、俺はそろそろ帰りますね。娘さんも必ず救出しますから心配しなくて大丈夫ですよ。」

色々と世間話をした後、俺は席を立つ。既にここに来てから一時間近くが経過していた。窓の外を見ると空が紅く染まっている。

「ええ、期待していますよ。シンフォニア卿にも宜しくお伝えください。」

おじ様は俺に恭しく頭を下げる。おじ様は相変わらず紳士的な態度だ。俺が部屋を出る時もずっとドンドン、と壁を叩く音が響いていた。

## この闇の悪魔に天誅を！

クレアに休みを貰ってから三日後、俺は城の自室で引きこもっていた。

「サトウカズマ！ 入るぞ！」

ノックもなしにクレアが部屋の中に入ってくる。勢いよく入って来た彼女だが、部屋の中に入ると天井のある一点を見つめて立ち止まった。彼女の見つめる先には綺麗なツララが生えている。

「なぜこんな所にツララがあるのだ？ 冷却魔法でも使ったのか？」

「ああ、俺がさつき『フリーズ』で天井を凍らせたんだよ。この氷が溶けるのを眺めていると一日が終わるんだ。」

「お、お前……そんなニートみたいな生活をしていて恥ずかしくないのか。ダステイネ

ス卿達にも顔を見せなかったそうだな。」

俺のとおつておきの楽しみをクレアは呆れた様子で見る。俺はこの三日間の休日を、氷が溶けるのを見る事だけに費やしていた。

「この前めぐみんを襲ったから合わせる顔がなくてな……。それより俺に何か用か？ アイリスの下着を探しているなら俺の部屋にはないぞ。」

「ななな、なぜ私がアイリス様の下着を探さなければならんのだ……。た、確かに少し見てみたい気もするが……。ま、待て！今の発言は無しだ！忘れろ！」

こんなやつにアイリスの護衛を任せていて大丈夫なのだろうか。

「す、すまない、取り乱した。ほら、この前犯人がミシン……とやらを作るように要求してきたらどう？あれが遂に完成したのだ。」

さっきのアイリスの下着の件について問い詰めたい所だが、とりあえずクレアの話を知りたく。

「もう出来たのか。」

「ああ、今日の昼頃には犯人の元へミシンを持っていくぞ。それまでに準備しておけ。」

クレアはそう言い残して部屋を去ろうとする。彼女がドアを開けた瞬間、廊下を走っていたメイドとぶつかりそうになっていた。部屋の外をよく見れば、使用人達が忙せわしく動いている。何かあったのだろうか。

「今日は城で魔王討伐を祝うパーティがあるのだ。ダステイネス卿も来るそうだぞ。まあ、私達には関係ない事だ。」

俺の疑問が顔に出ていたのか、クレアが教えてくれる。彼女はそれだけ伝えると部屋を出ていった。俺はベッドに横になり、再び凍った天井を見る。

「俺が魔王を討伐したのに、パーティに呼ばれてないんだけど……。」

俺の文句は誰に届くこともなかった。

+

それから数時間後、俺とクレアは犯人がミシンの受け渡し場所に指定した広間へと来ていた。広間はガヤガヤと老若男女の騒ぐ声が飛び交っている。その中に兵士達も紛れ込んでいた。

「ミシンは貴様が持っている。犯人が近づいてきた時は私が援護する。」

俺は重たいミシンを持ったまま広間へと足を進める。クレア含め周りの兵士達はミシンから目を離さなかった。

「でも、どうやって犯人を捕まえるんだ？ 視界が真っ暗になればどうしようもないだろ？」

「いや、やり方はいくらでもある。まずは聴覚を利用することだ。私は特に耳がいいからな。犯人が近づいてくる足音、鼓動、呼吸音……。それらを聞き分ければいいだけの話だ。」



「いや、そんな簡単に言うけど、クレアの耳が良かった事なんて……」

良かった事なんてない。そう言おうと思ったが、直前で思い留まる。今にして思えばクレアの聴覚が鋭い瞬間は何度かあった。以前、アルダープのいとこの屋敷に聞き込みに行つた際も、俺には何も聞こえないのに、クレアだけ彼の声が聞こえていた事があった。彼女は人一倍聴覚が鋭いのだ。

「お前、本当に耳がいいんだな……」

「だからそう言っているだろう。後は貴様の魔法で犯人を牽制するくらいだな。出来そうか？」

クレアに言われて考え込む。簡単に出来るとは言えない。俺が使えるスキルと比べ、初級魔法やドレインタッチくらいのものだ。それだけで犯人に太刀打ち出来るだろうか……。

「やっぱり俺には無理………」

前を見るとクレアが俺の事を真正面から見据えている。彼女の碧眼に俺の姿が映っていた。そうだ、俺にはクレアがいる。

「……クレアが正確に犯人の場所を教えてくれれば、上手くいくかもしれない。……多分。」

顔を見合わせる俺達。俺の言葉を聞くとクレアは小さく笑った。彼女の笑顔を見るのはこれで二回目だ。

「なら犯人が来たら合図を送ろう。頼りにしているぞ、バティ。」

その表情に不覚にもドキッとしてしまう。彼女は俺の心の機微に疎いようで、何も気づかず前を歩んでいく。俺は心の中に湧き上がる想いを隠しながら犯人の到着を待つのだった。

+

「……………遅い」

待てど暮らせど犯人はやって来ない。広間に来たのは昼頃なのに、もう日は落ちて辺りは闇に包まれていた。心もとない街灯が周囲をほんのりと照らすだけで、広間にいた大勢の人間も家や宿に帰り、後には十人程の兵士達が残っている。

「なあ……………まさかだけど、受け渡し時刻を間違えた……………とかじゃないよな？いくらなんでも遅すぎないか？」

「時刻は再三再四確認したはずだ。まあ確かに遅いが……………、捕まるのが怖くて逃げたのかもしれないな。」

犯人が来るのが遅くて退屈しているのは俺達だけじゃないようで、周りの兵士達の中には堂々と欠伸をしている者もいる。

「……………ここは一旦城に帰るか？そのうち犯人から『昨日は受け渡し場所に行けなくてごめん♡』みたいな手紙が届くだろう。」

「そんな軽いノリなのか!?だが、確かに犯人は来ないし……………」

そんな事をクレアと話している時だった。突如ゴーン、と除夜の鐘のような音が響く。その音を合図に周りの景色が徐々に色を失い始めた。

「来たな……！」

周囲は暗闇に包まれ近くにいたクレアも見えなくなる。俺はミシンを抱きかかえ、どこから来るであろう犯人に身構えた。

「……………」

必死に耳を澄ます。聞こえてくるのは自分の心臓のバクバクとした鼓動だけだ。

「……………」

まだ犯人は来ない。先程まですぐ傍にいたクレアすらも見失い、俺は暗闇の沼に一人取り残される。ただクレアの合図だけを待つてジツとその場を動かないでいた。

「……………く、クレア。合図はまだ…………」

「後ろだ！」

クレアが叫ぶと同時にヒュンと剣が風を切る音がする。彼女が近づいてきた犯人に気づき剣を振ったのだろう。クレアは特に聴覚が鋭いから、いち早く犯人に気づいたのだ。

「ぎゃあああああ！」

敵の断末魔が聞こえた。クレアの読みは当たったようだ。俺は敵の声がした方に走って、犯人であろう人にぶつかると。そのまま敵にドレインタッチを使った。

「や、やめてください！いきなり何するんですか!？」

相手から聞こえたのは女の子の声だった。大人の女性を誘拐している変態紳士は男の人だろう。この人は犯人ではない。

「いや、カズマ殿！その女が犯人だ！」

俺は既に相手から手を離してしまった。クレアに言われて先程まで女がいた所を手で探ってみるが、誰もいない。その時ゴーン、と音が鳴る。除夜の鐘の音だ。色も明かりも失っていた周りの景色が徐々に鮮明になっていく。俺の目の前には剣を持ったままウロウロするクレアと、何も出来ずにアタフタする十名程の兵士がいた。

「カズマ殿、ミシンはどうした……！」

クレアに言われて手元を見る。さつきまで抱きかかえていたミシンは跡形もなく消えていた。きっとさつきの女が俺から奪い取って行ったのだろう。取り返しのつかない失敗をしてしまった。思わず天を仰ぐ。

「悲観してる場合じゃないぞ。まだ犯人が近くにいないかもしれない。すぐに探しに行けば間に合うはずだ。」

「ああ……」

クレア達に申し訳なく思いながらも、俺は犯人探しに尽力するのだった。

十

結論から言うと、犯人は見つからなかった。犯人にミシンを奪われた後、俺達は数時間にも及ぶ捜査をした。しかし、犯人はテレポートでも使ったのかどこにも痕跡は残っていないかった。俺達は長い捜査を終え城へと帰ってくる。

「クレア、ごめん……俺のせいで……。」

俺は憂鬱な気持ちで城の廊下を歩く。あの時、犯人の手を離さなければ。もつとクレアの指示を聞いていたら。後悔ばかりが心に募っていく。

「過ぎたことは気にするな。お前はよくやっている。」

クレアは慰めてくれるが、俺の気持ちは晴れない。彼女の優しさが余計に辛かった。

「ありがとなクレア」

廊下を歩んでいく。俺達がある部屋の前を通り過ぎようとした時、中から聞き覚えのある名が聞こえた。

「いやはやダステイネス卿、大変見目麗しい！是非私の息子と縁談するつもりはないですか？本当に出来のいい息子なんですよ！」

“ダステイネス卿”。聞き間違いでなければダクネスの事だ。そういえば今朝クレアが言っていたが、今日は城でパーティが開かれているらしい。ダクネスもパーティに参加しているのだろうか。

「ちよつと覗いていくか。」

俺は興味本位でパーティ会場のドアを開ける。中には、豪華な衣装に身を包む貴族達があちらこちらに居た。



「そういえばお前はパーティに呼ばれていないのか？魔王を討伐したのは貴様だろうか？」

「ああ、その事については責任者に文句を言ってやりたい所だが。」

クレアにそう言っていると、何やら人が集まっている箇所があるのを見つけた。視線を奥にやるとその中心にはダクネスがいる。

「ダステイネス卿も毎日縁談を断るのは大変でしょう。ここは私と籍を入れて落ち着くのはどうでしょう？」

「いやいや、私と是非お見合いをして頂きたい！私も元々冒険者でして、ダステイネス卿とは相性がいいと思いますよ。」

相変わらず凄くモテているダクネス。周囲の貴族達もよくそんな齒に衣着せぬ褒め言葉を言えるものだ。

「皆さんお上手ですこと。私はこのような場に不慣れでして優しくしてくださいと助か

りますわ。」

誰だお前は。今喋ったのはダクネスなのだが、普段の変態チックな言動からは想像もつかないほどお淑やかだ。

「よおダクネス、元気にしてるか？」

俺の一声でダクネスの周囲にいた貴族達が一斉に俺の方を振り向く。ダクネスも俺を見て喜色を取り戻したようで、キラキラした目でこちらを見ていた。

「カズマ殿！私にはカズマ殿という婚約相手がありますので、皆様どうかお手柔らかに……。」

いつの間にか婚約相手にさせられたが、悪い気はしない。女の子に好意を寄せられて嬉しくない男などいないのだ。

「その男がダステイネス卿の婚約者なのですか。婚約者にしてはいかにも平凡な男と言

いますか……」

「まさかあの魔王を倒したサトウカズマですか？ 良すぎず悪すぎずと言った顔立ちですね。」

「なんだとおいこら」

周りの貴族達が俺の事を褒めているのか貶しているのかよく分からない感想を述べる。まあ平凡と思われてるだけ良しとしよう。

「そんな男はダステイネス卿にはつり合いません！」

そんな中で俺を非難してきたのは、大柄な一人の男。ガタイのいいそいつは俺の前に威圧するように立ち塞がる。

「こんな男がダステイネス卿の婚約者など笑止千万。何かの間違いでは？」

「カズマ殿はこれでも頼れるパーティーリーダーです。魔王を討伐した勇者でもありませんし、これ以上の男性などいませんよ。」

ダクネスがやんわりと俺にフォローを入れるが、それでも大柄な男は止まらない。

「何でも巷ではクズマだのカスマだの言われているそうではないですか。そんな男に大貴族のダステイネス卿のお相手など務まるはずもない。」

俺は少しずつ怒りが溜まっていくのを感じるが、我慢する。相手は大柄で下手に手を出したら返り討ちにあうかもしれないからだ。

「聞いた所によると、サトウカズマはアイリス王女の捜索にも携わっているそうですね。それで、王女は見つかったのですか？」

「いや……それはまだ……」

「ほら！こんな男がつり合う訳がありません！ダステイネス卿、ここは私とは是非縁談を……」

男がダクネスに言い寄ろうとした時、バチン、と男がビンタされた。男をビンタしたのは俺でもダクネスでもない、クレアだ。

「貴様、今言ったことをすぐに取り消せ……！」

「はっ……え……？」

突然のことに戸惑う大柄な男。大貴族であるシンフォニア家のクレアが怒ったからこそその反応だろう。彼女が怒りを頭あたまにしたのは俺も驚いた。

「取り消せと言っているのだ！そして今すぐこの男に謝罪しろ！」

「……も、申し訳ございません。」

「あ、いいよ。俺もそこまで気にしてないし……」

クレアに言われるがまま頭を下げる大柄な男。彼女が怒っている様子を見たら何だか落ち着いてきた。クレアは男が頭を下げるのを見るとふいつ、と踵を返してパーティー会場から抜けていった。

「普段は冷静沈着なシンフォニア卿があそこまで怒るのは珍しい。カズマ、私がいらないに彼女と何かあったのか？」

「いや……思い当たる節は何もないけど」

むしろ今日は犯人にミシンを取られて迷惑をかけたくらいだ。

「すぐにシンフォニア卿を追いかけてやれ。今の彼女にはきつとお前が必要だ。この場は私が収めるから、心配するな。」

ダクネスに言われて俺もクレアに続きパーティー会場を抜ける。左右を見渡すと廊下の遠くの方にクレアの人影が見えた。俺は急いで走って彼女の後を追う。クレアは歩いていたのですぐに追いついた。

「クレア! さっきはどうしたんだよ、急に怒って……。」

「別に怒ってなんかない。」

怒ってないと言いつつも彼女の目は笑っていない。さっきの男が余程、頭にきていたのだろうか。クレアは足を早める一方で、俺の話に耳を傾けない。

「待ってくれクレア。」

俺は前に行く彼女の腕を掴んだ。クレアは腕を振りほどくことはせず、俺の方に目をやった。

「これから国王様に報告に行かなければならない。手短に言え。」

彼女の無愛想な態度は相変わらずだ。

「さっきは俺の事を庇ってくれてありがとうとな。」

「……ふ、ふん。当然のことをしたまでだ。」

俺の感謝の気持ちを聞いて照れているクレア。無愛想な表情から打って変わって、初うぶな態度を見せるので、俺はニヤニヤと彼女の朱に染まった顔を観察した。

「な、なんだ貴様！その薄ら笑いをやめろ、何がおかしいのだ！」

「いやー？クレアでもそんな顔するんだなって思ってたな。今の顔は魔道カメラにでも収めておきたかったな。」

「今のはナシだ！ さつきは……………そう、アイリス様のことを考えていて顔が緩んだだけだ。決してお前に感謝されたのが嬉しかったとかそういう訳じゃ……………こら、ニヤニヤするな！」

この後もクレアが照れたことを散々からかっていたら、クレアに強めに叩かれ、俺は渋々コケにするのを止めるのだった。

十

クレアに怒られた後、夕食を取っていると彼女が部屋を訪ねてきた。これから王様に今回の騒動の報告に行くからお前もついて来てくれないかと。彼女はそう言っていた。俺は迷った。王様は筋肉隆々でいかにも怖そうな人だ。出来ることなら会いたくない。

「あのマツチヨな王様に怒られるのもな……………」

「……………やはり嫌か？」

今日のクレアはやけにしおらしい。彼女を一人で王様の所に行かせるのは寝覚めが



悪い。暫く迷ったが、結局俺はクレアについて行く事にした。  
所変わって王様の部屋の前。

「失礼致します、クレアです。事件の報告に参りました。」

部屋の中からくぐもった声が聞こえ、俺とクレアは中に入る。部屋の奥には椅子に座って書類に目を通すマツチヨがいた。王様だ。

「お前達か。事件の報告に来たからには、何かしら進展があつたのだろうか。」

「い、いえ、今回も犯人に逃げられてしまいました……。」

「ふむ。」

王様はゆっくりと立ち上がって俺達の方へ近寄ってくる。ゴツイ見た目も相まって子供が見たら失神するかもしれない。俺は酷く怯えながらジツと立っていた。

「今まで犯人と接触するチャンスが二回あつた。そのどちらにも失敗したということかね？」

「申し訳(わけ)ございません。」

ひたすら頭を下げ続けるクレア。

「では聞こう、此度の娘の救出部隊、その隊長は誰だ」

「……私です。」

「そうだ、お前は長なのだ、リーダーなのだ。今回の救出が失敗したのも全てお前の責任だ。それが上に立つものの責務というものだ。」

王様も国の長という立場にあるからか、その重要性を熱弁する。俺達はただただ王様のいうことを聞いていた。

「……とにかく、長として責任を取りなさい。それがリーダーの役目だ。」

「お、お待ちください！次こそは必ずアイリス様を救出してみせます。」

「いや、お前に次は無い。お前はクビだ。」

クビ、それはクレアが最も恐れていたことの一つだ。彼女はアイリスを守る為だけに

生きてると言っても過言ではない。クレアをアイリスから遠ざけることがどれほど残酷なことか王様は分かっているのだ。

「待つてくださいよ。クレアは今までアイリスの為に頑張っていたんですよ。アイリスを誘拐された時は心の底から悲しんでいたし、誰よりもアイリスの救出に尽力していたはずです。」

すかさずクレアがクビにならないようにフオローを入れる。彼女の頑張りはバディの俺が一番そばで見えてきたつもりだ。彼女を救えるのは俺しかない。

「ほう、私に刃向かうつもりか？」

「ひっ……！」

王様は例の如くとてつもない威圧感を放つ。凄まじいオーラで窓はガタガタと揺れ、紅茶のカップにはヒビが入る。俺は王様の放つオーラに負けないように踏ん張り言い返した。

「…………お、王様が相手でも俺の意見は変わりません…………！クレアをクビにするのはおかしいです」

「カズマ殿…………！」

俺は柄にもなくクレアを擁護する。正直言つて王様はめちやくちや怖い。でも、俺はこの前のクレアの涙を見ている。彼女が再び泣くような事にはなつて欲しくなかった。俺が王様に立ち向かつて一触即発の空気が流れる中、ドアからノックする音が聞こえた。

「失礼します、国王様、犯人から再び手紙が来たようです。」

部屋の中に入って来たのは一人の兵士。その手には犯人から送られてきたと思われる手紙も握られていた。兵士が手に握った手紙を王様に見せる。

「…………ふむ、これが犯人の要求か。」

王様は手紙を見て暫く考え込んでいる。一体犯人は何を書いたのだろう。王様は一

時経った後、クレアを手招きする。

「カズマくん、君のその勇氣に免じてクレアのクビは撤回しよう。その代わりに新たな犯人の要求に応じること。これが条件だ。」

おお、王様も話せば分かるやつじゃないか。犯人の要求が何かは知らないが、それくらいお安い御用だ。隣のクレアを見ると王様から貰った手紙を熱心に読み込んでいる。

「クレア、犯人からの手紙には何て書いてあるんだ？」

「……わっ！こ、これはお前に見せるほどのものではない。気にするな。」

「？、そうか」

慌てて手紙を隠すクレアを俺は不思議そうに見つめる。

「二人とも、もう夜が遅いから帰りなさい。話は以上だ。」

俺とクレアは王様がいる部屋から出る。夜も更けて僅かな月明かりだけが廊下に注

いでいた。

「良かったなクレア、クビは免れたぞ。」

「あ、ああ。そうだな……」

どこか歯切れの悪いクレア。クビにならなかったことが嬉しくないのだろうか。暫く廊下を彼女と歩いてみるとクレアが俺の腕を掴んで言ってきた。

「先程はその……礼を言う。国王様に刃向かってくれて……その、助かったというかなんだか心強かった。」

「お、おう。少し王様の顔がトラウマになってるだけだし、そんなに気にするなよ」

さつきはクレアが照れたのをバカにしていたが、いざ自分が感謝されると中々こそばゆい。顔が赤くなっていないだろうか。

「もしさつきみたいに王様にクビにされそうになったら俺のことを呼んでもいいぞ。大したことは出来ないけどクレアの味方になれるかもだから。モールス信号でも何でも

送ってくれ」

「モールス信号？なんだそれは？」

「例えばSOSなら・・・。このリズムで音を鳴らすと助けてという意味の合図になるんだ。」

「ほう、覚えておこう。」

クレアは真剣な顔で俺の話を聞いている。そんな顔じゃなくてもっと無邪気に笑っていた方がいいのだが。

「お前は笑ってた方が可愛いぞ。いつもみたいに無愛想な顔だと怖いからさ」  
「か、可愛い!? あ、あまり私をからかうな！」

クレアはまた照れた表情で俺をバシバシと叩いてくる。彼女のその態度が少し心地よかった。ずっとこんな日々が続けばいい、そう思えるくらいに。

このハーレム生活にさよならを!

クレアと話した翌朝。

『どっだっどっ……?』

俺はただっ広い草原の中に立ち尽くしていた。地平線まで草が生い茂っている。何気なく周囲を見渡すと遠くに人影が見える。それはいつもの白スーツを着たクレアだった。

『おいクレア!』

俺は大声を出して彼女に呼びかける。だがクレアはあさつての方向を向いていて、俺の声は聞こえていないようだ。彼女はどこかへと歩んでいく。クレアの向かう先には鬱蒼とした薄暗い森がある。

『クレア!俺の声が聞こえないのか!』

クレアは一步一步森へと近づいていく。あの森はどこか危険な気がして、彼女を止めようと俺は走ろうとする。だが、どういふ訳か足が一步も動かなかった。体が金縛りに



でもあつているようだ。

『クレア！戻ってこい！そつちは危険だ！』

クレアは俺の声に耳を傾けず、森の中へと入っていく。オレは必死に呼び求めるが彼女には全く響かない。そしてクレアの姿が完全に俺の視界から消えた所で俺は目を覚ました。

「はあ……はあ……」

目を開けるとそこにはいつもの天井。さつきまでの草木や森はどこにもなく、ふかふかのベットと毛布だけが肌に触れている。どうやら夢を見ていたみたいだ。

「寝覚めの悪い夢だな……」

さつきの夢の絶望的な感情がまだ心に残っている。脇や背中が寝汗で少し濡れていた。俺は体を起こして部屋を見渡す。いつもの部屋なのだが、どこか違和感がある。それは窓を見た時に気づいた。

「もう日が落ちている……?」

空は黄金色に染まっている。太陽の位置からしても今は夕方のようなのだ。つまり、俺は昨日の夜に床につき、翌朝の夕方までずっと寝ていたことになる。いくら自堕落な俺でもここまで眠りにつくことは滅多にない。どうということかと頭を悩ませていると、

「目が覚めましたか? カズマ殿」

ドアを開けて部屋に入って来たのはレイン。

「ああ、さつき目が覚めた所だけ……。ここまで長時間寝たのは初めてで、レインは何か知らないか?」

俺の言葉を聞いたレインは一瞬狼狽えた表情を見せる。

「実はカズマ殿には昨晚、睡眠薬を盛らせて頂きました。どうか気を悪くされなくてください。」

レインから明かされる衝撃の事実。俺は菓を盛られた怒りよりも驚きの方が勝っていた。

「えつと……なんでそんな事したんだ？」

「クレア殿の命令です。」

「クレアが……？」

一体どういう事だろう。状況を上手く呑み込めない俺にレインが説明してくれる。

「昨晚、犯人から第三の要求が来しました。カズマ殿は知らないでしょうが、その内容は『アイリス様を返して欲しければシンフォニア家のクレア殿を連れて来い、それで王女様を返してやる。』というものだったそうです。」

アイリスを返す代わりにクレアを……？嫌な予感がする。

「まさかクレアはアイリスを救うために犯人の元へ向かったというのか？」

レインは黙って頷く。

「クレア殿は、『私が一人で犯人の元へ向かうとなると、きつとカズマ殿が止めに来るだろうから、睡眠薬を盛って部屋から出さないようにしてくれ』と言っていました。」

なんて事だ。とにかく今すぐにでもクレアの後を追わないといけない。時刻は既に夕方を過ぎてているが、なんとか間に合うだろうか。俺はジャージのまま部屋から飛び出ようとすると、

「お兄様!」

綺麗な稲穂色の髪に碧眼。見紛うこともない、俺の事を兄のように慕ってくれるアイリスだ。アイリスが遂に帰ってきたのだ。彼女は出会い頭に俺に抱きつく。

「おう、アイリス!大丈夫だったか?怖い目に遭わなかったか?」

「はい!監禁生活はとっても楽しかったです!」

「そ、そうか……」

アイリスが楽しんできたのが癪に障るが、何はともあれ無事で良かった。だが、今はアイリスよりクレアの方が心配だ。

「なあ、アイリス、クレアを知らないか？ 確か犯人の元へ向かったはずんだけど……」

アイリスはクレアの名前を聞くと俯いた顔で言う。

「クレアは誘拐犯に捕まってしまいました……」

消え入りそうな声だった。アイリスの言ったことが信じられなくて俺はよろよろと数歩歩いた後、その場にへたり込んでしまう。

「大丈夫ですか？ カズマ殿」

「ああ……」

レインに曖昧な返事を返す。クレアは昨晚の内から犯人の要求を知っていた。つまり、犯人の元へ行く覚悟も昨日から決めていたわけだ。その事に気づかなかった自分が嫌になる。

「お辛いでしようが、アイリス様が帰ってきたことを国王様に報告に行きましよう。国王様もアイリス様を心配しているはずです。」

そう、当初の目的であつたアイリスの救出には成功したのだ。クレアのおかげでアイリスがここにいる。俺はあいつの為にもアイリスの無事を報告に行かなければならない。俺は重たい腰を上げて王様の元へと向かった。

+

「失礼します、お父様。」

俺はアイリスと二人で王様の部屋の前に来ていた。アイリスのノックと共に俺達は部屋の中に入る。中には当然王様が椅子に腰掛けていた。

「アイリス……！」

娘の姿を見るなりすぐに立ち上がる王様。そのままアイリスに抱きついて嗚咽を漏らし始めた。

「や、やめてくださいいお父様。お兄様も見えますよ……」

こうして見ると王様とクレアは似ている。アイリスに溺愛しているという点で。暫く王様は娘を抱きしめた後そつと手を離し俺に向き直った。

「よく娘を連れ戻してくれたカズマくん、お礼に何でも一つ願いを叶えてあげよう。自由によってくれたまえ。」

俺がアイリスを助けた訳では無い。アイリスがここにいるのはクレアのおかげだ。きつと今の俺は微妙な表情をしていたと思う。でも、王様は娘が帰ってきた事に喜んでるせいか俺の様子には気づかなかった。

「お兄様、レインから聞きましたが、確か私を連れ戻せたらその……私と結婚……するつもりだったのですよね。もしかしてその事をお願いするのですか……?」

アイリスが不安と期待の混じった目で俺を見つめてくる。娘の話を聞いた王様はポーンと手を打ち屈託のない笑みを浮かべる。

「そうか! 娘と結婚したいと言うのだね。よかろう、娘の無事はカズマくんのおかげだ。特別に結婚を許可してやろう!」

「あ、ありがとうございます……」

悪意のない王様の発言に俺はただ相槌を打つ。俺が夢に見ていたアイリスとの結婚だ。もつと喜ばなくては。

「私もお兄様をお慕いしてるからとても嬉しいです……! これからもよろしく願いますね!」

「あ、ああ……」



そんな話をアイリスとしている時だった。突如、ノックもなしに後ろの扉が開かれる音がした。ここは王様の部屋だからそんな無礼な入り方をする人はまずいないだろうに。

「我が名はめぐみん！アークウイザードを生業とし、カズマの妻となる者！カズマがアイリスと結婚しようだなんてそうは行きませんよ！」

紅魔族風の名乗りをあげるめぐみん。その後ろには彼女を必死に止めようとするダクネスもいる。

「な、なんだねこの人達は……!?!」

「しし、失礼しました！ほら、めぐみん早く帰るぞ！」

ダクネスはめぐみんを羽交い締めにして部屋から連れ出そうとするが、めぐみんもドアを掴んで抵抗している。

「後ろにいるのはララティーナか? 城の警備は厳しかったはずなのにどうやってここまで……?」

「ダクネスの家紋を使えばここに来るなど造作もないことですよ。それよりカズマ! ここには手紙の返事をしに来たのですよ。」

「手紙……?」

頭の中の記憶を辿っていくと、めぐみん達に手紙を書いたのを思い出した。確か内容は俺とハーレムを作ろうというものだったはずだ。

「そういえばそんな事もあったな。」

「私はカズマを愛していますから、例え一夫多妻でも構いません! 私とも結婚してください。」

めぐみんは恥じらうこともなくそう言っただけだ。王様の前だというのに求婚してくるめぐみんに目を丸くする。

「国王様の前で失礼だろうめぐみん! 申し訳ありません。私達はもう帰りますので

……」

「何を言っているのですか、ダクネスもカズマと結婚したいのでしょうか？ 貴方がここに来るのを嫌がりながらも満更でもなかったのを知ってますよ。」

「なっ!?!」

めぐみんの言葉に分かりやすく狼狽えるダクネス。

「ほら、ダクネスもここで自分の気持ちを言ったらどうですか。今言わなければきつと後悔しますよ」

「い、いや……私は別にそういうつもりは……」

ダクネスはもじもじしながら俺の事をチラチラと見ている。だが、めぐみんに言われた事を気にしたのか意を決したように俺の目を見据えた。

「か、カズマ……、私もお前の事をその……好きだ。是非私ともお付き合いしてくれたら……」

ダクネスはめぐみんと違ってかなり恥ずかしがっている。

「どうするのですか？お兄様」

「どうするって……」

アイリスとの結婚だけでなくめぐみんとダクネスにも求婚された。夢のハーレム生活だ。俺が求めて止まなかったもの。断る理由はない。

「ああ、めぐみんもダクネスも俺と結婚しよう」

俺の返事を聞いた時のめぐみんとダクネスの嬉しそうな顔。ハーレムというクズな選択だが、彼女達は受け入れてくれたようだ。

「貴族や王族では一夫多妻は珍しい話では無い。私からも祝福の言葉を送ろう。」

王様も賛辞の言葉をくれる。こうして俺のハーレムを作りたいという夢は無事叶ったのだった。

+

アイリス達と結婚してから一週間後。俺達は全員王城で過ごすことになった。

「お兄様、おはようございます。」

扉からひよっこりと顔を出したアイリス。つい最近まで誘拐されていたというのに彼女は元気なままだった。彼女は挨拶と共に俺のすぐ隣に座る。

「はあ……………」

「ため息なんてついてどうしました？何か悩み事ですか？」

無意識のうちに嘆息していたようだ。今日は空も曇っていて俺のどんよりとした心に拍車をかける。

「いや悩みって程でもないんだけど……。クレアは今頃何をしてるのかと思ってな。」

クレアはアイリスを救うために犯人の元へ行つてしまった。流石に殺されたりはしていないだろうが、それでも辛い日々を送っている気がしてならない。かと言つて犯人の居場所が分からない以上、俺が何か出来るわけもなく。せいぜいすることは、たまに彼女の今の様子を想像するだけだった。

「私もクレアにはいつも助けられていました。でも、私を助けに来た時も彼女は私達に幸せになつて欲しかったんじゃないでしょうか。私達が今を楽しむことがクレアの為になると思います。」

それは綺麗事に過ぎないと言いたくなるが、アイリスも少し涙目になつていることに気がつく。彼女も自分のせいでクレアが誘拐された事を分かっているのだろう。ここでアイリスを傷つけてもどうにもならない。

「それにクレアの事はレイン達を探してくれているようですよ。近いうちにクレアが見つかつてもおかしくありません!」

俺はアイリス達と結婚し、寿退社ということで事件の捜査からは外れたが、レイン達は未だに犯人の行方を追っているらしい。俺もクレアの捜査に加わりたかったが、事件の捜査に私情を持ち込むような人は参加するべきではないと、レインからキツパリと断られてしまった。

「そうだな、クレアが見つかるのを待つしかないな……」

「そういえばお兄様、クレアの部屋の机の上にお兄様宛ての手紙が置いてあったのですが、中身をもう読みましたか？」

「手紙？」

アイリスは懐から一枚の封筒を出す。封蝋シールで止められておりアイリスもまだ中身を見てないことが伺える。

「まさかアイリス……勝手にクレアの部屋に入ったのか……？」

「ええ、もしかしてやってはいけないことでしたか……？」

あまり無断で他人の部屋に入るのはよくないと思うが、折角手紙を見つけてくれたの

だから今回は目をつぶろう。俺は彼女から封筒を受け取り、中の手紙を開いた。

『この手紙をお前が見ている頃には、私は犯人の元にいるだろう。きつとお前は私の事を心配しているだろうが、何も気に病むことはない。すぐに犯人を倒して戻ってくる。心配するな——。』

手紙の冒頭の部分には、俺を安心させる為の内容がちらちらと書いてあった。俺が彼女の身を案じることも想定内だったようだ。

『——きつと、アイリス様は私が自分の身を犠牲にして助かったことに酷く苦しむだろう。そうならたらお前が傍についてやってくれ。お前ならきつとアイリス様を励ましてくれると信じている。そういえばお前はアイリス様と結婚したいと言っていたな。喜べ、特別にお前とアイリス様との結婚を許可してやる。これからはアイリス様を支えてやってくれ。私のことは忘れてくれて構わない——。』

次に書かれていたのはアイリスのことをとにかく幸せにしてやってくれという内容だ。この手紙からもアイリスへの愛情がひしひしと伝わってくる。中でも驚いたのが、俺とアイリスの結婚を許可してくれていることだ。この前まで、あんなに結婚に反対していたのに。いつの間にか彼女の俺に対する評価が変わっていたようだ。

『——言いたいことは色々あるが、これ以上書いても心残りが増えるだけだから、手紙はこれくらいで止めておく。どうか私の事を忘れてアイリス様を幸せにして欲しい。』



私からの頼み事はそれだけだ。頼んだぞ。』

手紙はそれで終わっていた。俺は大きなため息をつきながら、手紙をそつと閉じてアイリスに渡す。

「お兄様……？大丈夫ですか？」

アイリスが心配そうに俺の顔を覗き込む。実際、俺の気分は最悪だった。まず、勝手に自分を犠牲にしたクレアへの怒り。それに俺に何も相談してくれなかった悲しき。今更どうにも出来ないことのやるせなさ等が幾重にも重なり合って俺の心は沈んでいく。

「クレアは今頃何をしてるんだろうな……」

この発言をするのも何回目だろうか。ただ彼女が今何をしているのか気になってしょうがない。アイリスは俺の渡した手紙を熱心に読み込んでいる。

「お兄様、ここに何か書いてありますよ。」

アイリスが指している所は手紙が入っていた封筒。さつきは気づかなかったが、丸い点と横棒が書いてある。一見すれば、ただの汚れにしか見えないだろう。

「これは……モールス信号か……?」

封筒の裏に書かれていたのは『…………』という小さな文字。俺がかつてクレアに教えたSOSのモールス信号だ。

「なんでこんな所にこれが……?クレアが書いたのか?」

クレアが俺にだけ分かる方法でSOSを求めている。つまり、俺に助けて欲しいということだろうか。手紙の本文では、散々自分のことは心配せずにアイリスの事ばかり憂いていたクレアが、とうとう助けを求めてきた。彼女を救えるのは俺しかない。

「アイリス、大事な話があるんだが……」

「お話ですか、どうしたのです?」

俺は一呼吸置いて答えた。

「ハーレム生活はなしだ。離婚しよう。」

「……………え？」

「俺はすぐにでもクレアを探しに行く。めぐみん達にも離婚の話を伝えておいてくれ  
！」

「ちよ、ちよつと待つてくださいいお兄様！」

俺はアイリスを置いて部屋から出る。アイリスは納得していない様子だが彼女に構っている暇はない。ずっと夢見ていたハーレム生活を俺は手放すことにした。過去の俺なら考えられないだろう。でも、ハーレムを手放してでも結婚したい相手がいるのだ。俺を必要としてくれていている人がいる。彼女には俺しかいない。クレアを助けに行かなければならない。

「待っているよクレア……………！」

曇っていた空はすっかり晴れ、温かい日差しが俺を照らしていた。

## この二人組に恋情を！

アイリス達との離婚を決めた。今の俺はあまりにも身勝手だろう。結婚したかと思つたらすぐにまた離婚して。アイリス達が怒つてもおかしくない。だが、それでも俺の中にクレアに対する想いが芽生えているのに気づいてしまった。あの手紙のモース信号は、彼女が俺に助けを求めている証拠だ。俺が行かなくてはならない。俺はクレアの救出するために、レインに話を聞いていた。

「先程、日本人で貴族という犯人の特徴に当てはまる人物が他国に見つかりました。恐らくクレア殿もそこにいる可能性が高いでしょう。」

彼女の話によると、犯人の目星は付いているとの事だった。既に救出部隊もその貴族の所に向かったらしい。俺もその部隊に加わりたかったが、時遅く間に合わなかった。

「じゃあ、クレアはもうすぐ助かるんだな？」

「……必ず助かるとは言いきれません。私達に出来ることはクレア殿の無事を祈るくら

いでしよう。」

俺はクレアが無事だと言って欲しくて彼女に聞いてみるが明確な答えは得られない。クレアの為に何かできることはないかと思うが、救出部隊がもう出発した以上、俺には何も出来ない。俺は奥歯を噛みしめた。

「でも、カズマ殿にも出来ることはありませんよ。それは犯人に誘拐された被害者の家族達に励ましの言葉を送ることです。誘拐された人が帰ってくるのを待ち望んでいる人がいます。カズマ殿も身近な人が誘拐されたのですから、被害者の家族の気持ちがかかるのではないですか?そういう人達に寄り添う事も大切だと思いますよ。」

レインは何も出来なかった俺に一つの解決策を出してくれた。それは被害者達に寄り添うこと。クレアが誘拐され、身近な人がいなくなる悲しさが分かる俺には適任かもしれない。

「ほら、そんなに落ち込んでもしようがないですよ。気分が滅入る時は忙しくしてた方がいいんです。弱気になるくらいなら早く被害者の元へ行ってください。」

レインはさっさと俺を被害者の元へ行かせようとする。彼女なりの優しさに、俺は微笑を浮かべる。クレアを救う以外にも俺には出来ることがあるのだと、少し実感したのだった。

「お久しぶりですアレクサさん」

俺が最初にやって来た被害者は、以前にも訪れたことのある貴族のおじ様だった。俺が挨拶すると、ピンと張った背中を綺麗に折ってお辞儀をしてくれる。

「ええ、お久しぶりですカズマ殿。今日はシンフォニア卿は御一緒じゃないのですね。」  
「ええ、クレアはちよつと忙しくて……」

クレアが誘拐されたことはあまり言いたくなかった。もし、クレアの誘拐を正直に言っておじ様から慰めの言葉でも貰ったら、俺が助けをもらう事になる。今日は俺が被害者を慰めに来たのだから、俺がお世話になる訳には行かない。そういう訳でおじ様の質問に言葉を濁した。

「今日は朗報があるんですよ。なんと誘拐犯が見つかったんです。犯人の日本人で貴族という特徴に当てはまる人がいて、現在その人の元に兵士達が向かっています。もうすぐ誘拐された娘さんも帰ってきますよ。」

まず、今日一番の情報を教える。きつとおじ様もいくらか安心してくれるだろう。

「ははっ、」

「？」

「ははははは、そうですね! 犯人が見つかりましたか! はははははっ!」

どういふ訳かおじ様は手を叩いて笑い出した。この反応はどこか不審だ。何がおかしくて笑っているのだろう。俺は怪訝な様子でおじ様を見つめると、彼もまた大きな黒い瞳で俺を見つめ返している。そう、黒い瞳で。

「……と、とにかく娘さんがもうすぐ帰ってくるはずですよ。だからそんなに気に病むことはしないでですよ。」

「これはこれは、お氣遣いありがとうございます。娘が帰ってくるなんて嬉しいですね。久しぶりに娘に会ったら私が今まで作ってきた服をプレゼントしてあげますよ」

部屋の片隅には女物のドレスが何着か置いてある。おじ様が娘の為に用意したものでしょう。

「この衣装も自分で作ったんですか? 凄い技術ですね」

「ええ、これでも貴族になる前は服飾関係の仕事をしていたのですよ。そのおかげで今でも大抵の衣服を作れます。」

元々服飾関係の仕事をしていて衣服も自分で作れる。そして貴族。俺はここまで来て心の中に大きな引っかけがあつた。確か誘拐犯も貴族だったはずだ。しかも誘拐した人に自分の好きな衣装を着せているそう。奇しくも目の前におじ様は犯人と共通点が多い。もしかして……。いや、そんなはずはない。犯人は他国にいるは



ずだ。既に兵士達もそこへ向かっている。

「おじ様の目、黒いんですね。」

相手が黒い目をしていることを改めて認識する。日本人の特徴である黒目と合致している。でも、おじ様は金髪。黒髪ではない。

……………だが、もし仮に髪を染めて金髪にしたのだとしたら？髪の色なんていくらでも変えられる。俺の中で次々と点が線となり繋がっていく。

「……………」

今の発言でおじ様も何か察したようだ。俺達はお互い黙って見つめ合う。もしかしてこの人が犯人なのではないかという言葉を飲み込んで。だが、何も証拠がない。

その時、何か物音が聞こえているのに気づく。ドンドンと壁を叩く音だろうか。誰かが暴れているのかもしれない。ドンドンと音が部屋に響く。

「何ですかこの音？」

「……………」

おじ様は最早黙りこくっている。ドンドンと音が聞こえる。待てよ、俺は確か大事なことをクレアに教えたような。ドンドン。この音は俺に何かを訴えかけているよな。

ずっと鳴り響く物音の中で俺は思い出した。先日、クレアにSOSのモール信号とし

て……ロー……というリズムを教えたはずだ。もしかして、この音はクレアが壁を叩いてモールス信号を伝えようとしている……?」

ドンドンドン、ドンドンドン、ドンドンドン  
ドンドンドン、ドンドンドン、ドンドンドン

この音はクレアが出しているに違いない。鳴り響く音の中、俺は立ち上がった。

「動くな!」

俺の武器はちゅんちゅん丸だけ。短刀を上に掲げ精一杯威圧する。おじ様は俺の様子を見ても落ち着き払ったままだった。

「そんな貧相な装備で大丈夫ですか?」

嘲笑しながらおじ様は立ち上がる。

「う、動くなと言っているだろ!」

礼儀正しい人だと思っていたのに、何人もの女性を誘拐した犯人だと知ると途端に恐怖を覚えた。嫌な汗が体に流れ、足は小刻みに震えるだけで動かない。おじ様は俺の制止を振り切り部屋から飛び出した。

「ま、待て!」

おじ様の後を追う。おじ様は疾走して冒険者の俺でも距離を大きく離されてしまった。それでも、角を曲がった時にチラリとみえる彼の姿を辿り、どうにか追いかける。

そして三つ目の角を曲がった時、おじ様の姿はそこにはなかった。廊下の奥に一つの扉があるだけで他には何も無い。この扉の向こうに逃げたのだろうか。

俺は扉をゆっくりと開ける。中は一本道の階段になっていて地下へと繋がっていた。薄暗い階段を一步ずつ降りていく。おどろおどろしい雰囲気だ。地上が恋しくなつて何度も後ろを振り返りながら進む。やがて階段は終わりそこには薄暗い部屋が広がっていた。だが、よく見ると部屋の奥にクレアが捕まっている。

「クレア!? 大丈夫か!？」

彼女はベッドの上で手枷足枷に繋がっており、ここに監禁されているようだ。

「…………カズマ殿? 来てくれたのか…………。」

「このバカ! なんて自分から犯人の元へ行くんだよ! 心配したろ!」

「うっ…………私はアイリス様の為を思って仕方なく…………」

「アイリスもお前が居なくなつてから落ち込んでいたぞ。とにかくお前がいないとみんなが困るんだよ。俺だって心配したんだからな。」

「…………なぜ私のことをそこまで心配してくれるのだ?」

「それは…………」

この際だ。思い切って彼女に俺の想いを打ち明けるべきだろうか。一言、彼女のことが好き。それだけ言えば良い。

「クレア、実は俺お前のことが——。」

ゴーン

俺が意を決して想いを伝えようとしたその時。除夜の鐘のような音が部屋に響いた。

「なんだよ!折角いい雰囲気だったのに!」

「いい雰囲気……?それより、カズマ殿。この音は犯人がやってくる時の音だぞ……!」  
クレアの言う通り、この音を合図に視界は奪われる。元々薄暗かった地下室が更に暗くなり近くにいたクレアも見えなくなった。

「クレア、俺のそばを離れるなよ……。犯人は俺が何とかする。」

俺はクレアを後ろにちゅんちゅん丸を構えた。彼女が鎖で繋がれている以上、ここは俺がどうにかするしかない。今度は俺がクレアを助ける番だ。

視覚が使えない以上、目を開けていてもしょうがない。俺は目を閉じ耳だけに全神経を集中させることにした。

「カズマ殿……」

不安そうなクレアの声。自分の心臓がバクバクと脈打つ音も聞こえる。俺は足がガクガクと震え立っているのもやつとだった。今すぐここから逃げ出してしまいたい。

カランコロン

何かが転がる音がした。

「そこかっ！」

俺は音がした方向に必死に剣を振る。だが、ヒュンヒュンと風を切る音が鳴るだけで何も当たらなかつた。でも、物音がしたということは犯人がすぐ近くまで来ているということだ。つまり、いつ犯人に襲われてもおかしくない。俺は立っていられずその場に尻もちをついてしまう。

「だ、大丈夫かカズマ殿？」

「だ、ダメだ……やっぱり俺には出来ない！俺はクレアみたいに剣の腕がないし、最弱職の冒険者だし……」

暗闇に俺は負けた。戦えない。自分に喝を入れようとするが真つ暗闇に阻まれ、震える体を抑えるだけだった。

「カズマ殿、落ち着いて聞いてくれ。」

ふわり、と清香が漂う。クレアが俺の事を背中から抱きしめたのだ。襲われるかもしれないと言うのにクレアの声はとても穏やかなものだった。

「後悔しないように言っておく。私はお前のことが好きだ。」

暗闇で彼女の顔は見えないが微笑んでいるのだろう。柔らかい声が俺の強ばった心を解きほぐしていく。

「別にお前にかどうかして欲しい訳じゃない。お前はアイリス様と結婚するのが良いだ

ろう。私も邪魔はしない。ただお前に気持ち伝えられれば私はそれで充分だ。」

彼女は俺に告白してくれた。だが、それは失恋すると悟った上での告白だった。彼女は俺がアイリスと結婚するものだと思っただろう。そもそもここに来た時点で俺に想いを伝える気はなかったのかもしれない。

「クレア……俺……」

「すまない、迷惑だったな。こんな時に私の想いを打ち明けられても困るだろう。」

彼女の声色が少し暗くなる。そんな事ない、俺もクレアが好きだ。そう言おうとした時、

カランコロンと何かが転がる音がする。犯人が物音を立てたのだ。犯人は本当に近くにいるのだろう。もう彼女と話している暇はない。俺は地面を蹴って立ち上がり、音のする方へと突進する。俺の足は全く震えていなかった。

『ドレインタッチ!』

「ぎゃああああ!!」

目が見えない中で触れた物にドレインタッチをお見舞いする。このスキルは際限なく使えば人を干からびさせる程の威力を持つスキルだ。犯人にとつても一溜りもないはず。暗闇の中、俺は犯人に馬乗りになりドレインタッチを使い続けた。

「クレア、伝え忘れていたけどな、俺もお前のことが好きだ!」

敵の断末魔の中、俺の想いもクレアに伝える。かつて誘拐犯の目の前で告白し合ったカップルはいただろうか。俺達が初めてかもしれない。

ドレインタッチを使って一分程経つただろうか。犯人の叫び声もすっかり小さくなり僅かなうめき声が聞こえるだけだ。

「死んでないよな……？一応手加減したつもりだけど」

余りに犯人が弱々しいので心配になる。俺がドレインタッチのスキルを解除しようとしたその時だった。ゴーンと鐘の鳴る音が聞こえる。今度は暗闇から解放される祝福の音だ。俺の視界は徐々に晴れていく。白目を剥いて泡を吹いているおじ様、横のベッドにはクレアの姿もあった。彼女も無事らしい。

「あなた達は誰？」

女の子の声。後ろを振り向くと少女が立っていた。こんな危ない所に女の子がいるなんて、どういう事だろうか。

「お嬢ちゃんは……？」

「私はハンニバル。七大悪魔の一人にして視覚を無効化するハンニバルよ。」

この子がバニルが言っていた悪魔か。見た目からは年端もいかない少女にしか見えない。

「き、貴様がハンニバルか！カズマ殿、気をつけろ！」

クレアが緊迫した様子で叫ぶ。彼女はこれでも恐ろしい悪魔らしいし、当然の反応だろうか。だが、女の子はやれやれ、という風に肩をすくめた。

「別に貴方達には興味ない。私は羞恥の悪感情が貰えればいいだけ。それも極上の羞恥をね。ねえ、そこに寝転がっているおじ様を拝借してもいいかしら。」

女の子は俺の隣で泡を吹いているおじ様を指差す。彼女に反抗したら何をされるかわかったものじゃないので俺は首肯した。

「これからこの人には裸一貫で街中を散歩してもらおうの。そしたらきつといい悪感情が湧き出るわ……。ああ、想像しただけでワクワクしてきちゃった……」

彼女は慣れた動作でおじ様の服を脱がしていく。一人の少女が男の人の身ぐるみを剥ぐのは中々シニールなものだった。

「羞恥の悪感情が貰えるお札に、この鍵をあげるわ」

少女が俺に渡してきたのは小さな鍵。恐らくクレアの手足の枷を外すものだろう。俺は勧められるがままにクレアの鎖を解いていく。

「大丈夫か、クレア？」

「ああ、もう大丈夫だ……」

幸いクレアはまだ犯人に手を出されてないようだ。俺が助けに来るのが間に合っ  
よかった。



「私はおじ様と散歩してくるわ。それじゃあね」

少女は自分よりふた周りも大きな男を担いで地上へと続く階段を上っていく。俺達に干渉せずただ悪感情を求めて行動するあたり本当に悪魔らしい。

「クレアは大丈夫か？怪我とかしてないか？」

「ああ、お前のおかげでこの通り無事だ。」

「そ、そうか……」

「……………」

クレアの顔を見るのが少し恥ずかしい。さっきクレアに熱い告白をしてしまったわけ。彼女も俺の事を好きと言ってくれたが両思いってことでいいのだろうか。

「……………か、カズマ殿！」

クレアが俺の事を呼ぶ。振り返ると彼女の顔は朱を散らしたように赤くなっていた。

「先程、私のことを好きと言ったのは……………その本当なのか……………」

クレアは目をあちこちに彷徨さまよわせ、挙動不審な様子だ。でも、そんな彼女の様子をどこか可愛らしいと思っっている自分に驚いた。

「ま、まあ一応……………本当……………です。」

緊張して何故か敬語になる俺。

「お前は他の女達とハーレムを作るつもりじゃなかったのか……………？どうせ私もそのハー

レムの一員に過ぎないのだろう」

クレアは目を下に向け沈んだ表情を見せる。自分が数多い女の一人に過ぎないのではと思っているのだろう。彼女をそんな顔にさせてしまった過去の自分をビンタしてやりたかった。俺は彼女の陰鬱を取り除くように言う。

「いや、もうハーレムは作らないことにしたんだ。めぐみんやアイリス、ダクネスとも結婚は断った」

俺の言葉にバツと顔を上げるクレア。口はパクパクと動いて声も出ていない。その顔には期待と不安が入り混じっていた。

「で、では本当に私の事が好き……なのか……?嘘ではないのか?」

「……お、おう。多分……好き……なんだと思う」

クレアと見つめ合う。クレアの顔は耳まで赤く染まり目は潤っている。俺の想いを伝えたがクレアはどう答えてくれるだろうか。

「カズマ殿、目をつぶってくれるか……?」

俺の気持ちだけを聞いてクレアは何も答えない。俺はそつと目をつぶった。

「す、すまんクレア。やっぱりハーレムを作るような男は嫌……」

俺が自分を卑下しようとした時、唇に何かが触れる。それは彼女のキスだった。目をつぶっていたが不思議と彼女の唇が触れたことはわかった。

「……これが私からの返事だ。さあ、アイリス様達も心配してるだろうから早く城に帰ろう。」

彼女は赤くなつた顔を隠すようにそつぽを向いて、歩き出す。キスをされて呆氣に取られた俺は呟いた。

「ハーレムは作れなかつたがこれで良かったかも……」

この誘拐事件を通して俺の考えが変わつた、そんな気がする。ハーレムは作れなかつたが、クレアという一人の女性を幸せにすることが出来た。それだけで俺は充分だった。

## 第2章 クレア編

この恋する乙女に戦いを!

(クレア視点)

誘拐事件が解決してから一年。私とカズマは恋人同士になった。

「カズマ、今日もいつものやつをしていいか?」

「あれか? まあ、クレアがどうしてもって言うならいいけど……」

時刻は夕方、カズマを私の部屋に招いている。この部屋には私とカズマの二人しかない。  
ない。

「なら遠慮なく……すうすうはあはあ」

私が今何をしているかと言うとカズマに抱きついて彼の匂いを堪能しているのだ。特に首元から彼のいい匂いがするのでそこに顔を埋めて<sup>うす</sup>いる。カズマと恋人になつてからずっとやっている事だ。

「なあクレア、これをするのは結構恥ずかしいんだけど……もう少し遠慮してくれないか？」

「嫌だ」

カズマと付き合つてから約一年。最初は色恋沙汰に興味がなかった私も月日が経つにつれて、すっかりカズマの虜になつてしまった。彼に対する呼び方もカズマ”殿”からカズマに変わっている。

「すう〜はあ〜」

私は再びカズマの匂いを肺いっぱい吸い込む。私の変態的な行動に彼は辟易しながら言葉を漏らした。

「クレアが積極的にスキンシップをしてくれるのは嬉しいんだけど。このままじゃ俺の理性が持たなくてな……」

「そんな事言いつつカズマは私の嫌がる事をしない人だろう? 私がこうしていられるのもお前を信頼しているからだ」

私は彼の事を力強く抱きしめる。人前ではこんなに「デレデレ」している所を見せないが、彼だけは特別だった。もう彼の事を離したくない。彼への愛はどこまでも深く、いつも携帯しているメモ帳に彼の好きな所を書き記す程だった。

「実は……さつきからクレアの胸が当たっているんだけど」

「!?!」

彼が顔を朱に染めそっぽを向いて言う。確かにカズマと密着しているので私の胸も彼に当たっているが、いざ言葉に出されると恥ずかしい。

「す、すまない。夢中になりすぎた……」

私は腕から力を抜き一旦彼から離れようとする。だが、カズマが一度離れた私の体を抱きしめ返してくれた。

「いや、クレアが俺と一緒に居たいならハグくらいするぞ」

カズマが私の体を抱き寄せる。真正面に彼の顔が近づく。互いの吐息が相手の鼻にかかる距離だ。その気になればキスだって出来る距離。私の鼓動がドクドクと早まるのを感じる。

「好きだぞカズマ……」

「ああ、俺も愛してるよクレア」

カズマが私に愛の言葉を囁いてくれる。彼の顔がキラキラと輝き眩しい。顔が赤く染まっていくのを感じる。私は本当に彼の事が好きなのだ実感してしまう。

「キス……してもいいか？」

彼から願ってもない申し出。勿論断る理由などない。私は返事をする代わりに彼の唇を塞いだ。そのまま彼を押し倒し床の上で彼に馬乗りする。もう誰も私達の愛を止められなかった。

「じゆる……はむ……ちゅぷ……」

矢継ぎ早に接吻の雨を降らせる。最初は啄むついはようなキス。それから徐々に一回のキスの時間が長くなっていき互いの唾液が混ざり合う。キスによってよりカズマと繋がる気がする。そして十回ほどキスをした所で私はゆつくりと唇を離れた。

「はぁ……はぁ……」

息を荒くして互いを見つめ合う。危なかった、これ以上続けていたらそのまま一線を越えていただろう。私はギリギリの所で理性を保つ。暫く見つめ合っていた私達だが、やがてカズマは私の顔から視線をズラし目を見張る。

「く、クレア、うしろ………はむっ!」



何か言いかけていたカズマだが、私は彼とのキスを続行した。彼は私の唇で口が塞がれていて喋れないようだ。今度は今までよりも一番長いキスをしよう。私は舌を差し込んで彼の唾液を欲する。カズマは唇を離そうと必死になっているが、私はジュールと彼の唇を吸い込んで離さない。私の中にあつた理性のブレーキはとつくに壊れている。そのまま私が一線を越えようとした時、

「ふはあっ……はあ……はあ……く、クレア……後ろ……！」

ようやくカズマが私のキスから逃れ、何やら切羽詰まった様子で言ってくる。彼に言われるがまま後ろを振り向いて驚愕した。

「あの……ふ、二人が仲睦まじいことは嬉しいのですが……あまり羽目を外しすぎないように……！」

そこに居たのはレインだった。ここは私の部屋。普通なら誰も入って来ない場所のはずなのに。

「れ、レイン! ノックくらいしろ!」

「何回もしましたよ! クレア殿がカズマ殿とえ……え、エッチな事するのに夢中で気が付かなかつたんでしよう!」

彼女に怒ってみるがどうやら私に非があるみたいだ。私はすぐにカズマから離れて身だしなみを整える。よりによって一番親密にしているレイン殿に見られるなんて……!

「二人はいつの間になんな関係になったのですか? もしかして誘拐事件の後から?」

レインの鋭い指摘に黙る私達。私とカズマが付き合った事はレイン殿も含めて誰にも言っていない。この一年間ずっと隠してきたのだ。だから彼女が驚くのも当然だろう。

「あの凛々しいクレア殿がカズマ殿の前ではあんな風になるなんて……」

「や、やめろ! さつき見た事は忘れるんだ! ……いいか、この事は絶対誰にも言うんじや

ないぞ」

私はレイン殿に念を押しして口止めする。彼女に私の醜態を晒したのは痛い。どうかレイン殿がこの事を口外しないのを祈るばかりだ。

「なあクレア、俺達の関係を他の人に教えてもいいんじゃないか？別に隠すような事でもないだろ」

カズマは何気なく言ったただけだろうが、彼の言葉に私は心がズシンと重くなるのを感じた。私がカズマとの関係を隠してのには大きな理由がある。

「……それは出来ない。私達の関係が周囲に知られたら、特にアイリス様を知ってしまったらきつと悲しむ」

今から一年前、アイリス様はカズマと結婚していた。結婚してる期間は約一週間と非常に短かったそうだ。だが、アイリス様がカズマに恋心を抱いていたのは間違いない。もし私が彼と付き合っていることを知ったら、自分がカズマの妻に選ばれなかった事に

心を痛めてしまう可能性もある。

「考えすぎじゃないか？アイリスももう十五歳。俺への恋心も無くなっていそうだが」  
「いえ、アイリス様は今でもカズマ殿の事を慕っていますよ。カズマ殿はアイリス様と手紙でやり取りしてますよね。その……実は一週間前にアイリス様が『お兄様への恋心を手紙で伝えたい』と仰った事がありました……。恐らくカズマ殿に告白するつもりだったと思います」

レイン殿から、私すら知らないアイリス様の情報を聞く。彼女の話が本当ならアイリス様は今でもカズマの事が好きという事だ。

「え？……そんなラブレターを貰った記憶はないけど。最近来た手紙には”ぜひ王城に遊びに来て欲しい”みたいな事しか書いてなかったぞ」

「私が『そういう大事な事は手紙ではなく直接伝えた方がいい』と言ったのです。多分アイリス様はそこでカズマ殿に告白するつもりなのでしょう」

アイリス様がカズマと恋人になろうとしている。その事実には私の心は酷く揺れている。

た。私はアイリス様に忠誠を誓った護衛。主君を裏切る事は許されない。もし私がこのままカズマとの関係が続けるなら、それはアイリス様を裏決る事になってしまう。

「……カズマはアイリス様に告白されたらどうするつもりだ？」

アイリス様の告白を断って欲しい気持ち半分、告白を受け入れて欲しい気持ち半分という感じだった。私はカズマの事が大好きだが、それ以上にアイリス様の事も好きだ。彼女が泣くような結末にだけはなつて欲しくない。

「……、俺にはクレアがいるからアイリスと付き合うのは無理だ。アイリスの気持ちは嬉しいが、そこだけは譲れない」

彼の言葉を聞いて喜びで体が震える。アイリス様じゃなくて私を選んでくれる。カズマが私だけのものになった気がして自然と口角が緩んだ。

そこで私はズボンのポケットにしまつてあつたメモ帳を取り出す。このメモ帳は何かと言うとカズマのカッコイイセリフを書き連ねている備忘録だ。私は早速『俺にはクレアがいるからアイリスと付き合うのは無理だ』という言葉を書きメモする。これで好きな

時に今日の出来事を思い出せる。

「では、アイリス様にはカズマ殿に告白するのを止めるようにそれとなく伝えておきます。きつと悲しまれるでしょうから……」

「……ああ、悪いなレイン」

悲しそうな表情のレインとカズマを見て私はハツとした。彼女達はアイリス様の失恋を悲しんでいるのに、なぜ私だけ舞い上がっているのだ。彼のセリフをメモなんかして。性格の悪い自分をひどく嫌悪してしまう。

「クレア、酷い顔でメモ帳と睨めっこして大丈夫か？」

私の苦々しい顔に気づいたのか彼が心配そうに尋ねてくる。

「……ああ、気にするな。それよりカズマ殿はもう帰った方がいいだろう。王城にいればいつアイリス様に出くわしてもおかしくない」

私がカズマを帰らせようとしたその時だった。  
コンコン、と控えめなノックの音がする。

「クレア、いますか？」

可愛らしい声の主はアイリス様だ。今、彼女をカズマに会わせるのはマズイ。二人が出会えばアイリス様が振られてしまう。彼女が悲しむのは何としてでも避けねばならなかった。

「お、俺は隠れた方がいいのか!？」

「カズマ殿はクローゼットの中に隠れてください!」

「ま、待て、そこには……」

カズマはレイン殿に言われた通りに急いでクローゼットの中に隠れようとする。だが、彼がクローゼットを開けるとそこには大量のパンツとブラ。無論全て私の物だ。彼が慌てていた為、止めるのに間に合わなかった。

「うおっ！下着お宝がこんなに！」

「私の下着をお宝呼ばわりするな！とにかくクローゼットの中はダメだ。他に隠れる場所を……」

「クレアー？入りますよ〜？」

今にもアイリス様が部屋の中に入ろうとしている。もう時間がない。クローゼットの中もダメだしこの部屋には他に隠れる所がない。だが、私は咄嗟に隠れる場所を見つけ出した。

「カズマ、ここに入れ！」

カズマが私の指示する場所に隠れた丁度その時、部屋のドアが開かれた。アイリス様がひよっこりと顔を出す。

「あら、レインもいたのですか。二人ともお兄様を見かけませんでしたか？」

早速カズマの居場所を聞かれる。彼がいるのはベッドの下。そこで横になって身を



潜めている。余程のことがない限り見つかることはないだろう。

「い、いえ、見ていませんよ。」

レインが平静を装って答える。

「そうですか……、城の門番の方がお兄様が入っていくのを目にしたと言っていたので、今日はお兄様に大事な話があったのでどうしても会いたかったのですが……」

” お兄様に大事な話。レイン殿の話から察するに告白の事だろうか。やはり今日カズマに想いを伝えるつもりらしい。だが、彼女の為にも私は何としても告白を阻止せねばならない。

「アイリス様、その大事な話というのはもしかして……」

「クレアには言ってなかったですね。実は……私はお兄様にプロポーズするつもりなのです」

告白じゃなくてプロポーズだった。それはもうカズマと結婚したいという事だ。恋人として付き合う段階をすつ飛ばしてもう籍を入れたらしい。

「あの……アイリス様、カズマ殿と結婚するのは止めた方がいいのではないのでしょうか。彼はだらしなすぎですし、気が多い人でもあります。アイリス様にはもっとふさわしい方がいるかと」

レイン殿がカズマを貶<sup>けな</sup>してアイリス様を引き止めようとする。私は自分の恋人をバカにされたことにムカムカと腹が立っていた。彼はそんな人じゃないと声を大にして否定したい。

「それでも私はお兄様がいいのです。いつも素敵な冒険譚を聞かせてくれるお兄様は私の憧れの人です。誰に何と言われようと私の気持ちは変わりません」

アイリス様の意志は多少レインが止めた所で揺らがない。彼女のカズマへの恋心は確かなものらしい。ここは私も頑張つて説得しなくてはならない。

「アイリス様、あの男はアイリス様には釣り合う様な人ではありません。まあ……いざという時はやる男ですし、本当に辛い時は傍で寄り添ってくれる人ですが……。それと笑った時の顔が本当にカッコイイ。たったそれだけの男です」

カズマの悪い所を沢山並立てる。これでアイリス様も少しは躊躇するはず……？ 私の言葉を聞いたアイリス様は首を傾げて不思議そうに見つめていた。何かおかしいことを言っただろうか。

「く、クレア殿！それは惚気けているだけです！」

レイン殿の指摘で私は我に返る。つい本音を言ってしまった。しかもアイリス様の前で。彼女には何としても私とカズマの関係性を隠さなくてはならないのに

「……クレア、もしかしてお兄様の事が……」

「わあああ！ち、違いますっ！」

何か言おうとしたアイリス様の口を慌てて塞ぐ。彼女に『お兄様の事が好きなのです

か?』等と聞かれたら、顔を赤くして俯く事しか出来ないだろう。と、私がアイリス様の口に触れた拍子に彼女の指輪が落ちてしまった。

「あ、お兄様の指輪が……!」

あれは確か昔カズマがアイリス様にプレゼントしたりしたリング。たった数百円の安物だが、アイリス様はいつも大切にその指輪を使っていた。指輪はコロコロと床を転がっていきベッドの下へと入った。

「えーと指輪は……確かこの辺りに……」

アイリス様がベッドの下を覗き込もうとする。このままだとベッドの下にカズマがいるのがバレてしまう。私はカズマを隠すため、屈むアイリス様の前にスライディングした。

「ああ、アイリス様!指輪は私が拾いますのでどうかそのままです!」

私の奇行に彼女は軽く引いた顔をする。その顔を見て私は泣きそうになった。アイリス様にだけは嫌われたくなかったのに。私は彼女に背を向けてベッドの下の指輪を探す。

ベッドの下を覗き込むと案の定指輪が転がっていた。視線を奥にやるとカズマがこちらを向いて寝転がっている。彼は私の顔を見てヒラヒラと手を振った。私もこっそり彼に手を振り返そうとする。が、直前で思いとどまった。アイリス様の事を思い出したからだ。カズマとイチヤイチャすればするほどアイリス様の恋心を踏みにじることになる。

「クレア、何か落としましたよ？」

私が立ち上がろうとするとアイリス様がメモ帳を拾う。それは私がカズマのカッコイイセリフを書き連ねていたノートだ。さつきスライディングした時にポケットから落ちてしまったのだらう。私は慌ててそれを取り返そうとするが一足遅かった。

「これは……？」

アイリス様がメモ帳の中身を見てしまう。そこには大量のカズマの言葉。私しか知らない彼の一面が惜しげも無く書かれている。

「あ、アイリス様……!」

アイリス様は食い入るようにメモ帳を凝視する。彼女があまりに熱心に読むので私はメモ帳を取り返す機会を失ってしまった。

「クレア、これは何ですか?」

どう答えようか。アイリス様はそのメモ帳がカズマの言葉を書いている事には気づいているのだろうか。もし気づいていないなら、嘘を言えば上手く誤魔化せるかもしれない。私は一縷<sup>いちろ</sup>の望みに賭けて慎重に言葉を選ぶ。

「……それは私に恋人が出来た時に言つて欲しいセリフのようなものです。人に見られるのは恥ずかしいので、早めに返して欲しいのですが……」

小さな嘘でこの場をしのご。さりげなくノートを返すように言っただけ。アイリス様からメモ帳を受け取ろうとするが、彼女はヒョイと私の手をかわした。

「アイリス様……?」

「ここに書いている『めぐみんやダクネスが毎晩色仕掛けしてくるがクレアの事を思い出してどうにか我慢してるよ』という言葉。これもクレアが考えたセリフですか?」

そのセリフはかつてカズマが私に言ってくれた言葉だ。アイリス様はまだノートを返す気は無いらしい。それどころかセリフの不審な点を私に尋ねてくる。もうこのノートが何なのかバレてしまいそうだ。私の顔も緊張で引きつっているだろう。

「……え、ええ、私が考えたものですよ」

「ふーん……」

私の苦しい言い訳にアイリス様は腑に落ちていない様子だ。そのまま彼女はメモ帳を読み進めていく。まずい、そのメモ帳の一番新しいページには先程の『俺にはクレアがいるからアイリスと付き合うのは無理だ』という言葉が書いてある。あの言葉を見て

しまったら、私とカズマが恋人であることが露見してしまう。

「アイリス様、その備忘録をクレア殿に返してあげてください」

私が何も行動できない中、レイン殿がアイリス様から無理やりメモ帳を奪う。

「ま、待つてください！そのノートは怪しいのです！有り得ないことなのですが……本当に有り得ないことなのですが、私の中で疑念がどんどん大きくなって……」

「その疑念とは、クレア殿とカズマ殿が恋人同士になっているかもしれない、という事ですか？」

私やアイリス様が一番曖昧にしたかった部分。そこをレイン殿はハッキリと言葉にしてしまった。私は顔を俯かせる。アイリス様の顔を見るのが怖かったからだ。

「ハッキリ言います。クレア殿とカズマ殿は交際関係にあります。ですからアイリス様、カズマ殿にプロポーズするのは諦めてください」



なんて冷淡な事を言うのだろう。レイン殿にそんな事を言うな、と怒鳴ってやりたい。だが、私にはその資格がなかった。こうなってしまった最大の原因は私自身にあるのだから。

「……クレア、今の話は本当なのですか？」

「……………」

鼓動が早くなる。呼吸も荒い。目眩もしてきた。私が動揺しているのはアイリス様を傷つけてしまったからではない。ただアイリス様に嫌われるのが怖かった。そんな自己中心的な理由だった。

「……嘘なんですよね？嘘と言ってください！」

「アイリス様、お辛い気持ちはお察ししますが、クレア殿に非はありません」

それからアイリス様の足元にポタツ、と何かが落ちる。それが彼女の涙であることはすぐに分かった。私は相変わらずアイリス様の顔を見れずに下を向いたままだった。

「少し一人にさせてください……!」

バタン、と扉を開けてアイリス様が部屋から出ていく。

「レイン……!なぜアイリス様にあんな事を……!」

「遅かれ早かれアイリス様は振られます。それなら早めに失恋した方がいいでしょう?」

冷淡なレイン殿の仕打ちに怒りたいが、彼女の言い分も正しい。やるせない気持ちだけが残る。隣ではカズマがベッドの下からのそのそと起きてくる。

「あの……俺ももう帰るよ、ここに居たらいつアイリスに出くわすか分からないし」

彼はもう帰ろうとしている。修羅場に巻き込まれなくなかったのだろう。部屋から出る際にカズマは私に手を振る。私は手を振り返すこともせず先程の出来事を反芻していた。部屋には私とレイン殿の二人だけになる。

「アイリス様を傷つけてしまったな……」

「彼女を傷つけたのは私です。クレア殿は何も悪くありませんよ」

彼女の慰めもあまり効果がない。

「こうなったのは私がカズマと恋人になったのが原因だ……。主君を裏切るなんて護衛失格だな……」

「そんな事ありません！誰が誰を好きになるかなんて本人の自由です」

それでも尚私の心は晴れない。

「……もういつその事カズマ殿にプロポーズしてみたらどうですか？」

レイン殿の言葉に私は顔を上げる。彼女が言ってる事が本気なのか顔色を窺う。レイン殿も真つ直ぐこちらを見ていた。どうやら冗談ではないらしい。

「何をバカな事を言っているのだ……。私達はまだ付き合って一年なのぞぞ」

「むしろもう一年ですよ? 丁度いい時期でしょう。それにクレア殿も大貴族の一人娘としてそろそろ結婚しなくてはならないのでは?」

彼女の指摘は的を得ていた。最近親からもそろそろお見合いをしないか、としつこく誘われている。私にはカズマがいるから、と断っていたが子供を作るためにも早く結婚しなくてはならない。

「……いや、まだ早すぎるだろう。こういう事はもう少し二人で愛を育んでから……」  
「それは、アイリス様を気遣っている」だけではないですか?」

レイン殿の言葉に私は声を詰まらせる。彼女の急所をついた発言に私は睨み返してしまつた。だが、レイン殿は私に構わずズケズケとものを言う。

「……なんだと?」

「私の勘違いでしたら別に良いです。本当にカズマ殿と仲を深めてから結婚したいなら否定しません。しかし、今のクレア殿はただアイリス様に遠慮しているだけに見えます。本当はカズマ殿と結婚する事がアイリス様を裏切ることになると、自分でも分かっ

ているのでしょうか？」

「違う！私がカズマと結婚しないのは……と、とにかくアイリス様とは関係ない！変な憶測で話すな」

私は怒気を孕んだ声でレイン殿を威圧する。私が怒ってしまったのは彼女の言っている事が全て凶星だったから。そんな事は全て分かっている。でも、言葉にして欲しくなかった。自分の中で見て見ぬふりをしたかった。

「いいですか、恋は戦いです。遠慮などしている暇はありません。考えてもみて下さい。もしアイリス様がカズマ殿にプロポーズしたら……、カズマ殿が必ず断ると言い切れますか？」

カズマは元々ハーレムを作ろうとしていた。だからアイリス様の求婚を承諾する可能性だつてある。私だつて彼が他の女に取られるのが怖いのだ。

「カズマ”殿”はそんな事しない」

最早私の言葉はただの願望でしかなかった。視界も少し涙で滲んでいる。もうこれ以上私に正論を並べ立てて欲しくない。

「すいません、言い過ぎました。でも、クレア殿にはこのまま何もしないでいると後悔する事を知って欲しかったのです」

「……では、私にどうしろと言うのだ」

とうとう私は自分の本音を偽る事もやめてしまった。

「アイリス様がカズマ殿に求婚するより先に、プロポーズしてください。それが今のクレア殿に必要な事だと思います」

カズマにプロポーズするなんて無理だ。私にとってカズマと同じくらいアイリス様も好きなのだ。

「少し考える時間をくれ……」

「ええ、よくよく悩んでください。でも、クレア殿が明確な答えを出さなければ出さない

程、アイリス様を傷つけることになりますからね」

私にはレイン殿の言ってる意味が分からなかった。ただ一つ分かるのはもう何もしないで見ている訳にはいかないことだ。カズマかアイリス様を選ばないといけない。その重荷が私の心はずっしりと押し掛かった。

## この王女様と友情を！

私はアイリス様を裏切れない。彼女を裏切る事は私にとって死と同義だ。

アイリス様と一悶着あった翌日。今日は彼女の部屋で家庭教師としての仕事がある。だが、私は中々アイリス様の部屋のドアを開けられないでいた。

「昨日、あんな事があったからアイリス様に嫌われていないだろうか……」

「昨晚、私とカズマが交際関係にある事を言ってしまった。そのせいでアイリス様は失恋したのだ。昨日の出来事を気にするなという方が無理だろう。」

「よし……今日の家庭教師の仕事はお休みにしよう」

私はドアに背を向け、その場を後にしようとする。だが、私が帰ろうとした瞬間アイ



リス様の部屋のドアが開けられた。

「……あら、クレア、そこに居たのですか。ずっと来ないので今日の授業はおしまいかと思われましたよ。……どうしたのですか、そんなに驚いた顔をして」

急にドアが開けられたことにびつくりして口をパクパクと動かす。アイリス様は私を見るとドアを大きく開けて私を招き入れた。先程まで帰ろうとしていた私も為す術なく中に入る。

「今日は何の授業をするのですか？」

アイリス様は平然と今日の授業についての話をする。その姿はとても昨日カズマを私に取られて泣いていた人とは思えない。私も彼女の態度に合わせるようにいつもの態度で接することにした。

「今日は礼儀作法について教えます。……ですが、アイリス様が嫌なら今日の授業はお休みにしてもいいですよ？」

私は探りを入れてみる。昨日の事をまだ引きずっているならアイリス様は何かしら反応するはずだ。だが、私の予想とは裏腹に彼女はあっけらかんとした顔で小首を傾げる。

「……?別に嫌じゃありませんよ?」

「そ、そうですね……、では授業を始めますね」

彼女の反応からおかしな所は見当たらない。やはり昨日の事はアイリス様の中で何も無かったことになっているのだろうか。彼女も王女として自分の気持ちに折り合いをつけているのかもしれない。

それから私は約三十分ほど、アイリス様に礼儀作法を教えていた。作法を教える傍ら無理をしていないか何度か尋ねてみるが、いつもと違う所は見られない。それどころか何故そんな事を聞いてくるのか質問されるだけだった。

「——このように、作法と言えどその種類は多種多様で、相手によって使い分けなければならぬのです」

一通り授業が終わり、話も一段落つく。アイリス様は一生懸命今まで教えた作法を繰り返し、忘れないように頑張っていた。やはり私の杞憂だったようだ。アイリス様も15歳と言えどたくましい少女、失恋を一度したくらい大丈夫だろう。

「ここままで何か分からない事はありますか？」

礼儀作法についてアイリス様に尋ねる。彼女は少し考える素振りを見せたあと、口を開いた。

「……では、一つだけ聞いてもいいですか？」

「はい、なんなりと」

「クレアはお兄様と結婚するつもりなのですか？」

それはあまりにも唐突で、突拍子もない質問だった。先程まで教えていた授業とはまるで関係ない、カズマのこと。つきりカズマの事はもう忘れていたのかと思ったが、そんな事はなかったようだ。

「……アイリス様、今は授業の時間です。そう言った話はまた別の機会に」

彼女の前でカズマの話は禁物だろう。だから私は少しでも話を逸らそうとする。だが、アイリス様はしつこく食い下がってきた。

「いえ、これは大事な事なのです。クレアが答えてくれないなら私はもう授業を受けません」

アイリス様は半ば強引に話を押し通す。今までならこんなわがままを言うことは無かったのに。彼女が変わってしまったのはカズマの悪影響だろうか。彼女が頑として譲らないので私は仕方なく答えることにした。

「……け、結婚なんてまだ早いですよ。私達はまだ付き合って一年しか経っていないのに。……で、でも結婚ですか……。結婚……！悪くない響きですね……！」

カズマとの結婚生活を想像したら顔が熱くなってしまった。将来的には私達にも子

供が出来るのだろうか。結婚式ではみんなに祝福されながらウエディングドレスを着たりして……！想像しただけで顔がニヤけてしまう。

「本当にお兄様の事が好きなのですね……」

お花畑だった私の頭はアイリス様の言葉で一氣に現実に戻された。不味い、アイリス様の前だ。彼女にこの話はタブーなのに。

「も、申し訳ありませんアイリス様！見苦しい所を見せてしまいました……」  
「別にいいですよ、クレアがお兄様と何をしようが私は文句を言えません」

アイリス様は顔を俯かせて口を一文字に結んでいる。彼女が強がりを言っているのは私にも分かった。アイリス様を悲しませてしまった。私は護衛失格だ。彼女を慰めてやりたいが、慰めれば慰めるほどアイリス様を傷つけてしまいそうで。私はただアイリス様を見守るしかなかった。

「……でも、それでも私はお兄さまのことが諦めきれません……！」

彼女は強く決心したのか震える顔で私を見詰める。じんわりと目に涙が浮かんでおり、簡単に傷つけてしまいたいそうさ。彼女を応援してやりたい。本当なら私が彼女の一番の味方になるはずだったのに。やはり私は黙ったまま彼女を見守っていた。

「……一度お兄様に、私とクレアのどちらを選ぶか聞いてもいいですか？」

アイリス様が苦しそうな声で私に聞く。あくまでカズマに決めてもらいたいようだ。私に許可を取るのも彼女なりの気遣いなのだろう。

「……ええ、良いですよ」

本当はそんな事を聞いて欲しくない。万が一、カズマがアイリス様を選ぶのではと思うと胸がキツく締まる感覚に陥る。それでも私は本音を言えなかった。アイリス様に正直に言えたらこんな苦しい思いはしていない。

「今日の授業はここまでにしましょうか」

「え？でも、まだ授業の時間は余ってますよ」

「今日は特別です。アイリス様もリフレッシュしたいでしょう」

辛い時にまで授業を受けさせる程私は鬼ではない。アイリス様も肩の荷がおりたのか柔和な笑みを浮かべた。

「あの……もし良ければクレアと一緒に街に遊びに行きたいです。」

「なっ!？」

アイリス様が私を遊びに誘う。彼女の上目遣いに翻弄されるが、私はぐっと堪えた。

「誘拐事件の後、国王様がアイリス様を外に出さないように厳命されてますから難しいかと……、お気持ちは嬉しいのですが」

アイリス様が誘拐されてから国王様は益々過保護になっている。もしまたアイリス様が誘拐されたら今度こそ私の首が飛ぶだろう。彼女の誘いは断るしかない。

「……ダメですか?」

アイリス様の目がうるうるとしている。私が何を返すかは、既に決まりきっていた。膝をたたみ視線をアイリス様に合わせて——そして、私は言う。正直な想いを、端的に。

「ダメな訳ありません」と。

アイリス様は私の返事を聞くとパアツと顔を輝かせたのだった。

+

それから私は王様の部屋に謁見しに行く。アイリス様を外に出すのにも許可があるので。彼女の願いを叶える為にも、私は上手く王様を説得しなくてはならない。

私はドアを開け、王様の部屋へと入った。

「失礼致します」



国王様は椅子に座りデスクに山のように積まれている書類に目を通していた。私の事をチラリと見たあと、再び紙に目を落とす。忙しそうだ。この状況でアイリス様の外出の許可を取るのは至難の業だろう。

「お忙しい中恐れ入りますが、アイリス様の外出の許可を頂けないでしょうか？」

私の発言に王様は暫く固まる。そしてゆっくりと視線を私に向けた。彼はジロジロと私を見てくる。内心怯えるが顔には出さないように気をつけた。

「……ダメだ、もし娘がまた誘拐されたらどうするのだ」

断られてしまった。取り付く島もない。ここからどうにか挽回できるだろうか。

「もうアイリス様を外出させるのを禁止してから一年ですよ？アイリス様も中々外に出れなくて退屈していますよ。たまには気分転換をさせて貰えないでしょうか」

「……ほう、あくまで娘の為だと言うのかね？娘の為を思うなら君に出来ることが一つあるだろう。まずはそれをやってみたらどうだ？」

王様が何を言いたいのかわからない。どこか雲行きの怪しい話に私は不安になってくる。

「……何の話でしょう」

「アイリスから聞いたよ。君はカズマくと付き合っているそうじゃないか。だが、娘はカズマくんに恋心を抱いている。この事についてどう思う?」

王様の言わんとしている事が分かってきた。つまり、カズマをアイリス様に譲れという事だろう。

「私はアイリス様に仕える兵士です。主君を裏切るような真似はできません」

これは私の本心だった。何があってもアイリス様を裏切ることは許されない。私の言葉に王様は暫く考える素振りを見せた後口を開く。

「……つまり、カズマくんと之交際はもう諦めるということか?」

「も、もちろん——」

”もちろん諦めます”と言おうとしたが、口が動かなかつた。今になってカズマとの思い出が脳裏に蘇ってくる。そう、私はもうカズマに恋をしてしまっている。恋を前にしては何もかもが無力なのだ。

「どうした？ハッキリ言いなさい！」

私が隙を見せたので王様が追及してくる。私は何も答えることが出来なかつた。カズマを選んでアイリス様を見捨てる事も、アイリス様を選んでカズマを諦める事も、どちらも嫌で仕方がない。

王様は椅子から立ち上がり、だんまりを決め込んだ私の元へと近寄ってくる。彼の筋骨隆々な体が左右に揺れている。彼からすれば私など一捻りだろう。気がつけば私の足が震えている。私はギュツと目をつぶった。と、その時

「クレアー、いますか〜？」

間延びした呑気そうな声。声の主はアイリス様だ。私達が返事する間もなく部屋の扉が開かれる。

「クレア、いるなら返事してくださいよ」

とたとたとアイリス様が私の元に近寄ってくる。先程まで怯えていた私も彼女を見てしまえば、不思議と落ち着いてしまった。むしろ愛おしい気持ちが込み上げて、温かい気分になる。

「あ、アイリス！今、お父さん達は大事な話をしてるんだ。遊びに来たなら後で……」  
「今からクレアと街へ遊びに行くのです！良いでしょうお父様」

「し、しかしだな……」

私を威圧していた王様もアイリス様を前にしてペースを乱されている。彼女は存在するだけで場を和やかにしてくれるのだ。私は心の中でアイリス様に深く感謝する。

「もう一年近く城から出ていないのです。このままだと私はおかしくなってしまう

よ」

「う、うむ……確かにそうだな」

「じゃあ決まりですね！クレア、一緒に行きましょう！」

アイリス様は矢継ぎ早に言葉を並べ立て話を進めていく。いつの間にか私と一緒に遊びに行くことになっており、王様もアイリス様を止める機会を失ったようだ。

「それではお父様、また後で！」

私はアイリス様に手を引かれて部屋から出て行く。王様は私の姿をじっと見つめている。その目は私に決してアイリス様を裏切るなど訴えかけていた。

+

私とアイリス様はとある料理店へ来ていた。今は彼女の大好物であるチャーハンというものを食べている。

「あ、アイリス様……この食べ物の中々美味しいですね……!」  
「そうでしょうクレア、ぜひ王城でも食べたいのです」

チャーハンは初めて食べたが、焼豚や刻みネギ、醤油などあらゆる食材がハーモニーを奏でている。私はこのチャーハンに心酔してしまった。

「こんな美味しい物をアイリス様が知っていたなんて……! 一体どこで食べたのですか?」

「これはお兄様が教えてくださったのです」

自然な流れで聞いたつもりだったが、カズマの名前が出てしまった。折角の気分転換なのだからその話はしないように努めていたのに。私が苦々しい顔になっていると、

「クレア」

アイリス様は一度ご飯を食べる手を止め、スプーンをテーブルの上に置く。彼女が真面目な話をするように見えたので私も食べるのを中断した。

「いいですか、私に気を遣う必要などありません。クレアが私の前でお兄様の話をしないように気をつけているのは分かっています。ハッキリ言ってそんな態度を取られるのは不愉快です」

アイリス様は私の考えなど全てお見通しだったようだ。むしろ遠慮したせいで彼女を傷つけてしまった。私は自分の浅はかな行動を反省する。

「今まで通り普通に接してくれば良いのです。たとえ私とクレアのどちらがお兄様に振られようと私達の関係は変わりません。そうでしょう?」

アイリス様は何があっても私達の関係は変わらないと言うが、私にはそうは思えなかった。もし私じゃなくてアイリス様がカズマの婚約者選ばれたら……。私はアイリス様に醜い嫉妬を抱くだろう。きっと彼女が憎くてしようがなくなると思う。

「クレア……?」

アイリス様が不安そうな顔で私の事を覗き込んでいる。その顔で私は我に返った。今、私は一体何を考えていただろう。主君を侮辱するような考えだったのではないか。私は歯を食いしばって自分の中に巻き上がる負の感情に蓋をする。

「先程もお父様に何か言われたのではないですか？正直に答えてください」

国王様にはカズマをアイリス様に譲るように言われている。果たしてこの事を彼女に言ってもいいのだろうか。アイリス様は遠慮しないでいいと言っているが、私は嘘をついた。

「……いえ、何も言われておりません」

アイリス様は何でもお見通しだ。だから私が今嘘をついてる事も多分分かっていて思う。それでも、私は本音を言う訳にはいかなかった。もしこれ以上自分の気持ちを認めてしまったら歯止めが効かなくなるから。

「……クレア、私が最も恐れている事はお兄様に振られることではありません。クレア



との関係が壊れてしまう事が嫌なのです……！」

アイリス様はカズマに振られるから悲しんでいるのだと思っていた。でも、違ったらしい。恋によって私達の関係が崩壊するのが耐えられない。それは奇しくも私と同じ気持ちだった。

「私だって本当は分かっています……！このままだとお兄様はクレアの事を選んでしまう。私はもう振られるのだと……！」

「アイリス様、もうお止めになってください」

「それでも私は自分の気持ちを抑えられないのです……！お兄様がクレアに取られるのが嫌で嫌でしょうがない……！恋のせいで大切な友達を失いたくありません……！私はどうすれば……どうすればいいのですか……！」

アイリス様は泣き出してしまった。どうやら彼女はずっと無理をしていたらしい。カズマと私のどちらを選ぶかずっと迷っていたのだろう。

「アイリス様」

私は泣きじやくる彼女を正面から抱きしめた。私の想いも彼女の想いも同じだ。恋心のせいで友達を失うのが怖い。ただそれだけの事に心をかき乱されている。

「もう大丈夫です。アイリス様は報われなければなりません。カズマ”殿”はアイリス様に差し上げます」

アイリス様の泣き顔をもう見たくなかった。私は主君の護衛として常に彼女の味方でなければならぬ。

「ひぐつ……そんな……!それではクレアが……ぐずつ……我慢することになるじゃ……ありませんか」

「大丈夫です、私はアイリス様さえ幸せならそれでもう充分なのです。これ以上の幸せは求めません」

もう彼女を悲しませたくない。王女として様々な事に耐えているアイリス様にこれ以上我慢しろとはとても言えない。私は慈愛を込めて優しく彼女の頭を撫でた。

「ひぐつ……すみません……情けない所ばかり見せて……。私は王女失格です……」

アイリス様を抱きしめたのは効果てきめんだったのか、次第に彼女の泣き声は治まってきた。レストランにいる周囲の人も私達の動行を見守っている。

「明日、カズマ”殿”に想いを伝えましょう。私もお手伝いします」

「ま、待つてください！クレアはお兄様の事が好きなので……！」

そう、私だってカズマの事が好きだ、大好きだ。この気持ちならアイリス様にも負けない自信がある。

「いえ、もうカズマ”殿”はどうでもいいです。アイリス様が一番ですから」

私は自分に嘘をつく。

「本当に宜しいのですか？私に遠慮なんてしたらダメですよ」

一度決心したのにアイリス様は何度も尋ねてくる。そのせいで私の心は大きく揺れていた。今ならさっきの発言を取り消せる。早く訂正しろと警鐘を鳴らしている。

「ええ、これは本心です。アイリス様が幸せなら他には何もいりません」

私はまた自分に嘘をついた。

この哀れな少女に救済を！

カズマをアイリス様に譲る。それは私の宝物を奪われるということだ。

アイリス様を裏切れないと悟った翌日の夜。私は自室でアイリス様と話していた。

「今日カズマ”殿”が城に来る手筈になっています。私がそこで彼に別れ話を切り出します。アイリス様は部屋の外で待機して、振られたばかりのカズマ殿を慰めてあげてください」

私がカズマ殿を振って、アイリス様が慰める。カズマ殿の傷心を癒すことでアイリス様が天使のように感じられるだろう。そうすれば二人の仲が進展するかもしれない。

「クレア……本当に良いのですか？お兄様と別れたいというのは本心なのですか？」

アイリス様が心配そうに聞いてくる。実際、カズマと別れるのは辛い事だ。昨晚も彼と別れる事を想像して枕を濡らした。本当に彼との日々は楽しくてどれもかけがえのない思い出。だから、それを手放すのは辛い。でも……

「ええ、私の事は気にしないでください。今はもうカズマ殿に未練はありませんから」

私は嘘に嘘を重ねる。これも全てアイリス様のため。昔、アイリス様の護衛として任命された時から私の運命は決まっていたのだ。主君に全てを捧げると。実際、彼女に何度も嘘をついたせいで自分でも本心がよく分からなくなっていた。この調子ならきつとカズマ殿と別れられるだろう。

「本当ですか?」

「ええ、本当です」

アイリス様は私の目の奥まで見透かして心の中を見ようとする。私の本心が見られやしないかとヒヤヒヤするが、しっかりと彼女を見つめ返した。暫く見つめ合いやがてアイリス様は納得したように頷く。

「分かりました、では私は隣の部屋でお兄様が来るのを待つています。後は頼みましたよ」

そう言つてアイリス様は部屋から出て行く。無事に私の本心は隠しきれたようだ。後はカズマ殿に別れを切り出すだけ、簡単な事だ。これで私はアイリス様を裏切らなくて済む。

「……………はあ」

一人で部屋に取り残され、落ち着いて今の状況を考えてみる。アイリス様の為にカズマを譲ると決めたが、後悔してないか自分に尋ねる。

「私は一体何をしたいのだろうか……」

ただカズマと結婚したい。それだけなのに、なぜ彼と別れようとしているのだろうか。自分の気持ちがいよいよよく分からない。

「カズマ……こんな私を許してくれ……」

別れ話を切り出したら彼はなんて言うだろう。もう私の事を忘れてアイリス様の元へ行ってしまふのだろうか。ひよっとしたら『別れたくない』と言って私を引き止めてくれるかもしれない。

「はは……私は自分が思っていた以上にカズマの事が好きらしい……」

心の底では、まだ彼と別れたくない気持ちが残っているらしい。私は優柔不断な女になつてしまったようだ。早くカズマの事を忘れた方が楽になれるのに。私が思考の渦に身を委ねていた時だった。彼は突然やつて来た。

「クレア、居るか？」

カズマ殿の声だ。私は心を落ち着かせるために一度深呼吸する。大丈夫、すぐに別れようと言って逃げてしまえばいい。アイリス様の泣き顔を思い出して自分に喝を入れ



る。そのまま部屋のドアが開かれた。

「おうクレア……」

カズマ殿が部屋に入ってくる。が、どこか落ち着きのない様子だ。目線があちこちに飛んでいる。不審に思いつつも私は適当に言葉を返した。彼は後ろ手でドアを閉め、私に向かって両手を広げた。

「ほら、クレア。いつものやつだろ？」

「……?..」

彼が何を言おうとしているのか分からない。私は首を傾げるだけで何も行動しなかった。

「あれ、今日はハグをしないのか？」

「なっ!?!」

私がどう別れ話を切り出そうか悩んでいるというのに、この男は何を言っているのだらう。た、確かにいつもハグはしていたが……、もう少し空気を読んで欲しい。

「きよ、今日はそういう気分ではないのだ……」

「そ、そうか……」

カズマ殿は髪や服を忙しく触っていて全体的にソワソワしている。一言で言えば落ち着きがなく緊張している様子だった。何かやましい事でもあるのだろうか。

「……………」

互いに黙っている。いつもなら私達の会話は途切れる事はない。どうやら私だけでなくカズマの様子もおかしいようだ。

「あ、あの……」

二人の言葉が被ってしまう。今日の私達は上手く噛み合わない。

「く、クレアからでいいぞ」

「い、いや！カズマから言ってくれ」

肝心の私の話は別れ話だったので先に言うべき話題ではない。当然、カズマに話を促した。

「お、俺の方は大した話じゃないからクレアが先にどうぞ！」

「む、無理だ！私の話は後でいい。カズマこそ先に言ってくれ！」

お互いに先手を譲り合う。なぜ彼がここまで頑なに言いたがらないのか私には分からなかった。もしかして彼も何か重大な話をするのだろうか。それから私達はしばらく押し問答を続けるが、根負けしたカズマが話すことになった。

「じゃ、じゃあ俺から言うぞ。ほ、本当に大した話じゃないからな？」

そこまで前フリをしておいてどうでもいい話だったら拍子抜けする。ただ別れ話を

する前にこれが最後の会話になるかもしれない。他愛もない話でも今は楽しめるだろう。そんな風に樂觀していると、

「俺はクレアと結婚したいと思っている」

彼から言われた言葉に私は固まってしまった。今、”結婚”と言ったのか?自分の耳を疑うが、カズマの顔は真剣だ。その顔も朱に染まっている。

「今日は、俺とクレアが初めて出会った日なんだ。最初はアイリスのただの護衛でしかなかったけど、誘拐事件を通して俺の中でクレアはかけがえのない存在になった」

「ま、待ってくれ……!心の整理が……!」

私に構うことなくカズマは言葉を並べ立てていく。今日がカズマと初めて出会った日。そんな事全然気づかなかった。彼が私との記念日を覚えてくれていた事に頬が熱くなる。

「……こんな俺で良ければ、結婚してくれませんか?」

大事な部分でカズマは噛んでしまう。かつこ悪い彼だがそれすらも愛おしいと思えた。だって私の為にここまで頑張ってくれているのだから。彼のプロポーズを断る理由なんて一つもない。

「はい、喜んで——」

何の迷いもなくOKしようとした時、彼の赤く染まった顔から視線を奥にやる。カズマ殿が閉めたドアは少しだけ開いており、そこには金髪が見え隠れしていた。アイリス様だ。アイリス様が今までの事の成り行きを見ていたのだ。

「あの……返事をもらえると嬉しいんだけど……」

いつまでも何も言わない私にカズマ殿が耐えられなくなったのか、小さな声で言葉を漏らす。今の私は先程まで彼のプロポーズに有頂天になっていた私とは違う。この状況をアイリス様が見ている。その事に気づいてしまったのだ。

「……………」

彼に返事を催促されるが、それでも私は答えない。どう答えるかで私の運命が決まる。アイリス様を選ぶか、カズマを選ぶか。

「わ、私は——」

視界の中にカズマとアイリス様が映る。二人とも私にとって大切な人だ。だから、この選択をするのは本当に心苦しい。それでも、私は言わなければならぬ。

「結婚をするのはまだ早いのではないか……？　そういう事はもう少し段階を踏んでからで良いだろう」

私の言葉は曖昧なものだった。彼と結婚したいとも結婚したくないとも取れるその場しのぎの言葉。結局私は選ぶことが出来なかった。アイリス様もカズマも見捨てることは出来ない。

「そ、そうか……、急にこんな話して悪いな」

「普段よりも彼の声色が震えているのが分かる。私に結婚を承諾して貰えなかった事が余程ショックだったのだろう。彼は酷く項垂うなだれていた。

私は彼のプロポーズを断った以上、慰めることも出来なくて、ただ彼を見捨てるほどの度胸もなくて。彼が落ち込むのを傍で見守っているだけだった。

……それからどれくらいの時間が経っただろう。私達の間には沈黙は相変わらず気まずいものだった。何か声をかけようと思うが上手く声が出ない。

「……クレアは俺の事好きなんだよな？」

カズマが俯いた顔のまま尋ねる。それはいつものイチヤイチャしてる時の確認とは全く違って、もし「嫌い」等と言われれば、二度と立ち直れなくなる。彼の脆い感情が如実に出た言葉だった。

「……………」

私は彼の質問に何も答えない。いや、答えられなかった。アイリス様がいるからだ。元々、カズマと別れ話をする予定だったのに、彼に好意を伝えるなんて見当違いだ。

「……クレア?」

私の沈黙にカズマは不安そうに顔を上げる。

「あ……す、すまない……」

私は小さな声で謝ることしか出来なかった。私の返事を聞いたカズマは顔を暗くする。私が何も言わないから彼の事が好きじゃないと思ったのだろう。

「お、俺はもう帰るよ……」

気が動転したカズマはすぐに扉を開けて転びそうになりながら部屋を出て行く。部屋の外にはアイリス様が居たが、いつの間にか彼女は居なくなっていた。部屋には私一人だけになる。



「……………これでアイリス様を裏切る事はなくなつたな」

今日は彼へ好意を伝える事はなかつた。以前、彼に抱きついて匂いを堪能していた頃に比べれば大きな進歩だ。

「明日もアイリス様に顔向けできる……………」

今日の私はよくやったと思う。どうにかアイリス様の護衛としてやって行けそうだ。そう、清々しい気持ちになるはずだった。それなのに…………

「……………え？」

気がつけば私の目からは涙が溢れていた。両目からツーツと水が一直線に流れている。おかしい、私はアイリス様の護衛としてやるべき事をしたはずなのに。

「あ、あれ……………こんなはずでは……………」

私の心にはまるでぽっかりと穴が空いたようだ。大切なものを失って体中から力が抜けていく。

「大丈夫だ、私にはアイリス様がいる。カズマがアイリス様のものもになってもいいじゃないか……大丈夫……大丈夫……」

必死に自分に言い聞かせるしかない。それでも私の心の中で感情が暴れ回るのが抑えられなくて。結局、その夜は枕を濡らして寝ることになった。

## この恋敵に報復を！（R18）

カズマのプロポーズを断ったあの日から彼は城へ来なくなった。私が彼の屋敷に会いに行く手段もあるが、プロポーズを断った以上合わせる顔がなくて会いに行つてない。今日こそは彼が来るのではないかと淡い希望を抱いては何も起こらない日々が続き、気づけば二週間の月日が流れていた。

それでも日々の生活は変わらなくて、アイリス様の授業もあるし騎士としての仕事だつてある。私達の事情にはまるで構いなしに時は流れ、忙しい毎日を過ごしていた。

「クレア、この問題が分からないのだけれど」

今日はアイリス様の授業の日だ。彼女が私に分からない所を質問してくる。私はアイリス様の部屋で彼女に付きつきりで勉強を教えていた。

「そこは、機会費用の考え方を使うのです。表を参考にもう一度考えてみてください。こここの答えはどうなりますか？」

「えーと……。分からないからこの続きは明日にしませんか？」

彼女が授業を早く終わらせようとする。何かやりたい事があるのかさつきからソワソワしていた。時計を見れば授業を始めてから一時間が経っている。確かに少し授業が長くなりすぎたかもしれない。

「……仕方ありませんね。区切りは悪いですが、本日の授業はここで終わりにしましよ  
うか」

アイリス様は授業が終わると、待っていたとばかりに引き出しを開ける。中には彼女が書いたであろう手紙がいくつか入っていた。

「もしかしてアイリス様がソワソワしていたのは、この手紙を見たからですか？」  
「べ、別にソワソワしていません！」

私は彼女の持つている手紙を後ろからそつと覗く。どうやらこの便箋でカズマと手紙でやり取りをしているらしい。

『お兄様に早く会いたいです。次お城に来るのはいつ頃になりそうですか？首を長くして待っています——』

手紙の中の一枚にはそのように書かれていた。アイリス様はちゃんとカズマにアプローチしているようだ。この調子なら無事二人は結ばれるだろう。でも、アイリス様が微笑を浮かべながら手紙を見ているのは、私には眩しい光景で。居た堪れなくなり私は早く立ち去ろうとする。

「アイリス様、私は他の仕事があるので失礼致します」

彼女がカズマにアプローチする所を見たくない。私が目を逸らす様にその場から逃げようとした時だった。

「待ってくださいクレア」

私の手を握ってアイリス様が私の事を引き止める。彼女の手を振りほどく訳にもい  
かなくて私はその場で立ち止まった。

「クレアはお兄様とはもう別れたのですか？」

急なアイリス様の発言に心臓が止まるかと思った。二週間前、カズマのプロポーズを  
断った日、私は彼に別れ話をする予定だった。結局、その話は出来ていないのだが、ア  
イリス様は私が既にカズマと破局していると思っているのだ。

「い、いえ……私は——」

私は勿論別れてないと言おうと思った。だが、私がまだカズマに未練がある事をアイ  
リス様に悟られてはいけない。悩んだ末、彼女に嘘をつく事にし

「——カズマ殿とはもう別れましたよ」

私がこの時どんな顔をしていたのかは分からない。ただアイリス様を気遣う憂いや、

カズマを裏切ってしまった悲しき等でとても複雑な顔をしていたと思う。

「そうですか、それは良かったです」

アイリス様は私の答えを聞くと、ただ無表情で返事をする。きつと彼女は私の嘘に気づいているだろう。

「あれから、カズマ殿にアプローチしたのですよね。彼とのその後の進展はいかがですか?」

怖い気もするが、一応私は聞いてみる。私が彼と別れようとしているのもアイリス様の為だ。二人には無事に結ばれて欲しい。

「特に進展はないですよ。お兄様は今でもクレアの事が好きみたいです」

”私の事が好き”。その言葉に私は心が惑わされる。嬉しいと少しでも思ってしまった自分を嫌悪する。彼とはもう別れなくてはならないのに。

「私はアイリス様の恋が実ることを応援しております。困った時はいつでも私を頼ってくださいね」

アイリス様に劳いの言葉をかける。彼女は私の氣遣いにフツと顔を綻ばせた。ふと、時計を見ると時刻は午後9時を指している。私はこの後に騎士団の会議が入ってる事を思い出した。

「それでは私は仕事がありますので失礼致します」

私はアイリス様の部屋から出て城の廊下を歩く。窓を見れば外はもう夜の帳が降りていてすっかり暗くなっていた。前までならこの時間帯はカズマが城に遊びに来る頃だった。だが、彼は二週間も姿を見せていない。

もう彼には私の事を忘れて新たな恋をして欲しい。そして、アイリス様と結ばれて欲しい。それが私にとっての幸せでもあるから。カズマの事がもう好きではない、と兎に角自分に言い聞かせていた。



「カズマに会ったら別れ話をしないといけないな……」

アイリス様の為にも彼と別れなければならぬ。その事を考えると、彼に会いたくない気もするし会いたくない気もする。私の心は彼に大きく動かされていた。その時、窓の外に人影が見えた。窓の外、正確には城門の所に人がいる。

「あれは……カズマか？」

黒髪に緑を基調とした服。遠目からではあるが、カズマの服装によく似ていた。心臓の鼓動が早まるのを感じる。もし本当にカズマなら私に会いに来たのだろう。

それからの私の行動は早かった。私はすぐに自分の部屋へと駆けていく。カズマに会う前に最低限、身だしなみを整えなければならない。私はボタン、と勢いよく自室のドアを開け部屋にある姿見の前に座った。

引き出しから櫛くしを取り出し何度も髪の毛を梳すいていく。右からも左からも自分の姿を確認し、前髪の細かな位置も調整した。……よし、これで髪の毛は大丈夫だ。服装もいつもの白スーツだからまあ及第点。残るは顔、今日は化粧にあまり力を入れてない。暫くカズマに会っていないから完全に気を抜いていた。時計を見ればカズマが来た時

刻から十分が経過している。

「もう時間がないな……」

私は本格的な化粧をするのは諦め、口紅だけ塗ることにする。桃色のリップを手に取り口に薄く塗った。淡い色がわたしの肌にも上手く馴染んでいる。鏡を見てみると少し色気があるように見えた。

もう少し鏡を見て自分の姿を確認したいが、私は部屋から出る。すると、丁度廊下の奥にカズマの姿が見えた。こちらへ向かってきている。どうにか間に合ったようだ。

（な、何から話そうか……。一週間ぶりに会うから気まずい……。カズマからどう話しかけてくるか見てそれから話そう）

私は自分の部屋の前でウロウロする。カズマが来ている事には気づいてないフリをして彼から話しかけてもらうのを待つことにした。近づいてくる彼を私は黙って待ち続ける。顔が熱くなるのを感じる。そして、私の前に彼が来た――。

（彼はどんな態度を見せるだろう。プロポーズを断ってしまったが、私を許してくれたりするのだろうか）

「……………」

しかし、そんな予想を超えて彼は私に目もくれず去っていった。まるで私など居ないかのように彼は通り過ぎて行き、私は呆然とその場に立ち尽くす。

彼に話しかけられなかった事に一瞬頭が追いつかなかった。今日は私に会いに来たのではないのか。彼に会う為に急いで準備した私が高なだかバカらしくなってくる。私から彼に声をかけようとしたその時だった。

「お、アイリス」

彼の言う通り廊下の奥にはアイリス様。彼が来るのを待っていたかのようにアイリス様は彼女の部屋の前で佇んでいた。私は急いで近くの物陰に隠れる。

「約束通り来てくれたのですね」

「ああ、可愛い妹の頼みだからな」

アイリス様は部屋の扉を開けてカズマと一緒に中に入って行く。部屋の扉がバタンと閉まり、二人の姿が見えなくなった。すぐに私はアイリス様の部屋の扉に耳を当て

る。中で二人が何か喋っているのが聞こえたが、その内容までは聞き取れなかった。

「ど、どういう事だ。カズマは私に会いに来たのではなかったのか……？」

手を輪つかにしてドアの向こうの声を必死に拾うが、先程と結果は変わらない。私の見えない所でカズマとアイリス様が二人きりになっている。カズマをアイリス様に譲ると決めたのに私は焦燥感に駆られていた。

「クレア殿」

私を呼ぶ声。振り向けばレイン殿が、アイリス様の隣の部屋からドアを開けて手招きしている。彼女はこんな所で何をしているのだろう。

「ちよつとこつちに来てください」

レイン殿に言われるがまま私は隣の部屋に入る。部屋の中は物置きになっていて普段は使われていない事が窺えた。

「れ、レイン！カズマがアイリス様の元に……！一体何がどうなって……」

「……クレア殿は何も知らないのですね」

私のアワアワした様子を見てレイン殿はため息をつく。そして彼女は事の顛末を一から説明し始めた。

「今日、カズマ殿はアイリス様と会う約束をしていたのです。アイリス様は今夜彼にプロポーズする予定なのですよ」

レイン殿の言葉に目を丸くする。カズマは私じゃなくてアイリス様に会いに来たという事だ。だからさつきも私に話しかけなかったのだ。しかも、アイリス様は求婚する覚悟まで決めている。カズマを彼女に譲るつもりだったが、いざ現実になるとモヤモヤした気持ちになった。

「そうか……。遂にアイリス様がプロポーズするのだな……」

「まあカズマ殿が簡単にアイリス様に靡くなびかは分かりませんが」

今頃、部屋の向こうではアイリス様が熱いプロポーズをしている事だろう。彼女達の様子が見れない事が私の想像を掻き立て不安な気持ちが募っていった。

「どうにかカズマ達の様子を見れる方法はないものか……」

すると、私の横でキリキリという音がした。ふと目を向けると、レイン殿がアイスピックのようなもので、壁に穴を開けている。

「こうすればアイリス様の部屋が見えるはずですよ。壁も薄いですし、すぐに向こうの部屋まで開通しますよ。覗きますか？」

レイン殿の大胆な行動に尻込みする。穴を覗いてしまえば、アイリス様のプライバシーを侵害する事になる。私は見たい気持ちもあつたが、穴を覗くのはやめることにした。

「いや、私はもうアイリス様にカズマを譲ると決めたのだ。彼と喧嘩もしてしまつたし

な……。別にアイリス様がカズマに何をしようと私がとやかく言う筋合いはない。だから二人の様子を見る必要はないだろう」

「ふうん、そうですね。あ、穴が開きました。じゃあ私だけ向こうの様子を見ますね」

レイン殿は私に構うことなく穴を覗いている。彼女の中に罪悪感はないのだろうか。少なくとも私は覗き見するつもりはなかった。

『——お兄様、今日私がなせここに呼んだのかお分かりですね？』

アイリス様の声が聞こえてきた。壁に穴を開けたせいで、向こうの部屋の声がこちらまで聞こえてきたのだろう。覗き見はしないと云ったが、勝手に声が聞こえてくる分にはしょうがない。このまま二人の会話に聞き耳を立てよう。

『まあ……大体分かってるけど……』

カズマが控えめに言う。

『そうですか、では改めて言わせてもらいますね。私はお兄様の事がずっと好きでした。どうか私と結婚してくれませんか?』

アイリス様は自分の想いを多く語るでもなく端的にそう言った。彼女の告白をカズマだけでなくレイン殿も私も聞いている。皆がカズマがどう答えるかジツと返事を待った。

『……俺は元々引きこもりでさ、もう一生女の子に縁がないと思ってたんだ。そんな俺がこんな綺麗な女の子に告白されている。嬉しくない訳がない』

カズマの声は凄く切なそうで聞いている私達が貰い泣きしそうな程だった。それだけ彼も告白を断るのが辛いのだろう。

『アイリスの気持ちは本当に嬉しいんだ。でも……、もう俺にはクレアがいる。クレアと俺が付き合っている事は知ってるだろう?俺は二股出来るほど経験に長けてる訳でもなければそんな事するほどのクズでもない。だから、アイリスとは結婚できない』



カズマはアイリス様を傷つけないように細心の注意を払いながらも、ハッキリと彼女のプロポーズを断った。アイリス様がショックを受けるかもと心配していると、

『やはりお兄様はクレアの事を選ぶのですね』

アイリス様の声には諦観の念が含まれていた。彼女自身も振られると分かっていたのだろう。

『ああ、ごめんなアイリス』

『別にいいですよ、どうせこうなるだろうと思ってましたから』

私はアイリス様の声に違和感を覚える。彼女の声は悲しんでいるように思えないのだ。むしろ心の中に闘志を燃やしているような、力強い声のように感じる。

『お兄様、少し目をつぶって貰えますか？』

『？、まあいいけど』

それから向こうの部屋から声が聞こえなくなった。私は声だけしか聞いていないので、中の様子は分からない。ただ穴を覗いているレイン殿の顔が赤くなっている。まさかと思い、私はレイン殿をどけて向こうの部屋を覗いた。

『じゆる……ちゅば……』

アイリス様はカズマと熱いキスをしていた。彼女が押し倒したのかカズマの上に馬乗りになっている。二人のイチヤイチャしてる所を見て私の心の中で何かが壊れるのを感じた。

『……………ぶはっ！はあ……………はあ……………ま、待てアイリス！い、一旦落ち着こう！』

アイリスのキスから解放されたカズマが息を絶え絶えにして彼女を止める。

『もう気持ちを抑えられないのです……………！今夜だけ私の好きにさせてください……………！ほら、口を開けて……………！』

そう言ってアイリス様は再びカズマにキスをする。カズマとキスできるのは私だけの特権のはずだ。それがアイリス様に奪われてしまった。私は奥歯を噛み締める。

『……………んんー！た、助けてくれ、痴女に襲われる！』

このままではカズマがアイリス様の物になってしまう。カズマもなぜ抵抗しないのだ。アイリス様も王族で力が強いとは言え、やり方はいくらでもあるだろう。

『そんな大声を出しても誰も来ませんよ。それに嫌なら抵抗すれば良いでしょう。お兄様は”ドレインタッチ”という強力なスキルがあつたはずですよ。それを使わないということは、お兄様も満更ではないという事でしょう？』

『あ……………いや……………』

アイリス様の話を聞いて体から力が抜ける。カズマも言葉が詰まっているし凶星だったのだろう。もうこれ以上私を傷つけないで欲しい。私以外に彼の下心が向けられる所なんて見たくなかった。

『それにさっきから下腹部に硬いものが当たっているのも気づいていますよ。ここが大きくなられたという事は……私に興奮されたのですよね？』

私はアイリス様の下卑た発言に嫌気が差していた。普段はお淑やかで可愛らしい彼女がカズマを前にして悪女になっている。私の中での彼女の純粋なイメージがどんどん崩れ去っていく。

『ま、待ってくれアイリス。今日は本当にどうしたんだ？前はそんなにはしたくないじゃないか』

アイリス様はカズマに恋しているとは言えここまでの強硬策に出るのは異常だ。彼もそれを感じ取ったのだろう。アイリス様はキスで体力を使ったのか、肩で息をしながら言う。

『……別に何もありませんよ、私は元からこういう子です、ただクレアが羨ましいなと思っただけで……』

急に私の名前が出た事に体が反応する。

『クレアはもうお兄様を好きじゃないと言ってましたが、あの顔を見れば恋している事など誰が見ても分かります。あの顔が妬ましかったし嫌いでした……。本当に今思い出すだけでも虫唾が走ります……』

私が必死に隠していた想いもアイリス様は気づいていた。そして、彼女が私の事をそんなに憎んでいた事が何よりも辛かった。私との関係が壊れるのが嫌と言っていた彼女の言葉は嘘だったのか。

『だから私は決めたのです。私がお兄様と結婚しようと。そうすればクレアは相変わらず私の事を慕ってくれるでしょうし、私達の関係も壊れることはない。これが最善の行動なのです。だから……お兄様……』  
『私と愛し合いますよう？』

アイリス様は再びカズマにキスをする。唾液を交換し合うティープなキスだ。そして彼女は空いた左手で器用にカズマのズボンを脱がしていく。

『ほ、本気なのか？本気でやるのか……！俺はついに童貞を卒業するのか！』  
『ちよつとお兄様、静かにしてください』

襲われているというのにカズマの顔は喜色に満ちていた。受け身ではあるが、彼が嬉しそうにアイリス様と一線を越えようとしている。もうそれ以上見たくなくて私は顔を背けた。

「クレア殿、二人の様子を見なくて良いのですか？」

私の様子を見ていたレイン殿が尋ねてくる。私は泣きそうになっている自分の顔を彼女に見せないようにして答えた。

「……ああ、もう見たくない。私の心はボロボロだ……」

アイリス様が私の事を憎く思っている事、そしてカズマが彼女の誘惑に負けてしまった事。あまりにショックな出来事が立て続けに起こって私はもう立ち上がる事も出来

なくなってしまった。

「クレア殿、ちゃんと見てください。現実から目を背けてはいけません」

レイン殿が私の頭を無理やり掴んで穴の中を覗かせようとしてくる。私の視界にはカズマ達の姿がハッキリと映った。

「や、やめてくれ……これ以上見たくない……」

「これはクレア殿が選んだ事です。アイリス様がカズマ殿にアプローチしているのもクレア殿が許可を出したからです。自分がやってしまった事から逃げてはいけません」

確かに私が悪い部分もあるのは分かっている。これだけ打ちのめされてもまだアイリス様の事を裏切らないように必死に我慢しているのだから、私がおかしいのだ。

薄ら目を開けるとアイリス様がカズマの剛直に手を当てていた。彼女の手が彼の息子を上下に扱しき、グチユグチユと不快な音が響いている。

『私も初めてなのでよく分かりませんが……ここを握られると気持ちいいのですね？』

『ううっ……アイリス……このままだと本当に不味いつて……』

『ふふっ、余裕がないお兄様も可愛いですね』

アイリス様がカズマに笑いかける。その笑顔を見た時、私の中でどす黒い感情が流れているのに気づいた。これは嫉妬だ。嫉妬が私の心を支配し彼女をどんどん嫌いになっていく。

『あつ、なんだかビクビクしてますよ。もう限界が近いのではないですか？』

『ううっ……ほ、本当にヤバいから……だ、ダメだもう出る……！』

『きゃっ！』

カズマの愚息から勢いよく精液が飛び出るのが見えた。その液体はアイリス様の手を白濁に汚す。

「殺してやりたい……」

私の口からは憎悪の言葉が漏れていた。アイリス様がカズマを襲う所を見てしまっ



た。もうアイリス様……いや、アイリスを主君として見れない。彼女は恋敵だ。

『お兄様、気持ちよかったですか？もう一度キスをしましょう』

彼女が再びカズマにキスをねだる。その蕩けた顔を見てフツフツと怒りが湧いてくる。私の男に手を出すなど言いたい。もう隣の部屋に突撃しようとしていたその時だった。

『ドレインタッチ』

カズマが突如としてスキルを使う。彼と手を繋いでいたアイリス様は生命力を奪われ、徐々に力が抜けていった。カズマに馬乗りになっていた彼女は力なくカズマの上に倒れる。

『な……ど、どうして……！』

『ごめん、やっぱりクレアがいるのにこういう事をするのは良くないと思うんだ。アイリスもきつと後悔すると思う』

カズマはアイリスをそつと床にどけ、脱いでいたズボンを履き直す。

『アイリスの気持ちは本当に嬉しい。でも、やっぱり俺は二股は出来ない。だから……俺の事は諦めてくれ』

それだけ言い残すとカズマはアイリスの部屋のドアを開け、帰って行った。隣の部屋にはアイリス様だけが残される。

『はあ……振られてしまいました……』

アイリスは悲しそうにため息を漏らした。その姿を見て私は可哀想に思う気持ちよ  
り、ざまあみろという気持ちの方がはるかに強かった。私の性格はかなり悪くなったよ  
うだ。

「クレア殿、大丈夫ですか……？」

熱心に穴の中を覗いていた私を心配したのかレイン殿が声をかけてくる。私は彼女  
を軽く一瞥する。

「……少し疲れたが大丈夫だ」

「すみません、私が無理やりクレア殿を辛い目に遭わせてしまつて……」

レイン殿は申し訳なさそうに言う。アイリスとカズマの情事を見させたことを言っているのだろう。チラリと穴の中を覗くとアイリス様が部屋の中で泣いていた。彼女のプライバシーを守る為にも私はそれ以上部屋を覗かないようにする。

「アイリス様も完全にカズマ殿に振られた訳ですし、ショックを受けたでしょうね……。」

レイン殿はアイリス様に同情しているようだが、私の心には清々した気持ちと哀れに思う気持ちが混在している。自分でも複雑な思いだった。

「レイン殿、一つ頼み事をしていいか？」

「？、何ですか？」

私はレイン殿のことをまっすぐ見て言う。これは彼女にしか頼めない事だ。

「私はアイリス様の護衛を辞めようと思う。これからはレイン殿が彼女の面倒を見てやってくれないか？」

私の発言を聞いたレイン殿は目を丸くする。ずっとアイリス様の為に生きていた私  
がその仕事を辞めるのだから驚いているのだろう。

「よ、宜しいのですか？あんなにアイリス様が好きなクレア殿が護衛を辞めるだなんて……」

「ああ、私は主君が悲しむ様を見て喜ぶような奴だ。アイリス様の護衛として相応しくない。明日にでも辞表を出しに行く」

私の真剣な顔を見て彼女も何か察したのか、力強く答えた。

「アイリス様は私がこれから責任を持って面倒を見ますよ。安心してください」

レイン殿の返事に私は安堵する。後のことは彼女に任せても大丈夫なようだ。心が  
ボロボロになっていた私も彼女の言葉で少し報われたような気がした。

## この恋の行方に祝福を！（R15）

アイリス様とカズマの情事を目撃した次の日、私は国王様にアイリス様の護衛を辞める旨を書いた辞表を出しに行つた。国王様は私が辞める事に大した関心も見せず、すんなりと了承してくれた。ただすぐに仕事を辞めることは出来なくて、今携わっている全ての公務が終わる一ヶ月間で仕事を終える事になった。

つまり、私はこの一ヶ月が終わつたらアイリス様の面倒を見る事はなくなるといふことだ。それが少しだけ寂しかった。……………いや、正直に言うと、すごく寂しい。彼女と別れることを想像すると胸がキュツと締まってキツくなる。でも、私は相変わらず自分の感情に蓋をして過ごしている。ただ私に出来るのは一日一日を大切に過ごすことだけ。刻一刻と迫る別れの時に怯えながら過ごしていた。

そして遂に別れの日がやって来た。今日は辞表を出してから三十日目。私は全ての仕事を終え、城から出て行こうとする。そんな私をレイン殿やアイリス様が見送りに来てくれた。

「それでは私はこれで失礼します。レイン殿もアイリス様も今までありがとうございます」

私は二人に丁寧に頭を下げる。これからは滅多に会うことはなくなるだろうから最後くらいちゃんと別れようと思った。レイン殿は目に涙を浮かべて、

「これからアイリス様のことは私に任せてください。クレア殿もどうかお元気で……！」

彼女の目から涙の雫が垂れる。まさか彼女が泣いてくれるとは思わなかった。たまらずレイン殿に抱きつく。彼女には特にカズマの事で色々と助けてくれた。その感謝の気持ちも込めて私は抱擁する。レイン殿は涙が堪えきれなくなったのか声を上げて泣いていた。

「すいません……最後は笑顔で見送りましたのですが……うぐっ……泣いてしまいました」

「レイン殿が私の為に泣いてくれて嬉しいぞ。これからも定期的に手紙を送るからな」

名残惜しいが抱きついていた彼女からそっと手を離す。あまり長居しすぎると帰りづらくなってしまいうからだ。レイン殿もそれが分かっているのか目を赤くしながら離れた。

「アイリス様もどうかお元気で。たまには顔を見せて来ますので」

「ええ、私もクレアと会うのを楽しみにしていますよ」

アイリス様は笑顔で言う。本当は彼女とも抱擁したかったが、そんな事したら私まで泣いてしまいそうなので止めておいた。

「ここを辞めたら次にやる仕事は決まっていますのですか？」

アイリス様が尋ねてくる。実際の所、次の仕事の予定は何も考えてなかった。

「そうですね……とりあえずカズマに会ってそれから二人で今後の予定を決めようかと



思っています」

彼と一緒に冒険者をやってみるのもいいかもしれない。だが、私の返事を聞いたアイリス様から途端に喜色が失せる。

「お兄様に会うのですか……」

「ええ、それがどうかしましたか？」

私は毅然とした態度で彼女に接する。少しでも彼女に遠慮すれば簡単にカズマが奪われてしまう事は身に染みて分かっていた。だからもう彼女には容赦しない。

「……いい、いえ何でもありません」

私の様子にたじろいだのかアイリス様は何も言わない。そんな彼女を見て私の中で少し罪悪感が芽生える。アイリス様に容赦しないと思っていたが、私はまだまだ彼女に甘いみたいだ。仕方ないので彼女の言葉を聞き出してあげる。

「言いたい事があるならハッキリと仰ってください。これからアイリス様とは滅多に会えなくなるでしょうから後悔がないようにしましょう」

私の言葉を聞いたアイリス様は逡巡した様子を見せる。そして迷った末、懐から一枚の封筒を取り出した。

「あの……これをお兄様に渡して貰えませんか？」

私はアイリス様からその封筒を受け取る。紙には折り跡一つないことから彼女がこれを大切にしている事が分かった。

「それは私からお兄様への恋心しんたを認めた手紙です。クレアから直接お兄様に渡して欲しいのです」

なるほど、つまりこの手紙はラブレターというやつだ。やはりアイリス様はまだカズマの事を諦めていなかったようだ。私は彼女のしつこさに辟易する。

「これは自分でお渡しになったら如何いかでしょう。今でもカズマとは手紙でやり取りしているのですよね？」

なぜアイリス様が恋敵である私に頼むのか分からなかった。私がカズマを好きな事は彼女にバレているはずなのに。彼女は私が今でもアイリス様の味方だと思っているのだろうか。

「その事なのですが……、実はお兄様に何通も手紙を送っているのにずっと返事が返ってこないのです。ひよっとしたら私の手紙が届かないように誰かが邪魔をしているのかもしれません。だから信頼できるクレアに直接お兄様に届けて欲しいのです」

確かにカズマが住む屋敷にはめぐみん殿やダステイネス卿が居る。彼女達もカズマに恋心を抱いているので、アイリス様のアプローチを邪魔している可能性は高いだろう。

だが、それで私に手紙を渡していいのだろうか。私だってアイリス様の恋敵。勇気を出せば彼女の恋路を邪魔するかもしれない。そんな私の気持ちを知ってか知らずかアイリス様は口を開いた。

「クレアならきつとお兄様に届けてくれるでしょう」

彼女の言葉を聞いた瞬間、アイリス様は何も知らないのだなと思った。この前アイリス様がカズマを襲ったのを見て私は彼女にもう容赦しないと誓った事に気づいてない。これからも私がアイリス様に遠慮して生きていくと思っっているのだろう。

「アイリス様、クレア殿にそういう事を頼むのはよくありません。これはちゃんと自分の手で渡してください」

私の善意につけ込むアイリス様をレイン殿が横から注意する。だが、私は彼女を止めてアイリス様の頼みを受ける事にした。

「いや、これは私が貰っておく。カズマに届けばいいのですね？分かりました、私に任せてください」

私は彼女から受け取った手紙を懐に入れる。アイリス様は私が大人しく頼みを聞い

てくれた事に安堵したのかニツコリと微笑んだ。私はその視線に居た堪たまれなくなつてそつと目を逸らす。

「では、今度こそお別れです。アイリス様もレイン殿もどうかお元気で」

私は荷物が入ったカバンを背負つて城門を出る。私に向かつてアイリス様もレイン殿も手を振り続けていた。

十

私が真つ先に向かつたのはカズマの屋敷。事前に彼の住んでいる所を調べておいた。彼の家の門をくぐり私は屋敷のドアの前に立つ。そこで深呼吸した。彼とはプロポーズを断つて以来、話していない。一ヶ月ぶりに会うことになるが彼は私の事を今でも愛してくれているだろうか。そんな不安が過ぎるくらいには私は弱つていた。だが、迷つていてもしょうがない。私は思い切つて彼の家の呼び鈴を押す。

「はーい」

と中から間の抜けた声が聞こえた。カズマの声だ。胸が高鳴るのを感じる。ジツと扉が開くのを待った。やがてドタドタと人が走る音が聞こえてくる。そしてギイッとドアが開いた。

「いきなり訪ねてきてすまない、カズ……」

「何か用ですか？」

ドアから顔を出したのはカズマではなかった。めぐみん殿だった。てつきり彼が出るものだと思っていた私は少し怯む。その上何故か彼女は私を睨みつけていた。何かしてしまっただのかと思うが思い当たる節がない。

「か、カズマはいるか？彼に会いに来たのだが……」

「カズマはリビングにいますけど……。それより誰の許可を取ってカズマを呼び捨てにしているのですか。その呼び方は無性にイラッとします」

「す、すまない……」

めぐみん殿の物言いに私はたじろぐ。いつもならアイリス様を守るという名目上、語気を強めて話せるのだが今日は一人だ。しかもめぐみん殿が喧嘩口調で喋るので萎縮した態度を取ってしまう。

「貴族の貴方には分からないでしょうが、人を名前だけで呼ぶ時はその人と最も仲のいい人に許可を取らないといけませんのです。そしてカズマと最も仲がいいのはこの私。つまり、私の許可なしにカズマを呼び捨てするのは、この上なく失礼なのですよ」

めぐみん殿の話は初耳だった。自分で言うのもなんだが、私は貴族のお嬢様育ちなので庶民の事柄には疎いのだ。だから彼女の言ってる事も知らなかった。ここはしっかりと筋を通しておかなければ。

「それは失礼しためぐみん殿。そのような慣習があるとは知らなかった。どうか私にもカズマ殿を名前で呼ばせて頂きたい」

私は貴族しか知らないであろう礼をしてきちんと頭を下げる。今回はこちらに非がある。しっかりと謝罪しなくてはならない。私の真摯な態度を見れば恐らく許してくれる

るだろう。

「ダメです、カズマを名前で呼ぶのは断固として拒否します」

断られてしまった。

「なっ!?ひ、人がここまで頭を下げているのだぞ！そこは『そんなに畏かしこまらなくていいですよ』と言いながら許すものだろう！」

「遂に本性を現しましたね！やはり貴方はカズマに会わせる訳にはいきません。私の許可なしにカズマを呼ぶような人は帰って……」

人の誠意を何だと思っているのだと、この女に怒りたい。彼女と言い争っていると、後ろから影が差す。

「そんなルールはないからクレアも騙されるなよ」

カズマが助けに来てくれる。彼はめぐみん殿の言葉を訂正しながら彼女の頭を



チョップした。

「あいたつ!? な、何をするのですか。私は今からクレアを追い返そうとしていただけなのに」

「お前がデタラメを言ってたから指摘しただけだ。それよりクレア、随分と久しぶりだな……」

彼はどこか気まずそうに言う。その顔は後ろめたい事を隠しているような顔だった。一か月前にアイリス様はエツチな事をしたのを後ろめたく思っているのだろうか。彼が今どんな気持ちでいるか私には分からない。

「まあ、とりあえず中に入ってくれよ。立ち話も悪いし」

私はカズマの後ろをついて家の中に入る。大きな屋敷だったが中はきちんとして清掃が行き届いていた。隣でめぐみん殿が私に張り合ってくる。

「一応言っておきますが、貴方にカズマを渡すつもりはありませんよ。二人がどこまで

進んだのか分かりませんが、どうせまだキスで喜んでいる程度でしょう。いいですか？  
私はカズマと一緒にお風呂に入る仲で——」

隣で彼女が何か言っているが、どうでもよかった。今更、彼との恋仲を自慢する気にもなれない。私は好きな人を奪われる悔しさが嫌という程分かっていたからだ。

「あー……めぐみん、悪いがちよつと席を外して貰えないか？今日はクレアと二人で話  
がしたい」

彼の言葉に鼓動が早まるのを感じる。めぐみん殿がいると言いつらい事とはなんだろう。その事が気になって私も彼と二人きりになりたかった。だが、めぐみん殿は頑として譲らない。

「私が邪魔だと言うのですか。良いでしょう、こうなったらとことん邪魔してあげます。  
そして今日は貴方達を二人きりにするのを阻止するのです」

彼女はカズマの事になると周囲を顧みないようだ。その様子がアイリス様と重なる。

私はまた他の女からカズマを奪おうとしているのだと感じてしまう。私は嫌な女になつたのかもしれない。

「それ以上やるつもりならドレインタッチで今日の爆裂魔法に必要な魔力を奪うからな」

「ごめんなさい、どうぞ二人で仲良くしててください」

カズマが爆裂魔法を人質にすると、めぐみん殿は手のひらを返して、さっさと立ち去っていく。めぐみん殿の弱点は爆裂魔法みたいだ。今後のために覚えておこう。

「とりあえず俺の部屋で話すか。ここならアクア達の邪魔も入らないだろう」

彼の部屋に案内される。私はドアを開けた彼に続いて部屋の中に入った。簡素な家具が置いてあるだけのシンプルな部屋だ。彼はベッドに腰かけて話し始める。

「さて……やつと二人きりになれたな」

”二人きり”という言葉に私の体が反応する。それは彼が何気なく言った訳ではなくて、特別な意味が込められているような気がした。

「俺はクレアにずっと言いたい事があったんだ」

カズマの真つ直ぐな目が私を射抜く。彼の目に囚われて私は動けなくなる。もしかして求婚されるんじゃないだろうか。私の中で期待がどんどん高まっていく。

「クレア、俺は——」

彼が私の肩に手を置く。キスだ、彼はキスをするつもりだ。私の鼓動はドクドクと音を鳴らして、顔は朱を散らしたように紅くなって、彼の目を見つめ返す。そして、私はそっと目をつぶった。彼が私にキスしてくれると思つて口を突き出した。

静寂が私達の空気を支配する。何の音も聞こえない。肩にある彼の手から温もりが伝わってくる。彼がキスしてくれるのを私は待った。だが、いくら待ち続けても唇には何も触れない。おかしいなと思ひ、薄らと目を開けると、

「……えっと、クレア？」

カズマが困り顔で私の事を見ていた。私はキョトンとした顔で彼の顔を見る。

「あ……え……、き、キスをしようとした訳じゃなかったのか……？」

「ああ……、す、すまん。紛らわしかったな」

「!？」

私は顔から火が吹き出そうだった。彼がキスをしてくれると勘違いしていた。私の頭は色ボケしてしまったようだ。穴があつたら入りたい。

「あ！で、でも、クレアがキスしたいって言うなら今からしても……」

「や、やめろ！下手なフォローをするな！余計に惨めになるだろう！」

私は顔を両手で覆って赤くなった顔を隠す。キスをされると勘違いした事も恥ずかしいが、何よりキスを待っている時の顔をしっかりと見られた事のショックの方が大きかった。

「……それで、私に話とは何なのだ。キスじゃない事は分かっている」

私は半ばやけくそになる。いくら恥ずかしかがっていてもしようがない。もう先程の事は忘れて欲しくて彼に話を促した。

「えっと……実は一ヶ月くらい前に俺はアイリスの部屋に遊びに行ったんだ。そこで俺は人として最低な事をしてしまった」

彼の話から察するに、アイリス様がカズマを襲った時の話をしているのだろう。私はあの時隣の部屋から全部見てたので、分かりきっているのだが敢えて黙って彼の話を聞く事にした。

「今日はその事を謝りたいんだ。だからあの時の出来事をちゃんと話そうと思う。――」

それから彼はあの日の事を話し始めた。アイリス様の告白を断ろうと思って私に内

緒で彼女の部屋に行った事。そこで彼女に誘惑されて魔が差した事。そのまま彼女の手で射精してしまった事。どれも私があの時見た光景と違わず、彼が真実を言っている事が分かった。

「——つまり俺はあの時アイリスに浮気してしまったんだ。本当はその事をずっと謝りたかった。今日、クレアが来てくれたから最初にこの事を伝えたかった」

そしてカズマはベッドから立ち上がると私の真正面に立つ。

「クレアがいるのにこんな事になってごめん。本当に申し訳ないと思っている」

彼は丁寧に頭を下げた。私はベッドの上でその様子をじっと見ている。普段はヘタレな彼がこういう事をちゃんと謝る人だと知って少し驚いていた。

「か、顔を上げてくれ。カズマがアイリス様に襲われたのは元々知っていたから」

「……………え？」

カズマは顔を上げて私の事を見てくる。私が何を言ったのか理解できてない顔だ。

「だから二人がイチャイチャしていた事も全て知っているのだ。隣の部屋からカズマがキスする所も見たし、その……え、エッチなことをするのも見た」

私の発言に目を白黒させるカズマ。

「そ、それは犯罪じゃないのか？覗き見なんてしたらダメだぞ」

「それは本当にその通りなのだが……」

あの時はレイン殿に言われて中を見ただけで私が自発的に見ようとした訳ではない。まあ、結局覗いてしまったのだが……

「と、とにかくカズマがアイリス様に襲われた事はもう気にしなくていい。確かに少しショックだったが……。でも、それはもう過去の話だ」

私は立ち上がって彼にハグをする。弱っている彼を見ると母性本能なのか庇護欲が



湧いてしまつて慰めたくなつてしまう。体中から彼の温もりが伝わつてきた。

「カズマが私の元に戻つてきてくれた。それだけで私は充分だ。勿論浮気はいけない事だが、今回はカズマは悪くない。だからそんなに落ち込まないでくれ」

出来るだけ彼の不安を取り除いてあげられるように、私は耳障りのいい言葉を並べる。

「本当にごめんクレア」

「気にするな。……それに私だつてお前に謝らないといけないことがある」

私は一度彼から離れ真つ直ぐに彼の顔を見た。

「私はこの前カズマのプロポーズを断つてしまつただろう。あの時の事を今でも後悔しているのだ。本当にすまない……」

私が彼の屋敷に来た一番の目的はあの日の事を謝る為だ。彼があんな夜どんな気持ち

で城から帰ったか私には分からない。でも、私が彼を傷つけてしまったのは間違いないだろう。

「いや、いいよ。クレアの心の準備が出来るまで俺は待っているからさ」

あの時の彼の落ち込んだ顔は今でもよく覚えている。それなのに彼は私の事を氣遣ってくれた。そんな彼に少しでも恩を返したくて、今の気持ちを端的に言った。

「心の準備ならもう出来ている」

最初はキョトンとしていた彼だが、私の言葉の意味が次第に理解できたのかどんどん顔が赤くなっていく。恐らく私も顔が赤くなっている事だろう。少し……いや、かなり恥ずかしい。だが、ここは自分の気持ちを正直に言わなければならない。

「サトウカズマ、私はお前の事を愛している。心の底から愛している」

水臭い言葉だけど、これ以外にいい言葉が思いつかなかった。それにこれは私の本心

だ。私は彼の手を取り両手で優しく包み込む。そして胸に渦巻く万感の想いをぶつめた。

「こんな私で良ければ結婚してくれませんか？」

遂に言ってしまった。もう言葉を取り消すことはできない。これで、アイリス様を裏切る事になるが私はもう自分に嘘をつきたくなかった。これは私なりのケジメなのだ。彼は私をじっと見つめている。やがてゆっくりとその口を開いた。

「……………これは夢じゃないよな……………？」

カズマは喜んでいるのかよく分からない。ただとても困惑しているようだ。私は彼の真意を探りながら返事を待つ。

「ずっと不安だったんだ、クレアが俺のプロポーズを断った日から本当は俺のことが好きじゃないんじゃないかって」

そして彼は私に抱きついてきた。それが彼の返事だったのだろう。

「でも……良かった……！俺も大好きだぞクレア！」

彼はプロポーズを了承してくれた。それが嬉しくて私も彼を抱きしめ返す。私の愛が伝わるように強く強く抱きしめた。彼の言葉、体の温もり、その全てが愛おしかった。

「私も大好きだ。好きで堪らない……！」

傍から見れば私達はバカカップルに見えるだろう。でも、普段はヘタレな彼がいぎとゆう時はかっこいい事も、気が多いが私だけを一途に愛してくれる事も、そのゴツゴツした男らしい手も私は全て知ってしまった。彼の好きな所が次から次に溢れ出して止まらなかった。

「クレア、今度こそキス……するか？」

「！」

彼から願ってもない申し出。私はすぐさま彼に口付けした。最初は軽いキスだったが、徐々に気持ちを抑えられなくなり互いの唾液が混ざり合う。私は舌を突き出し彼の口の中を蹂躪する。彼も私に応えるように舌を絡める。

「じゅる……ちゅぽ……」

淫靡な水音が部屋に響く。もう誰も私達を止められなかった。私の下腹部がキュンキュン疼くのが分かる。興奮したせいかわたし何だか頭がポーツとしてきた。それなのに彼とのキスは続いていて頭が蕩けていく。

「クレア……愛してる」

彼から愛の言葉が囁かれる。私はもう彼にメロメロだった。おへその下辺りに彼の硬いものが当たっているのにも気づいている。彼も興奮しているのだ。私達の情欲を抑えられなくなっていると、

「カズマさん、昼ご飯が出来たわよ」

間延びしたアクア殿の声。足音がこちらに近づいてくる。彼女に醜態を晒す訳にも  
いかなないので一度私達は唇を離す。

「はあ……はあ……クレア……」

彼はギリギリの所で理性を保っているようだ。少しでも彼を誘惑したら簡単に獣ケダモノに  
なってしまう。だから絶対にこれ以上キスをしてはいけない、と頭では分かっている。  
それなのに――

「カズマ……！」

彼にもう一度ディープキスをすると共に、彼の手を取り私の胸を揉ませた。もうこの  
まま一線を越えたいと私はアピールしたのだ。辛うじて私を襲わなかった彼もタガが  
外れ、私の胸を一生懸命に揉む。

「可愛いぞクレア」

愛の言葉が囁かれ私は一層興奮してしまう。私は彼をベッドの上に押し倒してそのまま上に覆い被さった。彼と抱き合いながらキスをして、そして股を彼の膨れ上がった部分に擦り付けながら愛を深めた。

「かじゅま……！はむっ……かじゅま……！」

キスの合間に彼の名前を呼ぶ。彼も私に伝えてズボンを脱ごうとしたその時だった。部屋のドアがギイッと開きアキラ殿が顔を出す。

「お昼飯ができ……」

彼女は私達の様子を見て言葉を失う。私は胸がはだけてブラが露出している。カズマはズボンを脱いで下はパンツ一枚になった状態だ。そして私達の口元はお互いの唾液でびちゃびちゃになっていた。こんな姿を見たら誰が見てもエッチな事をしていると思うだろう。

「広めなきや広めなきや……カズマさんがエッチなことしてたつて広めなきや……！」

ブツブツ唱えながらアクア殿は部屋から出て行った。私達の事を誰かに広める気だろう。カズマが慌てた様子で彼女の後を追いかける。

「あいつ……！わ、悪いクレア。続きはアクアを懲らしめた後ですから！」

カズマはズボンを急いで履いて部屋から出て行く。部屋には私一人がポツンと取り残される。肝心な所で邪魔しに来たアクア殿に少し腹が立っていた。

「この昂った気持ちはどうすればいいのだ……」

あのまま勢いに任せて一線を超える予定だったのに、直前でお預けを食らってしまった。性欲だけが私の中に残っている。多分私の股も大洪水になっていいるだろう。寸止めされて私は欲求不満になっていた。

「まあ、続きはカズマが帰ってきてからにするか……」



私は性欲を満たすのは諦め、はだけた胸のボタンを一つずつ留めていく。自分で脱いだ服をまた着るのはとても虚しかった。さつきまでの夢心地を思い出して自分を励ます。思い出すのはカズマの顔。

「そうだ……！私はカズマと結婚するのだ……！」

彼とエッチな事を出来なかったのは残念だが、結婚できるだけでもとても嬉しい事だ。まずはこの幸せを噛み締めよう。彼と結婚したら結婚式を挙げよう。ウエディングドレスを着てみんなに祝福してもらおうのだ。そしていつかは子供も欲しい。

「ふふっ……最初は男の子がいいな……」

頬に手を当ててイヤンイヤンと頭を振る。カズマとの幸せな未来を想像していると、視界の端にチラリとあるものが映った。それは彼の机の上に置いてある物だ。

「これは……手紙……？」

私は吸い込まれるように手紙を覗き込む。その手紙の差出人はアイリス様だった。そう言えば彼女はカズマに手紙を送ったがずっと返事が来ないと言っていた気がする。便箋の数は十枚を超えていて、何度も彼に手紙を送ったことが分かった。私は一番上に置かれている手紙を見ると、

『お兄様、私の何がダメでしたか。嫌いにならないでください。私が全部悪かったです。嫌いな所を全部直すので手紙を無視しないでください。お願いします、返事をください。私はお兄様のことがこんなに好きなのにどうしてお兄様は私の気持ちに伝えてくれないのですか。——』

アイリス様が必死にカズマに懇願している手紙だった。彼女が何としてでもカズマと結婚しようとしているのが分かる。私は複雑な想いで彼女が綴った手紙を見ていた。

「アイリス様が可哀想だな……」

この手紙だけ見るとアイリス様がカズマにいかに執着しているか分かる。でも、彼は

一度も返事を書いていないようだ。もうカズマがアイリス様の告白を承諾することはないだろう。その事を思うとアイリス様に同情してしまう。

「そういえば——」

私はアイリス様から貰った手紙を思い出す。今朝のラブレターだ。私は怖い気持ちを抱きながらも封筒の中から便箋を取り出した。そして、中の手紙を読み進めていく。

『私と結婚したらお兄様が一夫多妻になっても構いません。クレアと結婚してもめぐみさんと結婚してもいいです。だから私と結婚しましょう。そうすれば皆と暮らせません。なぜ私じゃなくてクレアを選ぶのですか。私の方がクレアよりずっと前からお兄様のことが好きでした。私じゃダメですか。何でもしますから私を見捨てないでください。——』

アイリス様の悲痛な想いが手紙から伝わってくる。改めて彼女がカズマを好きだったことを思い知らされた。彼女の想いが全てこの手紙に詰まっている。だから、この手紙はカズマに渡すべきなのだろう。だが、——

「ごめんなさいアイリス様」

私はラブレターをビリビリに破く。耳障りな紙の音が部屋に響いた。細切れになった手紙は散り散りに部屋を舞う。これで彼女のラブレターがカズマに届く事はないだろう。最低な事をしてしまったと自分を嫌悪してしまう。でも、後悔はしていない。これは仕方ないことなのだ。

「ううっ……アイリス様……！」

それでも彼女を裏切るのは辛かった。私は彼の部屋で一人涙を流した。

## 愛する人と婚姻を！

私はドアの前で大きく深呼吸した。これから人生で一番の見せ場が始まる。私とカズマが愛し合っている事をみんなに知ってもらうのだ。私は純白のウエディングドレスに身を包み入場の合図を待つ。

参列席にはダスティネス卿やレイン殿を始めとする貴族達にカズマの知り合いの冒険者。上流階級から一端の冒険者に至るまで様々な面子が集まっていた。彼らがやって来たのは全て私達の新たな門出を祝う為。

そう、今から始まるのは私とカズマの結婚式だ。

私が彼にプロポーズしてからもう半年。相思相愛だった私達はプロポーズを機に更に愛を深めそのまま籍を入れる事になった。それから私の両親にカズマと挨拶に行ったり、カズマのパーティ仲間であるめぐみんやダスティネス卿に私達の結婚を猛反対されたりと色々あった。長い挨拶回りだったが、皆最終的には私達の結婚を祝ってくれていた。ただ一人を除いて。

私達の結婚を認めなかったのはアイリス様だ。

一度、カズマと二人でアイリス様に会いに行つたのだが、彼女は体調不良を理由に一切の面会を拒否した。それから都合の良い日時を教えて欲しいと手紙を送つてみたが、常に忙しい、体調が優れないだの様々な理由で会うことは叶わなかった。そのまま私達の結婚式の日になつてしまつたという訳だ。

彼女が私達に会わなかつたのは、カズマが私に取られたことを認めるのが怖かつたのか、単に私の事を嫌いになつたのか、真相は分からない。でも、アイリス様に認められないまま結婚するのは心に大きなわだかまりが残る。私の大切な人にこそ結婚を認めて欲しかつた。

そして迷つた末、私はアイリス様を今日の結婚式に招待した。カズマに振られた挙句、彼を奪つた女との結婚式など見たくもないだろう。だから、彼女はきつと来ない。そう頭では分かっているのだ。それなのに――

私はアイリス様が来るのを願つて止まなかつた。

「それでは新婦の入場です。会場後方の扉にご注目ください」

司会の人の合図で私の目の前の扉が大きく開かれる。私の目に入ってきたのは多く

の人、人、人。その中にアイリス様の姿が見えないか目だけを動かして探す。だが、彼女は見たらなかつた。

私は父と一緒にバージンロードを歩く。左右の参列者からは割れんばかりの拍手が上がっていた。一步、また一步と奥に立っているカズマの元へと歩んでいく。

そして、丁度真ん中辺りまで来た所でレイン殿の姿が見える。彼女に視線を送りアイリス様が来ているか目で尋ねると、首を横に振られた。『アイリス様は来ていない』という意味らしい。結局彼女には最後まで私達の結婚を認めて貰えなかつたようだ。

そのままカズマの元まで辿り着いた。私は父から彼へ腕を組みかえる。スーツ姿のカズマはいつもより輝いて見えた。折角の結婚式なのだ。今はアイリス様の事を忘れてこの時間を楽しもう。

「……クレア、すごく綺麗だな」

「か、カズマこそカッコイイぞ」

私は彼と小さな愛の言葉を囁いてバージンロードを歩く。ふと隣に目をやると私達を恨めしそうにめぐみん殿が睨んでいた。私は彼女に笑顔で応える。彼女は今にも爆裂魔法の詠唱を始めそうで、隣のダステイネス卿がどうか彼女を宥めていた。

そして、祭壇の前に着く。そこには聖職者であるアクア殿が立っていた。

「汝、クレアは。この引きこもりでニートで最弱職のカズマと結婚し、神である私とついでにエリスの定めに従って、夫婦になろうとしています。あなたは、その健やかな時も、病める時も、喜びの時も、悲しみの時も、貧しい時も、カズマを愛し、カズマを敬い、カズマを慰め、カズマを助け、その命の限り、堅く節操を守ることを約束しますか？」

「はい、誓います」

どこかおかしい誓いの言葉に参列席がどよめく。勿論私もカズマもアクア殿が何かやらかす事は想定していた。だが、その上で私達は彼女を選んだ。少し変わった結婚式も私達らしいだろう。

「はい、誓いの言葉の最中だから静かになさい」

ざわめく群衆をアクア殿が手をパンパンと叩いて静かにさせる。そのままアクア殿はカズマに尋ねる。



「汝ー、カズマは。このクレアと結婚し、固く節操を守る事を……無理じゃない？ どうせカズマさんはすぐ浮気しちゃうでしょ？」

「おい」

参列席が再びどよめく。冒険者達からは『そうだそうだ！』と好き勝手言われている。彼も『うるさいぞお前ら！』と反論していた。

「……冗談よ。汝ー、カズマはクレアを、病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も、妻として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」

「はい、誓います」

「それでは指輪の交換と誓のキスを」

カズマはアクア殿から婚約指輪を受け取る。そして私の方を見るとニツコリと微笑んだ。ああ、私はこの笑顔が好きなのだ、と自分で気づいてしまう。彼は私の左手を取ると指輪を薬指に嵌めた。

「ありがとうカズマ」

指輪の交換を終え次は誓いのキスだ。私はそつと目を閉じ彼からのキスを待った。

因みに私とカズマは今まで何度もキスをしている。それは朝出かける前の挨拶だったり、目覚めのキスだったり、愛情表現だったりと色々だが、私達はいつも軽いキスではなく、深いキスをしてきた。少し恥ずかしいが、私はディープキスが大好きだからだ。彼の口の中を私の舌で蹂躪するのが好きだ。私の口の中に入ってくる彼の舌を受け止めるのも好きだ。彼と深く繋がった気になれる口付けが大好きだった。何が言いたいかという、普段の私達のキスが良くなかったという事だ。

目をつぶっていると、彼の口が私の唇に触れる。と、同時に私は彼の口の中に舌をねじ込んだ。両手で彼の後頭部をガッシリ掴み彼の頭が後ろに引かないようにする。そのまま歯茎や歯の裏、舌を舐め、ジュールジュールと下品な音を立てながらキスをした。

私はいつも通りのキスをしたつもりだったが、カズマは両手で私の肩を掴んで離れようとする。普段と違う彼の態度を不思議に思い目を開けると、そこには顔を真っ赤にしたカズマが立っていた。ゆっくりと横の参列席を見れば皆気まずそうに目を逸らす。

「く、クレア……みんな見てるからそういうキスは二人きりの時に……」  
「!?」

ここでようやく私は自分のした過ちに気がつく。やらかした、完全にやってしまった。目を閉じたせいで二人きりのキスと誤認してしまったのだ。私は涙目になりながら彼を睨む。彼は悪くないのに。場が凍りつく中、参列席からめぐみん殿が声を上げた。

「二人とも何ですか！そんなハレンチなキスを見せてつけて、私に対する当てつけですか！もう我慢なりません！今ここで爆裂魔法を撃ちます！」

彼女が声高に宣言すると会場に居た冒険者達が一斉に逃げていく。彼らにはめぐみん殿が本気で言っているのだと伝わったのだろう。それを見て貴族達も慌てふためき、場内は一気に混乱に陥った。

「だ、誰か！あの紅魔の少女を取り押さえろ！」

結婚式場のスタッフがそう叫ぶ。みんながめぐみん殿に注目して一触即発の空気が流れていた。

「クレア」

振り向けばカズマが私の方を見てニヤニヤ笑っている。

「こういう結婚式も俺達らしくていいと思わないか?」

「これのどこが良いのだ!?!それと……す、すまない。羽目を外してしまった……」

私は彼に申し訳なかった。みんなの前で恥をかかせてしまった。しかし、彼は嫌な顔一つせず私の耳元に顔を近づけて囁いた。

「今なら誰も見てないぞ」

周りを見れば参列者は逃げ惑い、スタッフ達はめぐみんと対峙していて確かに私達のことなど誰も見ていない。彼の言葉に私はゴクリと唾を飲み込む。

「だから……さっきのキスの続きを……やるか？」

彼が皆まで言う前に私は彼に口付けした。そして彼の口の中に必死に舌を入れる。本当に彼が私の婚約相手で良かった。そう思いながら彼とデーブキスをした。

+

その後カズマが、暴れたためぐみん殿からドレインタッチで魔力を奪い、事態はどうか収まった。紆余曲折あった結婚式も無事終わり今は披露宴の最中だ。私とカズマが座っているテーブルには人がひっきりなしに訪れていた。

「カズマ、伝家の宝刀のステイルを見せてやれ！」

突然冒険者の一人がそんな事を言い出した。彼の最も厄介なスキルと言ってもいい。私もかつてこのスキルに泣かせられた事がある。私は嫌な予感がして身構えた。

「よし、俺のステイールを食らいたい奴は出て来い!」

カズマも意外とノリノリである。よし、ここは巻き込まれる前に逃げてしまおう。私は席から立ち上がり別の所へ行こうとすると、

「そこはカズマのお嫁さんにステイールするのが一番だろう!」

誰かがふざけた事を抜かした。その声がした方を私はキッと睨みつける。肝心の相手は酒で酔っているからか私の威圧に気づかない様子だった。

「ステイール!ステイール!ステイール!」

いつしか誰かの戯言は大合唱になり男達が私とカズマを囲む。もう逃げ道もなくなってしまった。私は周囲の女性陣に助けを求めるが、彼女達もステイールを恐れているせいか近寄ってこない。

だが、カズマなら私に公衆の面前で恥をかかせるような事はしないはず……!一縷の望みをかけてカズマに視線を送ると、

「しようがねえなあ！俺のステイールをしっかりと見ておけよ！」

彼はやる気満々で手をうねうねと動かす。どうやらステイールを使う気のようなのだ。もし、彼が私にステイールを使えば、間違いなくパンツを盗られる。私は彼に注意した。

「カズマ殿、ステイールを使ったら本当に怒るからな！絶対に使うんじゃないぞ！」  
「まあ大丈夫だって。俺を信じてくれ」

私が拒絶するが、カズマはどこ吹く風とまるで気にしていない。まずい、このままではパンツを取られてしまう。どうしたものかと周囲を見渡すと

男性陣に紛れ込むめぐみんの姿が見えた。さっきのディープキスの仕返しのもつもりかこちらをニヤニヤしながら見守っている。彼女の嫌な態度に私は奥歯を噛み締めた。

「それじゃあ行くぞ、『ステイール！』」

眩い光の粒子が彼の手を明るくする。私はズボンの上からパンツを押さえて必死に

下着が取られないようにした。ギュツと目をつぶり体を縮こまらせる。そして、一拍置いてカズマが歓声をあげる。

「おらあ! パンツ<sup>お宝</sup>を取ったぞー!」

カズマの手には確かにパンツが握られていた。黒の少し大人びたデザインの下着だ。そして私はズボンを確認める。股がスーサーする感じはないしあのパンツは私が履いてる物とは異なる。

「?、私は何ともないようだが……?」

あのパンツは誰の物だろう。ふと、視線を奥にやると顔を真っ赤にした少女が、立っていた。

「わ、私のパンツを返してください……!」

めぐみん殿が震える声で言う。なるほど、あの下着はめぐみん殿の物だったのか。咄



嗟に手を向けられたので目をつぶってしまったが、ステイールを使ったのは私じゃなくてめぐみん殿だったらしい。

カズマはめぐみん殿の黒のパンツを空高く掲げ、クルクルと回す。冒険者達も歓声を上げながら『パンツ！パンツ！』とコールしていた。男達が下卑た表情を浮かべる醜悪な光景だった。

「な、なぜ私なのです……！クレアにステイールを使ったはずでは……！」

「さすがにクレアに恥はかかせられないだろ。今日の主役だからな。すると丁度めぐみんが居たからちよつと下着を借りようと思ってな」

つまり、彼の中ではめぐみん殿より私の方が上ということだ。その事実にはニヤニヤとした笑みを浮かべてしまう。

「つ………！いいでしょう！もう怒りました！今度こそ爆裂魔法を撃ちます！覚悟はいいですね！」

彼女が啖呵を切って私達を脅す。だが、めぐみん殿は先程カズマにドレインタッチを

されたばかり。魔力が足りない為爆裂魔法を撃つのは不可能だ。周囲の冒険者達も彼女の言葉がハツタリだと見くびっている。

「どうせ今日は爆裂魔法を使えないだろ」

めぐみん殿が懐から石ころを取り出す。その石は紫色の妖艶な輝きを放っていた。私も見た事がある。あれはコロナタイトだ。

「おい！頭のおかしい紅魔の子が爆裂魔法を撃つ気だぞー」

誰かの叫び声と共に冒険者達は混乱に陥る。先程と似た光景に私は顔を綻ばせた。彼の言う通り、確かにこういう結婚式が私達らしいかもしれない。

「……………ここにアイリス様がいたらな……………」

私は暴れ回るめぐみん殿を見ながら心の中でそう思うのだった。

## この二人の花嫁に選別を！（R15）

二回も暴れたということでもぐみん殿は式場から追い出された。一悶着あったが、披露宴は滞りなく進み、絶え間なく訪れていた出席者達の列も捌けている。私はカズマと二人の時間を楽しんでいた。

「レイン殿によるとアイリス様は披露宴に来ないそうだ」

私達が話しているのはアイリス様のこと。彼女は結局最後まで私達の結婚式には来なかった。

「そうか……やっぱりアイリスは来てないのか」

彼が少し残念そうに呟く。もうそろそろ披露宴も終わってしまう。このままアイリ

ス様に認められずに結婚してしまうのだろうか。

「ああ、レイン殿にも確認したが、アイリス様は式には行かないと断固として拒否していたらしい」

元々アイリス様はレイン殿と一緒に来る手筈だった。彼女も必ずアイリス様を連れてくると言っていたが、アイリス様が部屋に引きこもってしまい為す術がなくなっただけだ。

「……なあ、クレア」

カズマは世間話でもするかのように聞く。

「俺と結婚して良かったか？後悔はしていないか？」

今更彼との結婚を後悔する訳がない。ただアイリス様と仲違いしたのがショックなだけで。かと言ってカズマをアイリス様に譲る事も出来ない。そう、全ては仕方ない事

なのだ。

「……ああ、結婚して良かったに決まっている。アイリス様の件は残念だが、カズマが傍に居てくれるだけで私は幸せなのだ」

私の言葉を聞くとカズマは『そうか……』と小さく呟いて、グラスに注いであるシユワシユワを飲む。彼もアイリス様の告白を断ったことに罪悪感を感じているのだろうか。

私達にとってアイリス様は大切な人で、あまりにも大きな存在だった。それだけ私達に及ぼす影響が強かったのだ。だから彼女には是非来て欲しかった。

「やはりアイリス様は来ないようだな……。そろそろ披露宴もお開きにしようか」

披露宴を終わろうとしていたその時だった。会場の扉がギイッと開く。私はまさかと思つてドアの方を注視する。そしてドアから人が出てきた瞬間、会場には大きなどよめきが起こつた。

そこには純白のウエディングドレスに身を包むアイリス様がいた。

カズマも私も貴族も冒険者も全員がアイリス様に釘付けになっている。今日は私とカズマの結婚式だ。なぜ部外者のアイリス様がウエディングドレスを身にまとっているのか。そんな疑問を他所にアイリス様は一步ずつ会場の中を歩いてくる。

「お、おい！誰かあの人を止めろ！」

職員の誰かがそう叫ぶ。だが、誰もアイリス様を止めようとしなかった。王族である彼女を止めることなど誰にもできない。

そしてアイリス様は私とカズマが座っているテーブルの前まで来た。アイリス様がゆっくりと口を開く。

「お久しぶりですお兄様」

アイリス様は私には目もくれずにカズマに話しかける。少し見ない間に彼女は身長がすくすくと伸び、豊かな双丘にくびれた腰、どれもが大人の女性の姿へと変貌していた。

「……ああ、久しぶりだなアイリス。随分と大きくなつたんじゃないか？」

カズマは敢えてウエディングドレスの事には触れず返事をする。

「ええ、前よりもずつとお兄様の好きな女性の理想の姿に近づいたつもりです」

アイリス様は一体何を考えているのだろうか。私の結婚式を壊しに来たのか、それともカズマとまだ結婚するつもりなのか。私は固唾を飲んでアイリス様を見守つた。

「今日はお兄様の本当の気持ちを聞きに来たのです」

「本当の気持ち……?」

「ええ、お兄様が本当は誰を愛しているか教えて欲しいのです」

アイリス様はまだカズマを諦めていなかったようだ。彼に自分の事を好きだと言つてもらいたいのだろう。カズマはアイリス様を傷つけないように、しかしハッキリと答える。

「俺はクレアを愛している。これは本心だ」

私は彼の愛の言葉を素直に喜べなかった。アイリス様がここまでしたのに振られる事に同情してしまったのだ。だが、彼女もしつこく食い下がる。

「……私の事は?」

「?」

「私の事は愛してくれないのですか?」

彼女は真剣な顔で聞く。多分心は悲しんでいるが、感情に蓋をしているのだろう。かつての私と同じだ。それでもカズマはキツパリと断る。

「ああ、俺はアイリスの事を異性として愛することはない」

カズマはアイリス様を哀れに思いながらもそう言った。彼女の表情に陰りが見える。そして小さく『そうですか』と言うと彼女は踵を返して会場を出て行くこうとする。

アイリス様の様子を見ていた周りの群衆も自然と彼女が通る道を開け、遠巻きから彼



女を見守っている。そのままアイリス様は会場の扉を開け帰って行つた。

「アイリス、大丈夫かな」

隣のカズマが誰に言うでもなく呟く。先程の事は今までで最も盛大な振られ方と言つてもいいだろう。折角ウエディングドレスまで着たのに、みんなの前で断られたのだ。

「私がアイリス様の様子を見て来る」

彼女の事が心配で私が後を追いかける事にした。今ここで行かなければずつとアイリス様と仲違いしたままだ。それに半年間彼女に会えなかつたのですつとアイリス様と話したかつた。私は走つて会場を抜ける。左右を見渡すと花嫁姿のアイリス様が廊下の奥にいた。

「アイリス様！」

私が声を上げるとアイリス様が振り向いて私を一瞥する。だが、すぐに前を向き私から離れて行った。私は彼女の後をついていく。

「ごめんなさいアイリス様、カズマを奪ってしまつて」

スタスタと歩く彼女に私は横から声をかける。その顔は涙で滲んでいた。やはり傷ついていたようだ。

「定期的に二人でアイリス様の城を尋ねに行きます。また二人でお話しましょう。話したい事が沢山あるのです」

私の言葉を聞いたアイリス様がピタリとその足を止める。

「……何の嫌がらせですか？」

低い声だった。

「い、嫌がらせ等ではありません。ただアイリス様と今まで通り接しただけで……」  
「私にお兄様を譲ってくれると、クレアが言っていました。あれも全部嘘だったのですね。本当はお兄様に振られた私の事を嘲笑あざわらっていたのでしょうか」

アイリス様は肩で息をしながら言葉をまくし立てる。その顔は怒りや悔しさに満ち溢れていて私はかける言葉が見当たらなかった。

「クレアがいつも曖昧な事を言うから私はお兄様と結婚できると思っていたのです。それなのに……どうして今更お兄様を奪っていくのですか！私を傷つける為にわざとやっていたのでしょうか！」

レイン殿が昔言っていた。『クレア殿が明確な答えを出さなければ出さない程、アイリス様を傷つけることになる』と。私は今になって初めてその言葉の意味に気がついた。

「……すみません、言い過ぎました。でも、今のクレアを見てみると私の中でどんどん嫌な思いが溜まっていくのです。少し一人にさせてください……」

アイリス様はそう言い残すと、どんどん歩いて行き私から離れていく。彼女にそこま  
で言われて私は追いかけることが出来なかった。ただ小さくなつていく花嫁姿のアイ  
リス様をじつと見ていた。

+

披露宴が終わつた後、私はすぐにアイリス様に手紙を書いた。カズマを奪つてしまつ  
た事やアイリス様に嘘をついてしまつた事を丁寧に謝罪した。それでも彼女からの返  
事はなかつた。

私は毎週彼女に手紙を書いた。きつと彼女は私の手紙を読んでいるはずだと信じて  
いた。出来るだけカズマの話題は出さないようにして、アイリス様が興味のある庶民の  
料理について詳しく書いた。だが、返事は来なかつた。

月に一度程、城にも彼女の様子を見に行つた。今日こそは会えるかと思つていた  
が、何度訪ねても面会してくれなかつた。

やはりアイリス様は私の事が本当に嫌いになつてしまつたのかもしれない。その事  
を思うと胸が痛かつた。

そして私がカズマと結婚式を挙げてから一年の月日が経った。今日は朝から城に行つたが、とうとう城に入ることすら許可されず門前払いされたのだ。私は憂鬱な気持ちで家に帰る。

「ただいま、帰つたぞ」

「おかえりー」

家の中からカズマの返事が聞こえる。私がアイリス様の護衛を辞めた日から私は彼の住む屋敷に居候いそうろうしていた。元々は二人で新居に住む予定だったが、めぐみん殿とダステイネス卿が、カズマが屋敷から出て行くことに大反対し、結局私が彼の屋敷にお邪魔することになったのだ。

「クレア、どうだった？アイリスには会えたか？」

リビングに入るとカズマが聞いてくる。私は首を横に振つて彼に答えた。だが、そんな事よりも彼の隣に陣取っている少女が鼻につく。

「おい、めぐみん殿。私の夫に近づき過ぎではないか？」

カズマはソファに座って紅茶を飲んでいる。その横でめぐみん殿がベッタリと彼の腕に引っ付いていた。

「別にパーティ仲間ならこれくらい普通ですよ。それよりいつからクレアがカズマの夫になったのですか？」

めぐみん殿はいつもこの調子で事あるごとにカズマを誘惑している。私は彼を奪われないように日夜彼女を監視しているが、最近はダステイネス卿まで薄着でカズマの周りをうろつくようになった。私は常に彼女らを警戒しているのだ。

「ちゃんと結婚もしているし、式も挙げた！全くカズマからも何か言ってやれ……」

「おう、お前ら、そんなに俺を取り合うな」

「なんでしよう、その言い方は無性にイラッとします……」

私とめぐみん殿がカズマを冷めた目で見つめる。

「……そ、そうだ。クレアに手紙が届いていたぞ」

カズマは分が悪いと思ったのか話題を変える。そして私に封筒を渡してきた。彼に浮気しないように厳重注意したい所だが、私はその手紙をとりあえず受け取る。封筒の中身を開けて、その差出人を見た瞬間、私は言葉を失った。

手紙はアイリス様からだった。

もう彼女とは一年以上話していない。完全に消息を絶っていたのに急に手紙が来た事に驚いた。だが、それ以上に喜ぶ気持ちが湧き出てくる。私は急いで手紙を開ける。

『久しぶりですクレア、そちらは元気ですか？いつも私に手紙を書いてくれてありがとう。返事は書いていませんが、内容には全て目を通しました——』  
「食い入るように手紙を見てどうかしましたか？」

めぐみん殿が私に尋ねてくるが彼女の発言は無視した。今はアイリス様の手紙を見る方が大事だ。カズマは何となく手紙の差出人が分かっていたのか、何も聞いて来なかった。

『——本当にクレアにはお世話になりました。だからまずはクレアに謝りたいのです。クレアはいつも私に寄り添ってくれたのに、その恩を仇で返したことです。ずっと後悔していました。当時の私はお兄様に夢中で周りが見えていなかったのです。本当にごめんなさい——』

「だ、大丈夫ですか？酷い顔をしていますよ」

めぐみん殿が私の様子を見て心配そうに尋ねてくる。勿論彼女の事は無視だ。

『——本当はクレアのことを大好きでした。でも、お兄様の事を考えるととても胸が痛くなってしまいます。好きなクレアの事がどうしても憎くなってしまうのです。だから私は暫くクレアと距離を置きました。私の中で心の整理をしたかったのです——』

私はてつきり彼女が私の事を憎んでいるのだと思っていた。でも、状況はもう少し複雑で、アイリス様は私を憎まないように必死に感情を抑えていたらしい。その事を知って少し報われたような気がした。



『——でも、まだ心の整理は出来ていません。お兄様の事を思うと今でもクレアが悪女に見える時があります。だから、私の心の整理がいたら、私がクレアを心から信頼出来たら、その時はまたお城にいらして下さい。いつかクレアに会える日を楽しみにしています』

手紙はそこで終わっていた。私は何度も手紙を読み返す。アイリス様が私の為に書いてくれた文を一言一句目に焼き付けた。

「……アイリスとは仲直り出来たか？」

カズマが私に聞いてきた。

「……分からない。ただ今までより少し前進したとは思う」

手紙をもう一度見る。私に会える日を楽しみにしていると書いてあった。その手紙をギュッと抱きしめる。

「待っていますアイリス様……」

私はその手紙を大切に封筒の中に入れる。私の様子をめぐみん殿もカズマもただ見守っていた。

「夜ご飯が出来たわよー」

呑気なアクア殿の声で我に返る。アイリス様のことにも夢中になりすぎたようだ。私は涙が溢れないようにして日常生活へと戻っていく。

「クレア、私の下っ端の事で困ったらいつでも私を頼ってくださいね」

めぐみん殿が優しく言うってくれるのがあるがたい。そう思いつつアクア殿のいるキッチンへと脚を進めた。

アイリス様から手紙を貰ったその日の夜、私は風呂から上がり脱衣場で鏡とにらめっこしていた。私の左手にはいつも着ているシンプルなパジャマ、右手にはかなり際どいハレンチなネグリジエが握られていた。

「どっちの服を着るべきだろうか……」

私はかれこれ十分間、鏡の前で迷っていた。普段なら迷わずシンプルなパジャマを選ぶだろうが、今日は違う。カズマを性的に誘惑したいのだ。

私の頭に思い浮かぶのはアイリス様の手紙。あの手紙には『私の心の整理がいたらクレアとお兄様に会いたい』と書かれていた。それは即ち、再びアイリス様がカズマに接触するという事。カズマをアイリス様に取られないように今の内にマーケティングしておこうと思ったのだ。

私は散々悩んだ末、右手の服を選んだ。そう、ハレンチなネグリジエだ。実際に着て鏡を見てみると確かに際どい。胸元もザックリ開いているし、股の所も透けていて下着がうつすら見えている。正直言ってかなり恥ずかしい格好だ。だが、この服なら確実にカズマを落とせるはず。

誰かに見られる前に早くカズマの部屋に突撃しよう。特にめぐみん殿やダスティネス卿にこの姿を見られたら、この上なく恥ずかしい。私は脱衣場から顔だけ出してそつと左右の様子を見た。……誰もいないようだ。私は静かにドアを閉めカズマの部屋へ向かう。

脱衣場からカズマの部屋まではそう遠くない。私は急いで彼の部屋へと走った。そして、廊下を曲がろうとして、

「全くカズマはどこに行ったのでしょうか……」

廊下を曲がろうとするとめぐみん殿の姿が目に入る。私は急いで壁に身を隠しそつと様子を窺った。カズマの部屋の前でめぐみん殿がウロウロしている。

「まあこのまま部屋の前で待っていたらいつかカズマからやって来るでしょう。しばらく待ちますか」

めぐみん殿はカズマの部屋の前で座っている。彼女の話を聞くと、どうやら彼はまだ部屋に戻って来ていないようだ。それなら私が先に彼を見つけてしまおう。

私はすぐにUターンして脱衣場の方へと戻る。カズマがこの時間に屋敷に見当たらないのなら外に出ている可能性が高い。庭に夜風に当たりに出ているかもしれない。私は庭へ続く廊下を曲がろうとして、

「全く、カズマはどこに行つたのだ……」

危うくダステイネス卿と鉢合わせする所だった。私は慌てて壁に身を隠す。さつきからめぐみん殿と言ひダステイネス卿と言ひ何故こんなにも邪魔が入るのだ。私はそつとダステイネス卿の様子を窺う。彼女もカズマを探しているようだ。

「一度カズマの部屋に行つてみるか……」

ダステイネス卿がそう言いながら私の方に近づいてきた。私は急いで彼女から逃げ。だが、ダステイネス卿はカズマの部屋に向かうと言つていた。このままじゃめぐみん殿とダステイネス卿に挟み打ちにされてしまう。

「ど、どうしよう……!?このままでは、この際どい姿を見られることに……」

前にはめぐみん殿、後ろにはダスティネス卿。完全に逃げる所がなくなってしまう。私の頭は急速にフル回転し、解決策を模索する。そして、一つの案が私の頭の中に舞い降りた。

私はすぐに走り自分の部屋に入る。私が普段寝泊まりしている部屋、それは脱衣場とカズマの部屋の間にあった。自分の部屋に隠れば彼女らに見つかることはない。

「ふう………どうにか逃げきれたな………」

そう考えていたのだが、一つ誤算があった。私が後ろを振り向くとカズマが居たのだ。

「く、クレア？そんなに慌ててどうしたんだ？」

私は驚きすぎて腰が抜けそうになった。

「お、驚かせるなっ………！び、びつくりしたではないか……。そもそもなぜお前が私の部

屋にいるのだ」

「わ、悪い。たまにはクレアと二人で話したくてな。というか今日のクレアの格好……」

彼が私の顔から視線を徐々に下にズラしていく。私の胸元、下着を舐め回すように見つめてくる。私は咄嗟に自分の体を手で隠した。

「あ、あまりジロジロ見るな……こ、これでも結構恥ずかしいのだ……」

「お構いなく」

「私が構うのだ！」

私は彼に文句を言いながらも内心ホツとしていた。この恥ずかしい格好も彼にはちゃんと効果があつたみたいだ。私は彼が座っているベッドに腰かける。

「遂にクレアも痴女になったか」

「だ、誰が痴女だ！わ、私は痴女では……ううっ……痴女では……ない……」

彼の痴女という言葉を否定できなかった。私の声が尻すぼみに小さくなる。すると

カズマが私の自信がない様子を見て可哀想に思ったのか、一つ提案してきた。

「正直今のクレアはめっちゃくちゃ可愛いぞ……。理性を保つのが大変なくらいだ」

彼のズボンを見れば息子がテントを張っている。彼も興奮しているのだ。私は彼の顔に目を移す。そこには笑顔のカズマがいた。私が一番好きな彼の笑っている顔。

自然と私も顔を近づける。彼が私にキスをしようとした。でも、私はそつと人差し指を彼の口に当てキスを拒んだ。

「どうした、クレア？」

彼が私に尋ねると同時に部屋のドアがドンドン、と叩かれる。誰かが部屋に来た気配を感じて私はキスをやめたのだ。

「クレア、ここにカズマが来ていませんか？」

めぐみん殿の声だ。そういえばさつきカズマを探していると言っていた気がする。



「すまない、ちよつとめぐみん殿の相手をしてくる」

私は彼女の言葉に答えようとベッドから離れる。だが、私の腕をカズマに掴まれた。どうしたのだと、振り向こうとして――

カズマに口を塞がれた。

不意打ちのキス。今まで何度もキスをしてきたが、彼からキスをしてくれたのは初めてだ。そして彼はそのまま舌を私の口に入れてきた。デープキスだ。舌を絡め合うキスから歯茎、歯の裏と次々に蹂躪されていく。

「クレアー、寝ているのですか？」

ドアを隔てて向こうにはめぐみん殿がいる。私達のデープキスのグチュグチュという下品な音が外に漏れてないか不安になる。だが、それ以上にイケナイ事をしている背徳感で私は興奮してしまった。

「めぐみん、今日のクレアー殿はアイリス様の手紙を読んでから様子がおかしいのだ。今

夜はそつとしておいてあげよう」

「むう……分かりました」

ダステイネス卿がそう言うのと外から二人が立ち去っていく足音が聞こえる。私達はそれから暫くキスをしていたがやがてゆつくりと顔を離す。

「はあ……カズマ……！」

私はカズマの名前を呼びながら更にキスをねだる。だが、少し落ち着いた様子のカズマが私の肩に手を当てそつと顔を離した。

「？、どうしたのだカズマ？」

「クレア、無理してないか？」

彼が何を言おうとしているのか分からない。私は首を傾げて彼に話の続きを促した。

「さつきダクネスが言ってたけど、今夜その格好をしてここに来たのもアイリスの手紙

が原因だろ？ やつぱり今でもアイリスの事を気にしているんじゃないか？」

私の考えは彼に読まれていたようだ。確かにアイリス様の手紙が理由で彼を誘惑している。でも、それは決してアイリス様に遠慮している訳ではない。

「そんな事はない。私はカズマが大好きだからここまでしているのだ。この格好も自発的に思いついた」

「本当に？」

まだ何か言うカズマの口を唇で塞ぎながら私は彼をベッドに押し倒す。彼の上に馬乗りになって硬くなっている彼の息子を足でげしげし押しした。カズマが喘ぎ声に似た声を上げる。

「アイリス様の事は忘れろ。私の事だけを考えてくれ」

私はそう言って彼を誘惑した。カズマも私に応えるように舌を絡めてくる。もう誰も私達の愛を止められない。

く完く

その晩、私はカズマと一線を超えた。私は再びアイリス様を裏切った。

### 第三章 カズマとクレアのその後

この恋人達に祝福を！

(クレア目線)

「カズマ、今日こそ……今日こそは……！」

夜中、皆が寝静まる頃。私はカズマの部屋に遊びに来ていた。ベッドに彼と二人で腰掛けている。

「ああ、めぐみんもダクネスももう寝たはずだ。アクアも今日は冒険者ギルドで宴会をするから帰ってこないはず。今日こそ“アレ”ができるはずだ。」

私とカズマが今から何をしようとしているのか。それは私達の格好を見て貰えば分

かと思う。私はパンツとブラだけを身につけた下着姿。そしてカズマはパンツ一つしか身につけていない。

「じゃあカズマ……久しぶりにやるか?」

「お、おう。……今日のクレアも凄く綺麗だぞ」

そう、私達は今からエッチをしようとしている。今まで彼と何度もエッチしようとして来たのだが、アクア殿が空気を読まずに私の部屋に入って来たり、めぐみん殿がカズマと一緒に寝ると言い出したり、ダステイネス卿が薄着でカズマを誘惑したり……。とにかくいつも邪魔されてきたのだ。

だが、それも今日で終わり。私は他の皆が寝静まった頃を見計らって、こっそりカズマの部屋にやって来た。今日こそは……今日こそはカズマと一線を越えられるはず……!

「と、とりあえずキスするか?」

「こそ、そうだな!」

久しぶりの行為に私達は酷く緊張してしまっている。今までどうやって彼と接してきたのか分からない。でも、ここは私が大人の女性として彼をリードしないと……！

「よし、か、カズマ！目をつぶってくれ！」

「お、おうー！」

カズマは目をぎゅつとつぶる。私から彼にキスをしよう。そう思って彼の頬に手を当て口付けしようとする、

ドンドンドン、と騒々しい音がする。急な音にビツクリして少し声が出てしまった。誰かがこの部屋のドアを叩いているらしい。

「カズマ！起きてますかー！」

この声の主はめぐみん殿だ。夜中だと言うのに、彼女は遠慮なく大声でカズマを呼ぶ。めぐみん殿はもう寝たと思っていたのに、私がカズマの部屋にいる事を嗅ぎつけたみたいだ。

「どうする?めぐみんの相手をするか?」

カズマが私に聞いてくる。折角彼とエッチできると思っていたのに、彼女に邪魔されてしまう。

「はあ……流石にこのままエッチは出来ないだろう。カズマが出てやってくれ」

私の返事を聞くとカズマはパンツ一丁で出ていく。私は下着姿を見られるのが嫌なので毛布で体を隠して外の様子を窺った。

「はい、何か用かめぐみん?」

「カズマ、ここにクレアが来ていませんか?」

ドアを開けるなりめぐみん殿が聞いてくる。

「クレアならそこに居るけど。それより今何時だと思ってるんだよ。子供は寝る時間だぞ」



「私は子供じゃありませんが。今日はカズマと一緒に寝ようと思いましたが。どうですか？カズマは私と寝るのは嫌ですか？」

めぐみんの手元を見れば枕が握られている。彼女も私達が行為をしようとしていた事くらい分かっているはずだ。敢えて私達の邪魔をする為に気づいてないフリをしているのだろう。

「あのなめぐみん、俺達の格好を見て何か思わないのか？」

「？」

「俺はパンツ一丁。クレアは毛布で体を隠しているが、ベッドの横には彼女のパジャマが置いてある。つまり、彼女も下着姿なんだ」

カズマが諭すようにめぐみん殿に言う。いいぞ、もつと言ってやってくれ。

「ほう、じゃあ私も下着姿を見せてあげましょうか？カズマもクレアなんかじゃなくて私に頼ってくれれば、いつでも見せてあげますよ」

「ほ、本当に見せてくれるのか……？」

ダメだ、彼もめぐみん殿の誘惑に負けそうになっている。仕方ないので私がめぐみんの相手をする。

「おいめぐみん殿、人の情事を邪魔して非常識だとは思わないのか?」  
「ふっ、私は常識なんてものに囚われる程度の人じゃないのです」

ダメだ、話を通じない。もう彼女には私達の関係をハッキリと見せつけてやるしかないようだ。私は下着姿のままベッドから降りてカズマの元へと歩く。

「カズマ」

「ん?どうしたクレア……」

振り向いた彼に私はキスをした。彼の後頭部を掴み舌をねじ込んで唾液を欲する。めぐみんの前という事で、カズマは恥ずかしがってキスをやめようとするが、私は彼の口を離さなかった。

「なっ……私のカズマに何をしているのですか!？」

めぐみん殿は激昂して私に掴みかかってくる。私はそこでようやく口を離しめぐみん殿に向き直る。

「見ての通り私とカズマは男女の仲だ。私達はこれからお互いを愛し合うつもりだ。分かったらさっさと立ち去ってくれ」

「うぐっ……!」

めぐみんは悔しそうに歯を噛み締めて私を睨む。カズマが私のものであるとアピール出来たことに胸が高鳴った。

「カズマは私が誘惑したらコロツと落ちるような人ですからね。別にカズマが貴方のもになった訳じゃありませんから。私はまだ諦めていません」

「ほう、せいぜい頑張るのだな」

めぐみんは私を暫く睨んだ後ぶいっと踵を返して部屋から出て行った。どうやら私

は女としての勝負に勝てたみたいだ。

「ごめんなクレア、折角盛り上がったのにめぐみんなが邪魔してしまって」

カズマは後ろ手でドアを閉め軽く謝る。

「別にカズマが謝ることはない。それに私だって好きな人を諦めたくない気持ちは嫌という程分かるからな……」

かつてアイリス様とカズマを奪い合った時もそうだった。私は彼女と仲違いしてでもカズマを選んだのだ。

「……何だかめぐみんなが来たせいで気持ちも盛り下がったな……」

「そ、そうだな……」

ヤバイ、この流れだとまた今日もご無沙汰になる。めぐみんな殿がココ最近邪魔してきたせいもあってもう一週間もカズマとエッチな事が出来ていないのだ。少しでもカズ

マの成分を吸収したい。

「あのカズマ……、今日はキスだけすると言うのはどうだ？」

上目遣いで彼にお願いしてみる。エッチが出来ないならせめてキスだけでも。私の顔を見た彼はフィツと視線を逸らして顔を赤くした。

「お、おう！クレアがしたいなら、いくらでもするぞ！」

彼は照れ隠しなのか、声を大きくして賛同する。これで彼の言質は取れた。後は遠慮する必要はない。

「よ、よしじゃあキスするか、ドンと来い！」

カズマは変に身構えて目を閉じる。普通こういう時は男の人からキスしてくれる物じゃないだろうか、と少し文句を言いたくなる。めぐみに邪魔された事で不満も溜まっているし、彼を少しいじめてあげたい。

そんな事を思っていると私の中で一つの考えが思いつく。よし、今からカズマを徹底的にいじめようと。私はパンツ一つだけを身につけて目をつぶるカズマを押し倒す。そして彼のパンツを脱がせていく。

「く、クレア?急にどうしたんだ、キスするんじゃないのか」

「ああ、キスするぞ。だが、別に口にキスするとは言っていないだろう」

私は脱がした彼のパンツの下にある息子にキスをした。そして口に啞えてジュールと彼の息子を吸う。

「ちよつと!クレア、待っ……!そ、そこは汚いから……」

「カズマに汚い所なんてないぞ」

カズマに汚い所なんてない。彼は私の頭を掴んで必死に離れようとする。私は舌先でチロチロと彼の息子の先端を舐めたら彼の腰がビクンと跳ねた。

「待て待て待て!一旦待てクレア!」

カズマの言葉に私は一度彼の息子から口を離す。私の唾液で彼の息子はテカテカと輝いていた。カズマは肩で息をしながら私の肩に手を置く。

「はあ……はあ……このままじゃクレアの口の中に出そうだから……はあ……はあ……一旦落ち着こう……」

カズマは私の口の中に出すのを遠慮しているようだ。これは私が好きでやっている事だから気にする必要はないのに。でも、彼の弱っている姿を見ると私の中の嗜虐心に火がついてしまう。もつと彼をいじめてあげたい。

「そうか。なら出さないように我慢してくれ」

そして私は再び彼の息子をジュルジュルと吸い上げる。彼の愚息は完全に硬くなっている口の中から熱が伝わってきた。カズマは私の頭を押しして抵抗していたが、私が舌先で息子を舐め回すと手から力が抜けていく。

「や、ヤバい……もう出るから……うぐつ……本当にヤバいつて……」

口の中でカズマの息子がビクビクと跳ねたのが分かった。それを合図に私は口をパツと離す。彼の息子を見るとまだ白い液体は出ていない。まだ我慢しているようだ。

「カズマは偉いな。ちゃんと我慢できているじゃないか」

「ううっ……」

カズマの射精感が引いたのを確認すると私はまた彼の息子を啜える。舌の表面で彼の亀頭全体を触り敏感な所を刺激する。

「く、クレア!今度こそ出る!口の中に出すぞ!」

カズマは射精欲が抑えられなくなったのかそう言うってくる。私は暫く彼の顔を見つめた後、ゆつくりと息子から口を離した。そして彼の剛直の根元をグツと手で押さえる。



「ダメじゃないかカズマ。ちゃんと我慢する約束だろう？男ならこれくらいの刺激に耐えないといけないのだぞ」

カズマは射精しようとするが、私が彼の息子の根元を押さえているので射精出来ないみたいだ。辛そうな彼の顔を見ると私も興奮してきた。彼の辛そうな顔をもっと見たい。

「はあ……はあ……出したい……出したいクレア！」

「ダメだ。今日はキスだけしかしない予定だろう？カズマも気持ち盛り下がったと言っていたじゃないか。今日はエッチしたくないのだろうか？」

「したい……めちゃくちゃしたい……！」

よし、彼の興奮も最高潮に高まっているようだ。後は溜まりに溜まった彼の精液を放出させてあげるだけ。私はカズマの息子に顔を近づけて息をフーッと吹きかける。それだけでカズマの腰がビクビクと動いた。

「何をしたいのだ？ちゃんと口に出して言ってもらわないと分からないぞ」

「クレアの口の中に出したい……!もう我慢できないから……!」

「ふふっ、いいぞ中に出しても」

私はカズマの息子を唾える。熱を帯びたそれは大きく反り返っていてもう暴発しそうなのが分かった。私は硬い肉棒を甘噛みしながら刺激する。カズマは荒い呼吸のまま私の頭を掴んだ。

「出る……!出すからな……!いい、イグッ……!」

それからドクドクと私の口の中に何かが放出されたのが分かった。彼の精液だろう。私は一滴も口から零れないように肉棒に蓋をして彼の龟头を舐める。

「はぁ……はぁ……」

カズマは肩で息をする。私は息子から口を離し精液を口から垂らす。そして遅れて彼の精液の味が伝わってきた。

「に、苦っ……」

カズマの精液はとても苦かった。好きな人の液体だからもうちよつと美味しいのかなと期待していた自分が馬鹿らしい。とにかく不味い。

「だ、大丈夫かクレア？辛かったら水でうがいしてもいいからな」

カズマは近くにあったコップを手に取りクリエイトウォーターで水を注いでくれる。彼の前でみつともない姿を見せるのは嫌だが、精液が苦くて少し吐きそうだ。仕方ないから私は彼からコップを受け取った。

「うげえ……に、苦い……」

水と共にコップに精液を吐き出す。カズマは弱っている私の背中を優しく撫でてくれた。

「よしよし、よく頑張ったなクレア」

さっきまで私が彼の事をリードしていたのに、今では私が慰めてもらっている。少し情けないが、彼の優しさに惚れてしまいそうだ。

「すまないカズマ、今日は久しぶりのエッチだからと興奮しすぎてしまったようだ」「気にするなよ。俺だって凄く気持ち良かったから。ほら、ベッドに横になつてくれ」

カズマはコップを机の上に置いて私を寝させる。もう彼は一回出しているから今日はこのまま二人で寝るのだろう。久しぶりに彼を気持ち良くさせる事が出来て良かった。

「それじゃあ次は俺がクレアを気持ち良くさせるから」  
「…………え?」

カズマは寝ている私のパンツを脱がせる。急な行動に私は何の抵抗も出来なかった。そしてカズマは私の股に顔を埋める。そのままペロペロと私の恥部を舐め始めた。

「ちよつと！カズマ、待っ……！そ、そこは汚いから……」

「クレアに汚い所なんてないぞ」

それはさつき私が彼に言ったセリフ。彼も私にされた事を根に持っていたのか。そのまま私はカズマの舌でイカされる。何度も何度も。

「クレア、愛してるぞ」

彼が甘い言葉を私に囁いてくれる。それに応えるかのように私は喘ぎ声をあげた。